

財團法人 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第67集

きた どう て  
北 道 手 遺 跡

1996

財團法人 愛知県埋蔵文化財センター



朱をといた鉢(112)



線刻絵画土器(395)

## 序

濃尾平野は全国でも有数な穀倉地帯であります。こうした安定した生産基盤を背景に、この地では縄文時代以降現代に至るまでそれぞれの時代ごとに文化の花を開かせてきたことでしょう。私たちは今こうした歴史の大きな流れのなかで、その恵みを感じながら生活しています。

このたび愛知県一宮市と富山県小矢部市とを結ぶ東海北陸自動車道の建設事業が、濃尾平野部を縦貫することになりまして、わたしども財愛知県埋蔵文化財センターは、愛知県教育委員会より委託を受けまして平成2年度より一宮市内におきまして発掘調査を実施してきました。調査成果はそれぞれの発掘調査遺跡ごとに現地説明会を行ってきましたが、ここに平成5年・6年度に実施しました北道手遺跡の報告書を刊行いたしました。今後とも広く皆様のご理解を賜りますようお願い申しあげます。

平成8年8月

財愛知県埋蔵文化財センター

理事長 安 部 功

## 例言

- 1 北道手遺跡は、愛知県一宮市大字光明寺字北道手地内に所在する古墳時代前期を中心とする弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡である。
- 2 本報告書は、平成5年4月～10月、平成6年12月にかけて実施した東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査の記録である。調査総面積は5,887m<sup>2</sup>に及んだ。
- 3 調査は東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査として、日本道路公團・愛知県土木部より愛知県教育員会を通じて委託を受け、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 北道手遺跡は、平成4年に開始された田所遺跡の最も北に位置する地点として調査を開始した。平成5年度の年報では田所遺跡A～D区として報告してきたが、調査の結果、田所遺跡とは時代の異なる調査成果を得られた。その結果、田所遺跡から切り放して北道手遺跡として報告する。
- 5 調査を進めるにあたっては、本センターの理事および各専門員、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導を得たほか、一宮市教育委員会、日本道路公團名古屋建設局、日本道路公團一宮事務所、愛知県土木部一宮事務所ほか関係諸機関のご協力を得た。
- 6 本報告書をまとめるに下記のあたり多くの方々から御助言・御指導を戴いた。記して感謝する次第です。  
赤羽一郎・遠藤才文・大熊茂弘・尾野善裕・金子健一・久保楨子・柴垣勇夫・城ヶ谷和広・鈴木元  
高田康成・土本典生・中野晴久・藤沢良介・北条文献・渡辺博人（順不同・敬称略）
- 7 報告書作成の過程で以下の方々の協力を得た。  
八木佳素実・安藤豊子・中馬妙子・小塙山洋子・深川進（写真撮影）
- 8 本書の執筆は第4章第1節を鬼頭剛 第2節を服部俊之 第3節をパリノ・サーヴェイ株式会社  
が行い、その他は高橋信明が担当し、編集も高橋が担当した。
- 9 調査担当者は以下の通りである。  
93年度の調査：太田芳巳（主査）西原正佳・鬼頭剛・高橋信明（調査研究員）  
94年度の調査：小澤一弘・増沢徹（調査研究員）・高橋信明（主査）
- 10 発掘調査に係わる記録類・出土遺物は専愛知県埋蔵文化財センターにて保管している。

# 目 次

## 第1章 はじめに

第1節	調査の経緯	1
第2節	調査の概要	2
第3節	周辺の環境 (1)地理環境 (2)歴史環境	2

## 第2章 遺構

第1節	基本層序	6
第2節	検出遺構	7～27

## 第3章 遺物

第1節	土器	28～65
第2節	その他	66～71

## 第4章 科学分析

第1節	地形(鬼頭)	72～74
第2節	地震痕(服部)	75～79
第3節	胎土分析(パリノ・サーべ)	80～86

## 第5章 考察

第1節	北道手遺跡の位置づけ	87～91
第2節	着飾った土器	92～99
第3節	まとめ	100～103

## 挿 図 目 次

図1 調査区位置図	3	図32 II期土器実測図A区 S D34・37・38・ 44・64・65・46
図2 周辺の遺跡分布	5	図33 II期土器実測図A区 S K59・68・99・47
図3 基本土層図	6	図34 II期土器実測図B区 S D91・103・ 104 ..... 48
図4 造構全体図(1)	7	図35 II期土器実測図B区 S K103・104・121・ 126・149 ..... 49
図5 造構全体図(2)	8	図36 II期土器実測図B区 S K174・186・ 201・202 ..... 50
図6 造構全体図(3)	9	図37 II期土器実測図C区 S D10 ..... 51
図7 造構全体図(4)	10	図38 II期土器実測図C区 S D10 D区 S D10 ..... 52
図8 造構全体図(5)	11	図39 II期土器実測図C区 S D67・S K68・174 D区 S D03・09・15・16・ 18・20・21 ..... 53
図9 造構図A区 S K22・23	13	図40 II期土器実測図C区 S D87 ..... 54
図10 造構図A区 S D19・S K16・18	15	図41 II期土器実測図D区 S K01・02・ S D25・43 ..... 55
図11 造構図A区 S K19	17	図42 II期土器実測図D区 S K16・21・22・ 25 ..... 56
図12 造構図A区 S K24・28	18	図43 II期土器実測図D区 S K26・28 ..... 57
図13 造構図D区 S K01	22	図44 II期土器実測図D区 S K29・38・39・ 40・41 ..... 58
図14 造構図D区 S K22・26・29	23	図45 II期土器実測図包含層出土 ..... 59
図15 造構図D区 S K28	24	図46 III期土器実測図 ..... 61
図16 畦状造構図	25	図47 III期土器実測図 ..... 63
図17 III期造構・遺物分布図	26	図48 黒書土器実測図 ..... 65
図18 IV期造構・遺物分布図	27	図49 石製品実測図(1) ..... 66
図19 I期土器実測図	28	図50 石製品実測図(2) ..... 67
図20 北陸系土器	33	図51 石製品実測図(3) ..... 68
図21 高环A1分類図	34	図52 石製品・土製品・木製品分布図 ..... 69
図22 II期土器実測図A区 S D05	36	図53 土製品実測図 ..... 70
図23 II期土器実測図A区 S D19・25・27・ 36・S K14 ..... 37		図54 木製品実測図 ..... 71
図24 II期土器実測図A区 S K16・18 ..... 38		
図25 II期土器実測図A区 S K19 ..... 39		
図26 II期土器実測図A区 S K24 ..... 40		
図27 II期土器実測図A区 S K27 ..... 41		
図28 II期土器実測図A区 S K28・33・34・ 48・49 ..... 42		
図29 II期土器実測図A区 S K55 ..... 43		
図30 II期土器実測図A区 S K56 ..... 44		
図31 II期土器実測図A区 S K58 ..... 45		

図55 北道手遺跡の位置と周辺の地形	73
図56 旧河川堆積物にみられる異常堆積構造	74
図57 砂脈の産状	74
図58 地震痕観察地点図	75
図59 93B区断層の産状	77
図60 北道手遺跡93B区断面スケッチ	77
図61 断層運動と砂脈の変位	77
図62 中世土坑中の地層の液動化	78
図63 93D区断層の産状	78
図64 北道手遺跡93D区南壁断層スケッチ	79
図65 試料の胎土重鉱物組成	83
図66 古墳時代前期の遺跡分布	87
図67 土坑相関図	88
図68 北道手遺跡概念図	90
図69 S字形口縁台付甕の分布	93
図70 高环形土器の分布	94
図71 器台形土器の分布	95
図72 鉢形土器の分布	96
図73 壺形土器の分布	97
図74 線刻絵画土器	103

## 写真図版目次

図版1 A(93A a)区	118
図版2 A(93A b)区	120
図版3 B(93B)区	122
図版4 C(93C)区	124
図版5 D(93D a)区	126
図版6 D(93D b)区	128
図版7 E(94C)区	130
図版8 出土土器(1)	132
図版9 出土土器(2)	133
図版10 出土土器(3)	134
図版11 出土土器(4)	135
図版12 出土土器(5)	136
図版13 出土土器(6)	137
図版14 出土土器(7)	138
図版15 出土土器(8)	139
図版16 出土遺物(9)	140
図版17 出土遺物(10)	141
図版18 胎土中の重鉱物	142

## 別表

出土遺物一覧表	108
遺構一覧表	113

## 表目次

第1表 調査工程表	1
第2表 主な遺構時期	12
第3表 黒書土器記文一覧	64
第4表 胎土重鉱物分析結果	82
第5表 土坑土器カウントグラフ	89
第6表 遺物カウント土坑一覧	89
第7表 土坑出土土器カウント一覧	91
第8表 S字甕・加飾土器出土土器	99

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経過

**北道手遺跡** 愛知県一宮市と富山県小矢部市を結ぶ東海北陸自動車道の建設が日本道路公团により計画され建設工事が愛知県側に及んだ時、尾張平野に分布する遺跡が路線上に存在する事が

平成3~4年度にかけて実施した遺跡分布調査によって明らかにされた。木曽川以南から東名高速道路までの8.5km間に绳文時代~戦国時代の11遺跡が確認された。

北道手遺跡は、分布調査の結果東海北陸自動車道開通の遺跡の中で最も北に位置し、北に流れる木曽川から1kmしかはなれていない。発掘調査の当初は、南に位置する田所遺跡の一部と考えていたが、検出遺構・遺物からして田所遺跡とは個別な遺跡であることが明らかになった。つまり古墳時代前期の時代を中心に営まれた遺跡である。

発掘調査は平成4年4月から10月末までの10ヶ月間に5,387m<sup>2</sup>と平成5年12月に500m<sup>2</sup>の合計5887m<sup>2</sup>に及んだ。調査は、93年にA区~D区の4調査区の調査工程で行い、94年にE区を調査した。下記に調査工程進捗とそれぞれの年度の担当者を表化した。

工程 ／月	1993 4	5	6	7	8	9	10	11	12	》	1994 11	12
事前準備 *** A-D										》	**	
表土掘削 *** Da	*** Aa	*** Db	*** Ab		*** BC					》	** E	
発掘調査 Da	**** Aa	***** Db	***** Ab	***** BC	***** Ab	***** BC				》	**** E	
埋め戻し		** Da	** Aa	** Db		** Ab		** BC		》	** E	

第1表 調査工程表

【A~D区】

担当調査員：太田芳巳

高橋信明

西原正佳

鬼頭剛

【E区】

担当調査員：高橋信明

小澤一弘

増沢徹

## 第2節 調査の概要

**試掘結果** 平成4年度に実施した試掘調査の結果、県道木曾川停車場線以北の地点で古墳時代初頭と思われる遺構・遺物を確認し一部に弥生中期に遡ると考えられる遺物も確認した。この試掘結果をもとに、これまで知られていない新たな遺跡として平成5年4月より田所遺跡の名称で調査を開始した。しかし、一部に未収去部分があったためとりあえずこの未収去は平成6年度に先送ることとし、2カ年にまたがって調査にはいった。

発掘調査は現地表である水田の耕作土(面)を取り除くと黒色したやや細粒砂を含む土が一面に広がっており古墳時代初頭の土師器を包蔵する包含層が確認できた。黒色を呈する包含層は93A～D区で全面に94E区では一部に広がっていることが判明した。しかしA区の西側からB区の東側にかけて極めて薄く耕作土を剥ぐと直ちに基盤層である中粒砂からなる砂層が表出してしまった。更に、D区の東南部やC区の南半は同様な砂層でも鉄分が多く含む基盤層であった。包含層は20～30cmほど堆積しており南北方向に向かって緩く傾斜していた。このことは、遺跡の西端部に近い事をしめしている。

調査はこの黒色土の上面・下面での遺構検出に努めたが、上面遺構として一部で畝状遺構を確認できたにすぎず、むしろ下面で砂層を振り込んだ遺構が圧倒した。上・下面遺構を確認できたのは、調査区の中央部に限定された。94E区は他の調査区に比べて一段高く住居跡を期待したが、中世期に改変されており古墳時代の遺構はことごとく削られていた。

## 第3節 周辺の環境

### (1) 地理環境

**扇状地形** 北道手遺跡の所在する標高は、現地表で10mを示しており、遺跡検出遺構面では9.5mを計る。この標高は木曾川水系の河川が作り上げた扇状地形の扇端部分にあつていている。そもそも、尾張平野部の地形は大きく3つの地形環境が認められる。1つは東部に展開する台地地形とこの台地の北側をかくめるようにして木曾川が美濃山系から解き放たれたように一気に東南部地域に多量の土砂を運び込んで、犬山市扇頂とし標高9～10mを扇端部とする犬山扇状地を形成している。そして、その南には肥沃で豊穣な沖積平野を形成している。

**遺跡の位置** 北道手遺跡はまさに扇状地形から沖積平野部に移行しようとする地形環境に位置している。今回調査した範囲は現況地形からも東に高く現光明寺集落が営まれており、この集落の西即ち一段低位な位置関係を示している。こうした周辺地形からして北道手遺跡の集落中心は、現光明寺の集落がまさに古墳時代前期でも集落の中心地であったと考えられる。北道手遺跡をとりまく地理環境は、古墳時代から何ら改変されていないのである。木曾川の南わずか1kmほどしかはなれていないにもかかわらずその影響は中世に限定されるようである。



図1 調査区位置図

## (2) 歴史環境

尾張北部は、南部に比べて海からの影響は少なく、むしろ河川によるその運搬作用あるいはその開拓作用による影響を多く受けたものと考えられる。今日言う木曾川は信濃の鉢森山系を水源として、南アルプス沿いを悠々と流れ木曾谷となり幾多の小河川の水量を集め美濃の東濃高原を西へと山塊を運んでくる。そして、愛知県の犬山市から解き放たれた矢のように一気に尾張平野部に流れ込んでくる。平野部の人間にとって、恵みの河川であり、ある時は恐怖の河川と成り得た存在であった。こうした、生活環境から尾張北部では縄文時代の遺跡は、東部の台地上では確認されてはいるものの、いわゆる沖積平野部では古い段階の遺跡は知られていない。これらは、木曾川水系の動態を抜きにしては語れないことを意味している。

**縄文時代** 縄文時代の遺跡として今日確認できる遺跡は大変少ない。なかでも織田井戸遺跡（小牧市）が知られている。押形文土器が出土していることから前期に属する数少ない遺跡の一つである。しかし、遺跡の連續性と拡張性は認められない。それに続く時期の遺跡は遺物としては散在するものもいたって少ない。中期の遺跡は平野部への進出が認められ、中でも佐野遺跡（一宮市）が知られている。こうした、南部への進出は低地部の地形的な安定が考えられる。佐野遺跡からは、土器に混じって打製石斧が多く出土しており、これらの一部は土掘り具として使用されたものと考えられる。打製石斧の出土は続く後・晚期の遺である、馬見塚遺跡（一宮市）においても同様な傾向を示している。馬見塚遺跡自体は複合であり、晚期の豪族から弥生時代前期の土器も少量ではあるが認められ、その後の若干の空白期はあるものの古墳時代の祭祀遺跡としても著名である。

**北部の歴史時代** 尾張北部地域（東部の扇状地を除く）で人間の営みが本格するのは古墳時代以降となる。そのさきがけとなるのが北道手遺跡となる。古墳時代前期の極く短期間痕跡を留める遺跡として、下渡遺跡（一宮市）・藤掛遺跡（笠松町）・弥兵衛島遺跡（川島町）が知られている。藤掛遺跡などは、現在の木曾川の川底にあることから、古代段階の木曾川流路問題や河川による影響下にあったことが考えられる。同時に、この河川は肥沃なる沖積をもたらしたのである。それが、今伊勢古墳群の形成であり、埋葬に家形石棺を用いる特色のある浅井古墳群が広範囲に形成されてくる。更に、最近の調査例から一宮市大毛地区・木曾川町門間地区にかけて、古墳時代前期段階の水田跡が広い範囲で確認されており、以後古代～中世にかけて連続と継続しているようである。しかし、これらの遺跡において例外なく旧流路や人工の溝が認められる。こうした、居住空間としての土地利用は近世までのことであり、以後水田開発の浪の中に埋没し、水田下にその姿を保存することになる。

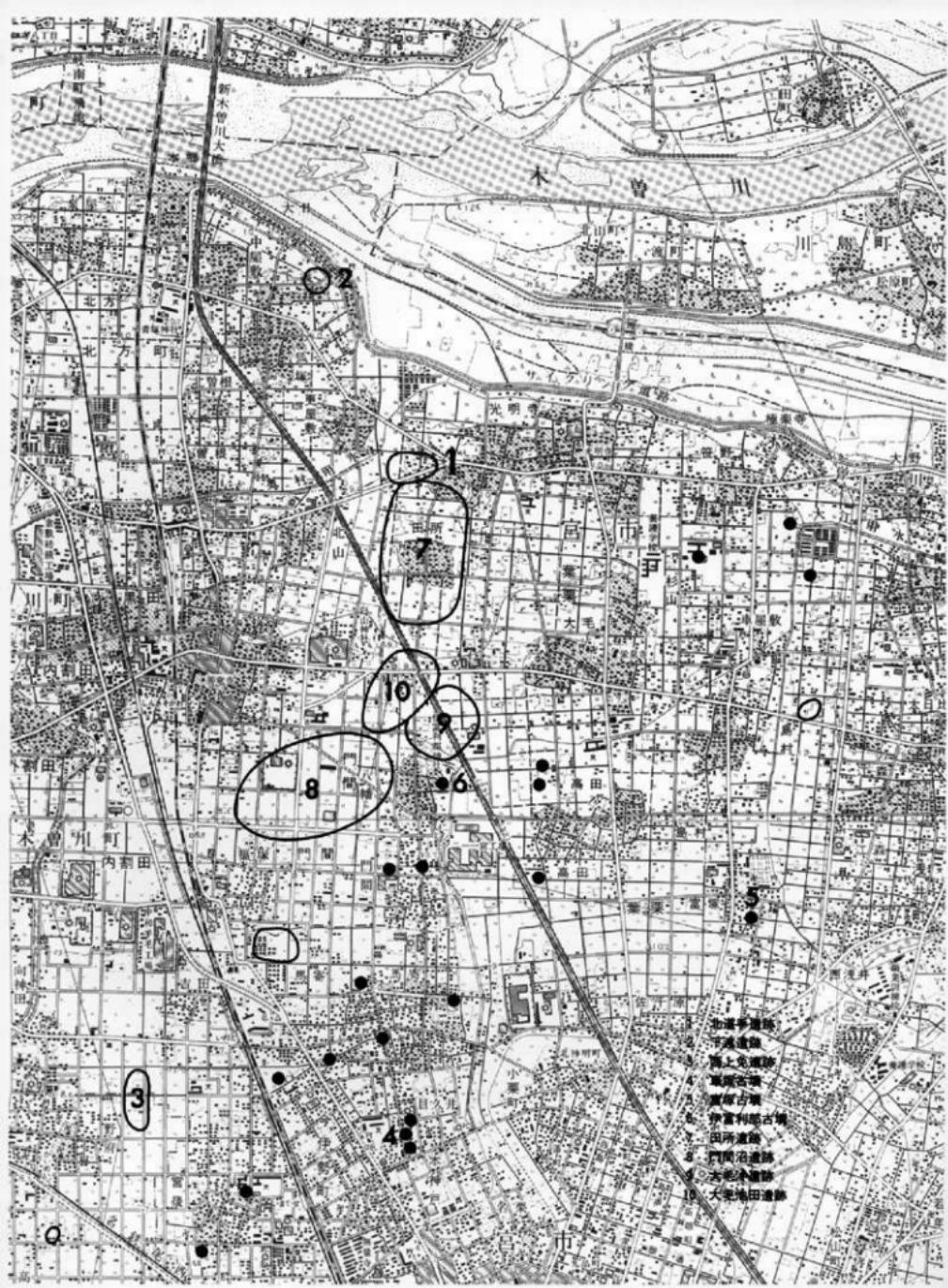


図2 周辺の遺跡分布

国土地理院発行「2万5千分の1地形図」より作成

## 第2章 遺構

### 第1節 基本層序

北道手遺跡は、すでに触れたように犬山市を扇頂とする半径12kmの扇端部から低地部の沖積平野に移行する、地形的な変換地域に分布する遺跡である。扇端部の標高は10mを測る。現水田面の標高は10m前後で古墳時代の遺構面は約9.5mとなる。この標高は、調査区の北東部最も高く西もしくは南西部に緩やかに傾斜する。

北道手遺跡での基盤層は木曾川がその運搬・浸食作業によってもたらした洪水性の堆積層である。河川の安定期が弥生中期以降訪れる高燥化する過程でこの地に人の手が入ったものと考えられる。中粒砂からなる基盤層は調査区全般に広がっているが、93A区から東の94E区などは遺跡の形成時はすでに安定化した地域であったため、中粒砂からなる砂層は見られず、黄褐色シルト層をベース面としている。その砂層の堆積以降に若干砂の混じる黒色を呈する腐植土層が平均的に20~30cm程堆積する。こうした堆積土の変化は人の手による開発の活発化した現れであり、古墳時代の遺構はこの堆積過程で展開されている。下位面遺構は砂層を深く掘削しており、遺構によってはさらに下層の荒い砂まで達している。上面遺構はこうした遺構が完全に埋没したのちに残されたものである。この変化は容易に識別でき、やや灰色化した黒色土で高燥化した結果であろう。古代から中世期以降の遺構が展開する地点では、灰色化した褐色土が地点により粘質土であたりシルトであったりする。しかし、中世前半期には遺跡の北部から西部にかけて洪水性の堆積（NR）が北東から南西方向に認められる。

(1)

#### 証

(1) 本調査区内（北西部）で確認したNRは、現黒田川に比定でき、流域の不安定期の洪水性の痕跡と考えられる。



図3 基本土層図

第2節

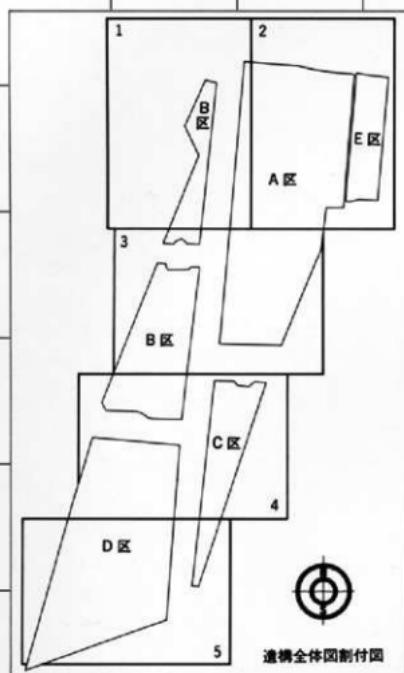
検出遺構

X = -71.945

Y = -33.550

Y = -33.545

X = -71.950



遺構全体図割付図

図4 遺構全体図(1)

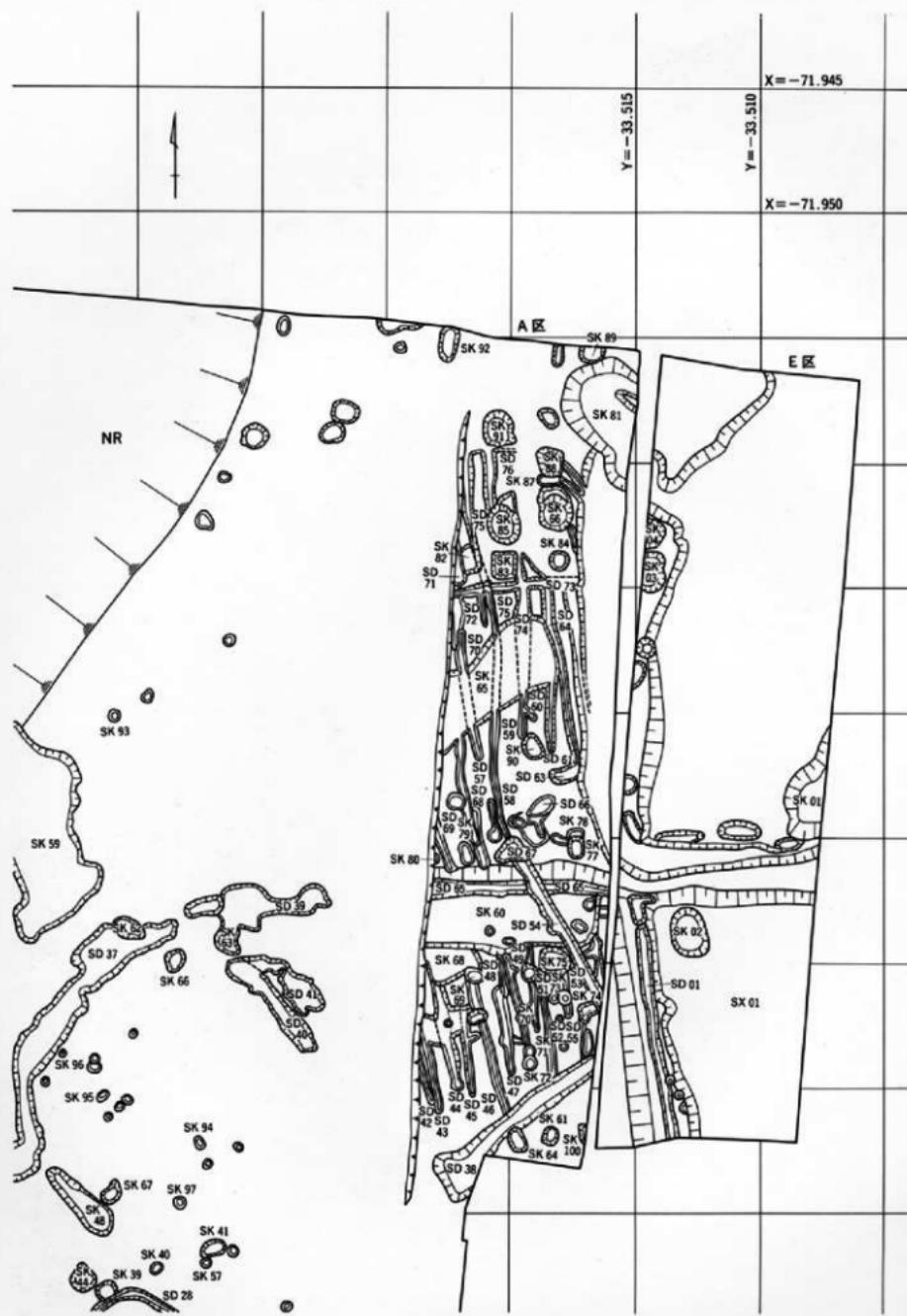


図5 造構全体図(2)



图 6 逮捕全体图(3)

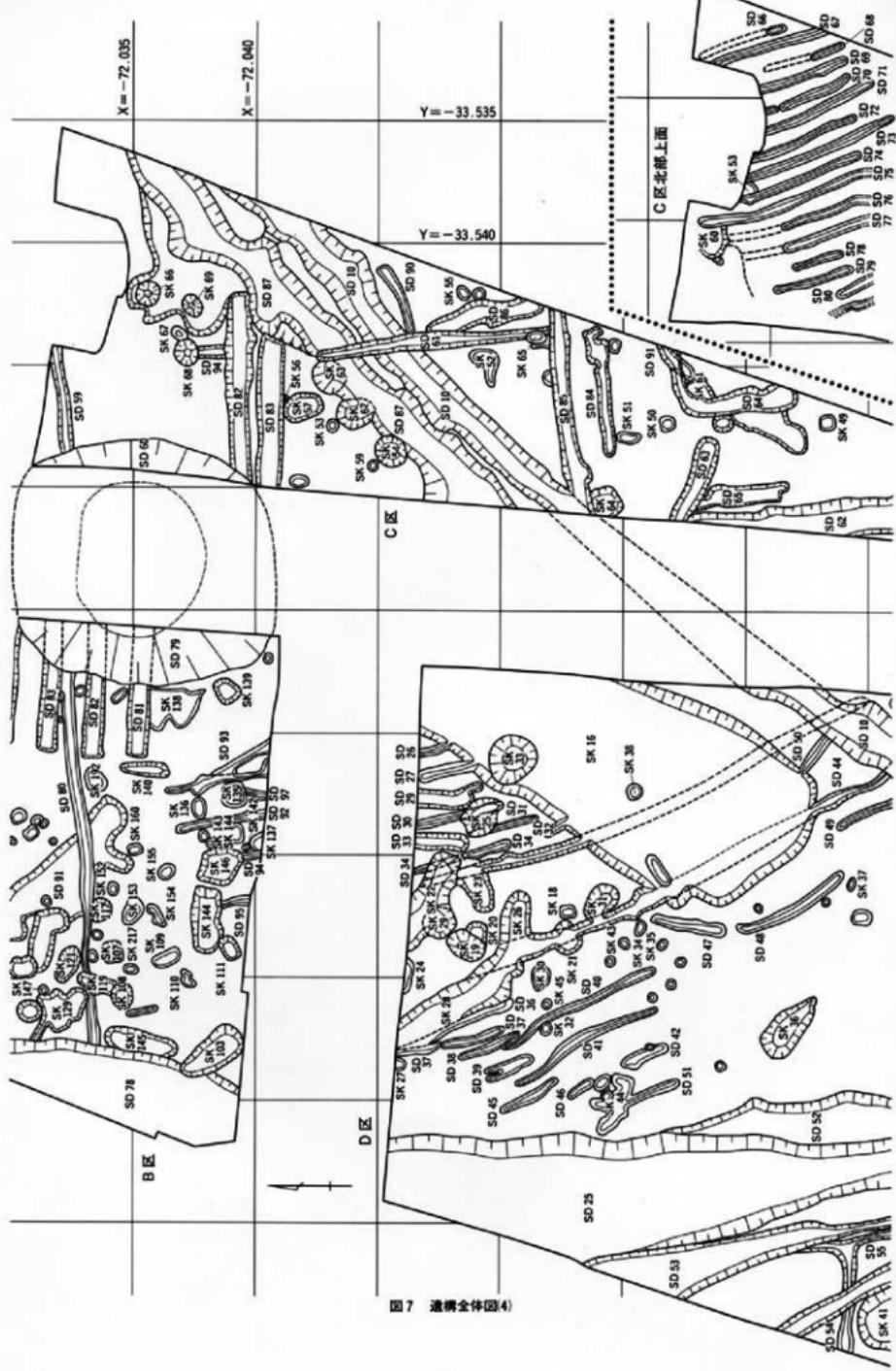


圖 7 遺構全體圖(4)

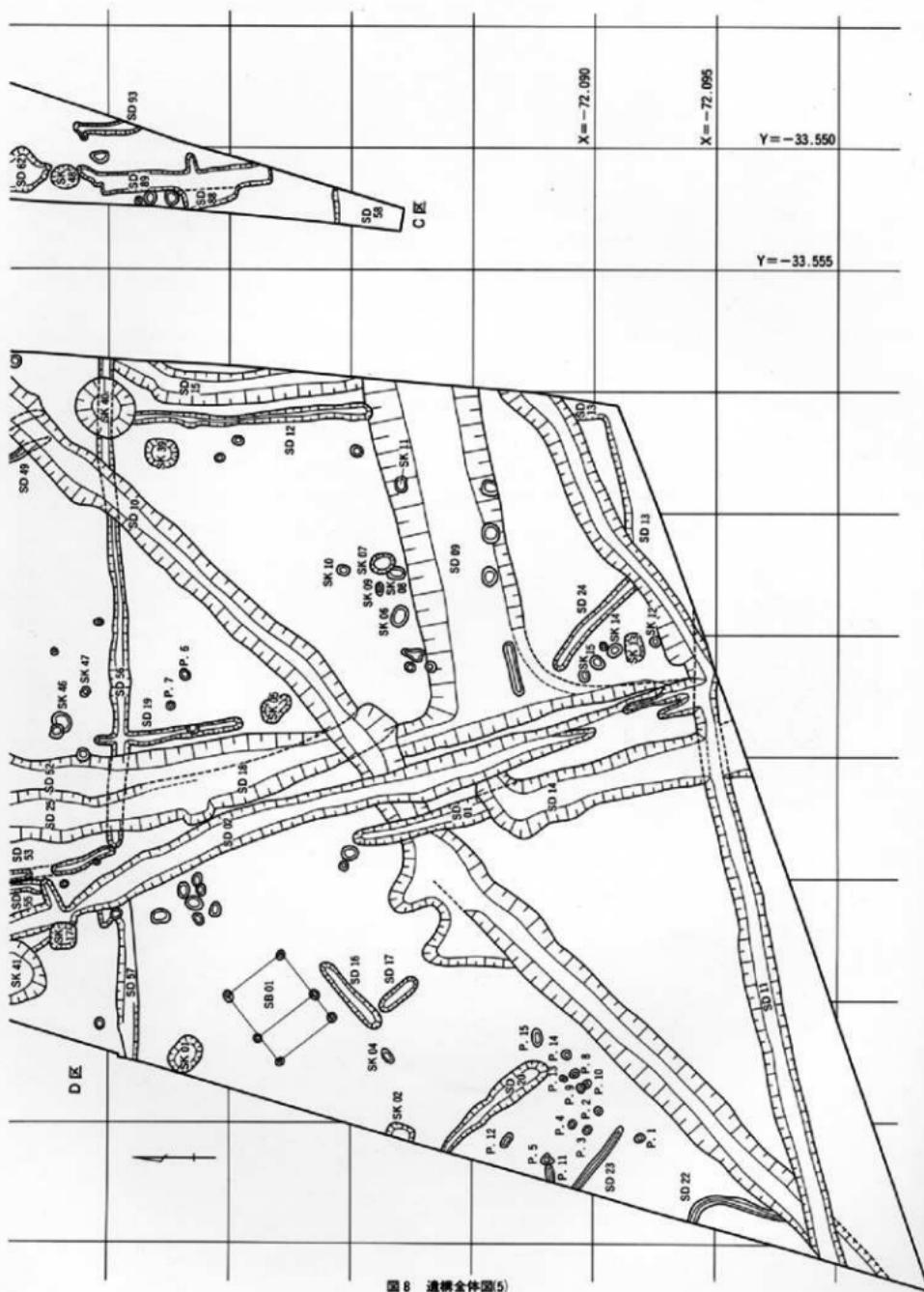


図8 造構全体図(5)

## 第2節 検出遺構

**検出遺構** 北道手遺跡では、ある程度時期幅のある遺構・遺物を検出している。しかし、その大半は古墳時代前期の極く短い期間に集中することが明らかになった。最も特色ある遺構は、平面プランが一般的な円形に混じり方形状の土坑が數基認められた。しかもそれらの土坑が単独に存在するのではなく集中する傾向にある。検出したこうした土坑（SKの略記号を使用）のほかに溝（SDとする）や掘立柱建物である。これらの時間的把握のために便宜上、ここではI期～V期の5段階に時期区分をして、検出遺構の説明を加える。

**時期区分** I期は北道手遺跡の開始時期となる弥生時代中期、II期は道路の中心時期と考えられる古墳時代初頭の時期で上・下面遺構が確認できた。上面をII-a期・下面をII-b期とする。III期は調査範囲の南半に集中する奈良時代から平安時代前半の時期、IV期は調査区の北東部で特徴的な出土状況を示した鎌倉時代に区分できる。V期はそれ以降とする。

報告する際、便宜上93A区とD区をそれぞれ分割し、各南半をAa・Da区とし北半をAb区・Db区とした。

時 期	主 な 遺 構	
I 期	93A : SK22・23	
II - a 期	93A : SD05・19・25・27・36 SK16・18・19・24・27・28・33・34 48・49・55・56・58・ 93A : SD34・37・38・44・64 SK59・65・ 93B : SD80・91・102・103 SK103・104・121・126・149・174 186・201・202 93C : SD10・67・87 SK68・174 93D : SD03・09・10・15・16・20・21 SK01・02 93D : SD10・25・43 SK16・21・22・25・26・28・29・38 39・40・41	S B01
II - b 期	93A : SD01～02・07～09・11～18・21・26 93B : SD92～97 93C : SD66～80 93D : SD26～34・36～42・44	
III 期	93C : SD85・89 SK64 93D : SD11 93D : SD25 SK28	
IV 期	94E区	
V 期	遺構は認められない	

第2表 主な遺構時期

I期 I期の明確な造構としては、93A区で検出した2基の土坑に留まる。出土遺物から弥生中期に属すると考えられる。

#### S K22 (図9) 93A区南西部

土坑の平面プランは、東西にやや不定形な円形を呈する。東西の長辺224cm、南北の短辺181cm、深さ70cmを測る。西にテラス状の張り出しをもつ。堆積は4層となるが、極細粒砂の混じる腐植土で黒色土が中心となる。遺物はテラス寄りの下位から弥生中期の細頸形壺片・条痕の深鉢形土器2個体が出土している。この土坑の埋没後II期の溝であるS D21が南北を貫いている。

#### S K23 (図9) 93A区南西部

S K22の南西4mの所にある。この平面プランは229cm×214cmの方形を呈する。S K23は平成4年度の試掘の際検出した造構である。そのとき、S K22同様に弥生中期の土器片を確認している。近接する同期の造構でありながら、50cmと浅く断面形は箱形となる。

#### I期全般

I期の造構は、土坑2基を確認したにすぎない。本造跡の開始時期を示すが、単発的かつ散在的分布である。しかし、遺物はA区全般で出土しており、この時期の中心地は東部のより高位に広がるのであろう。

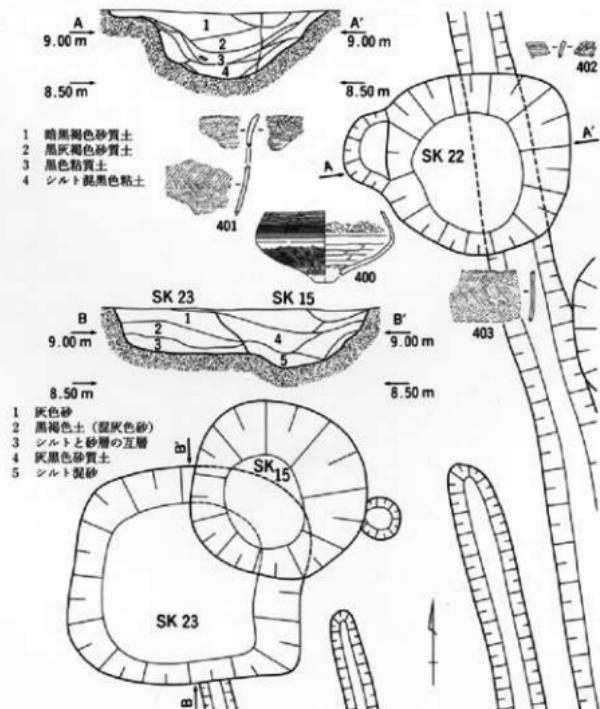


図9 造構図A区 SK22・23

II期 II期が北道手遺跡の中心時期となる。II期の遺構として大小の溝・土坑・掘立柱建物・円形状に巡る周溝（住居跡か）・歓状遺構が検出できた。遺構の切り合い関係から歓状遺構は、溝・土坑等の埋没後の掘削された遺構であることが明らかになった。II期は遺跡の中心時期であるII-a期と歓状遺構に象徴されるII-b期の2時期に分けられる。

II期の遺構は特色ある分布のあり方をしている。93A区ではその南半に2群に分類できる土坑が列をなし全体的に集中する傾向がある。93B区でも土坑は分布するが、いざるもその深度は浅いことに共通する。一方、93C区～D区にかけて北東から南西に延びるSD10やSD87に代表されるように遺構としてはむしろ稀薄となる。こうした遺構の分布様相は遺跡を知る上で重要な手がかりとなろう。

ここでは、主遺構（遺物の出土した）を中心に周辺の遺構を取り込んで記述する。

#### S D 19 (図10) 93 A 区南

V字状に掘られた南側の溝である。幅70cm・深さ33cm・長さは620cmを測る。埋土は極細粒砂の混じた腐植土からなり、黒色を呈する。屈曲部近くで土器を検出。高壙2個体（高壙A1の17・A3の18）とパレス壺片であった。

#### S K 03 (図6) 93 A 区西

この周辺では大小の土坑あるいはPit群を検出した。なかでもSK01やSK02などは長径で100cm未満で短径で60～80cmといずれも小型な土坑群である。これらを総合して何らかの建物跡を想定しうるかも知れない。SK03の規模は97×85×19cmと計測できた。

#### S K 16 (図10) 93 A 区南

SK22と23の中間にある。121cm×109cm・深さ43cmを測る。遺物のありかたは、細片が多く上位な程度を増した。やや古いS字形口縁の變形土器（變C1・變C2）を伴っている。變Aを欠くことは特徴的である。

#### S K 18 (図10) 93 A 区

調査区の南で検出する。土坑の平面プランは160cm×(100)cmと東西に偏平な梢円形となる。その掘り方は下位で垂直気味となりフラットな底部につづき、70cmと深い底部に拳大より一回り大きい自然石が5個置かれていた。出土した土器の大半は土坑の上位部分に集中しており、いざれも細片化されており短期的な投棄を窺わせる。これらの土器に混じて底で見られたような石が配されていた。S字形口縁の變形土器は見られなかった。このほかに加工円盤(514)も出土している。

SD10との関係は、SK18が先行する遺構であり、SD10はII期-bに属する遺構である。

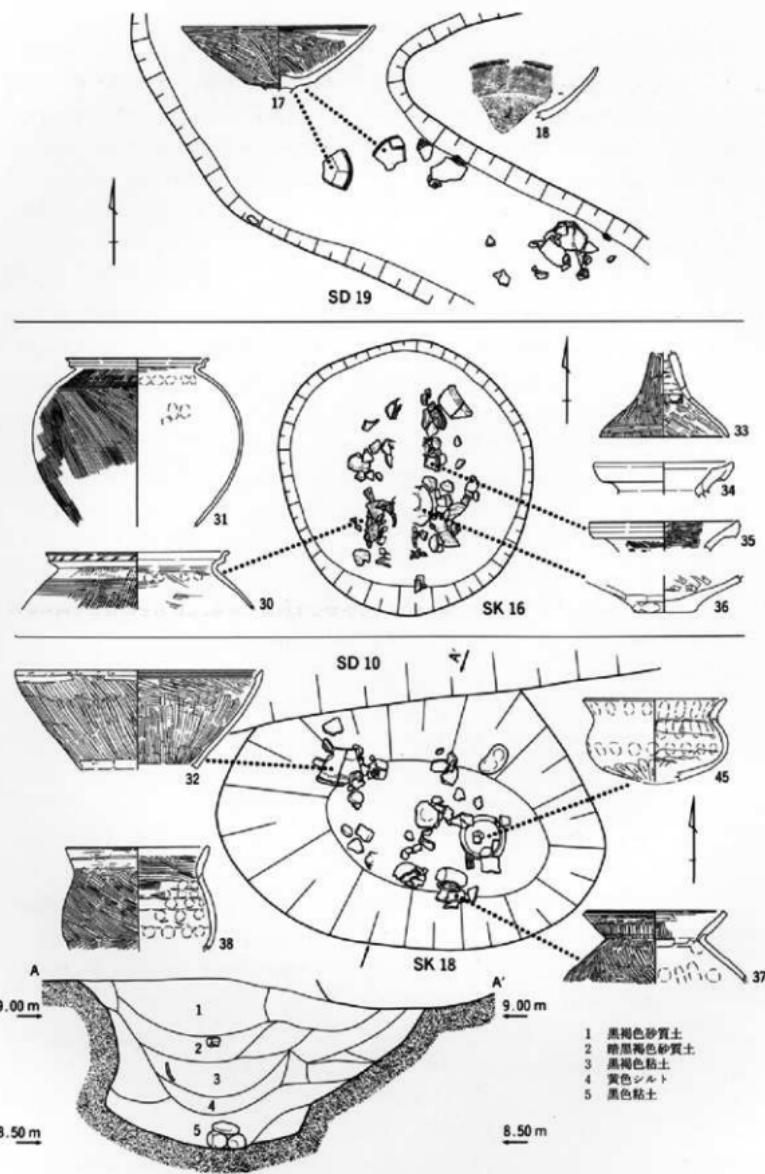


図10 造橋図A区 SD 19・SK 16・18

#### 周辺の遺構

S D10に代表されるII期-bの遺構は、93A-a区の南に集中しており、規則性をもつ配置がなされている。東西方向に大きめなS D10があり、これに直口するようにS D01~18までの幅30cmから70cmまでの比較的狭くしかもいずれも20cmと浅い溝群が確認できた。これらは、II期-aの埋没後に掘削されており、C区・B区・D区へと広がっている。これらを鉄状遺構群として捉える。

#### S K19 (図11) 93A区南半

S D10を挟んでS K18と対峙する北側に位置する。S K18と同様にS D10にその南の一部を切られている。土坑の平面プランは東西方向にやや長く244cmを測り、南北に207cmを測る大形の土坑である。深さは68cmとなる。砂を含む黒色の腐植土層なることは他の遺構と大差ない。ここでは、炭化物が顯著にみられこれらに混じり多量の土器が検出できた。土坑の上面で遺物量の多さは他の土坑と同様であったが、土坑の中程に(54)の大型壺が正立した状態でおかれており、土器内部には炭化物がみられ、当時はこの大型壺(54)を中心とすえ、これを覆い隠すようにその後の土器投棄がなされたのであろう。(54)にはカゴ目路が残っていた。(60)は外面をヘラミガキし、特徴的口縁形態は尾張部に類例がない。

#### S K14 (図6) 93A区西中央

A-a区の調査区からすれば少し離れた位置にある。平面プランは不定形で326cm×194cmを測り、深さは他の土坑に比べて37cmと浅い。土器は土坑の中央部から出土したが、いずれも細片であった。わずかにS字縁の台部(27)が出土している。

#### S K30 (図6) 93A区中央

平面プランはやや隅丸気味だが方形を呈している。規模は180cm×138cm、深さは14cmを測っただけである。

#### S D05 (図6) 93A区南東

溝と考えたがあるいは土坑の可能性が高い。その東半は調査区外のため規模を知り得ない。S K18・S K19と同様にS D10に先行する遺構でII期-aに属する。土坑であるとするならば、径が500cmを越す規模で調査区最大の土坑になってしまう。埋土は上位ほど極細粒砂を含むが下位になるにつれて細粒砂となり底部近くで粘土層の堆積を見る。ここからも、土器を中心に多量の遺物が出土している。いずれも細片が多く取り分けS字口縁の變形土器が目立つ。(1~16)で16は唯一の壺形土器で、蓋沸具である變形土器が圧倒している。これらは、溝(土坑)の西側より投棄されたようで東に向かって傾斜しつつ検出された。S字口縁の變形土器から判断すると概ねB類に収まるのではないだろうか。

S K33 (図6) 93A区中央

平面プランは南北に長く $138 \times 117 \times 64\text{cm}$ を測る。規模は小形に属するが土坑の中央部が70cmの径をもって下位の砂層に達する程に垂直に掘られていた。出土遺物は(93)の柳ヶ坪形壺の口縁部に留まつた。

S D25 (図6) 93A区中央

S K33とS K27の中間にある。L字状の溝の一部である。不定形に完結している。S字型のB類と口縁部短く立ち上がる特徴的な壺(19)を伴つてゐる。(19)は内面をヘラケズリで外面は荒いハケ調整となり、北陸系土器製作の影響を受けている。

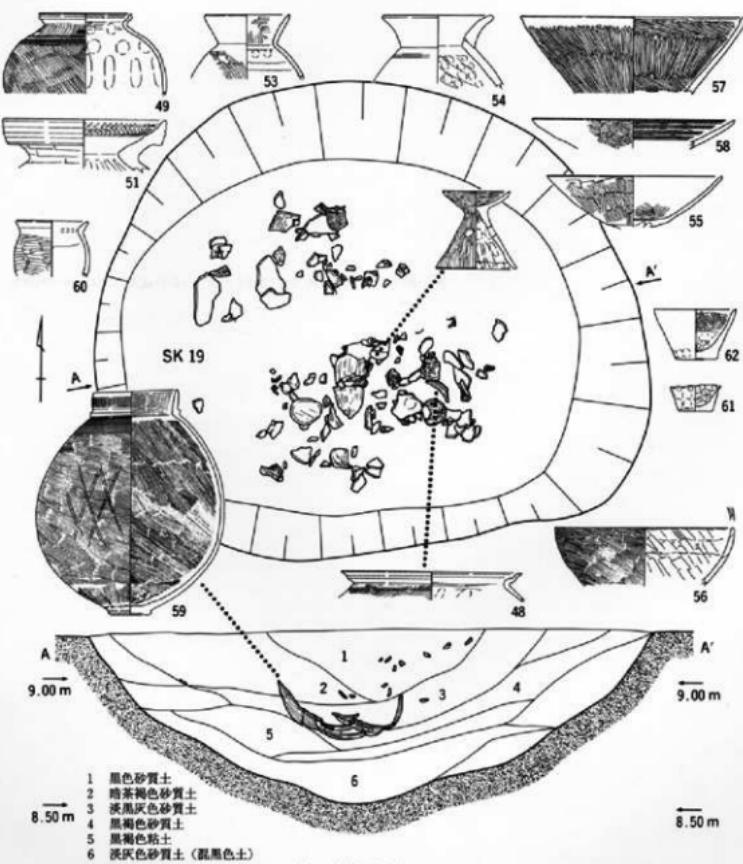


図11 遺構A区 SK19

**S D27 (図4) 93A区北西**

93A区の西半の造構は、土坑分布は稀薄で構にせよ大形の造構はない。S D27なども南北に延びる小規模な造構である。長さも約400cm・幅100cm・深さ30cmに満たない。84は畿内系の高环である。

**S K24 (図12) 93A区中央東**

大形土坑SK34・56に隣接する小形の土坑である。平面プランは、不定形ながらも157×127×44cmの規模をもつ。底からS字甕C類(63~65)や壺A(66)が出土している。

**S K28 (図12) 93A区中央**

平面プランは椭円形で71×53×30cmの規模の小形土坑である。土坑からはS字甕b類が1点正立した状態で出土した。大型土坑に近接して小型土坑のこうしたありかたは土坑群の構成上重要である。

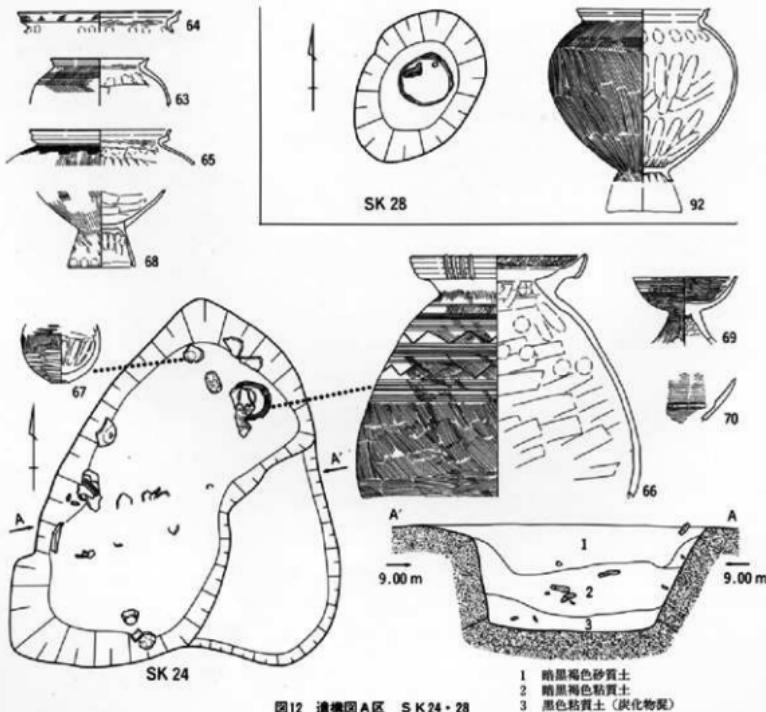


図12 造構図 A区 SK24・28

#### S K27 (図6) 93A区中央東

3基の大形土坑が列をなす1基である。当初方形プランから住居跡かと考えたが、深さが79cmとなり土坑と判断した。271×247cmの不定形な方形状のプランである細片ながら多くの土器(71~91)が出土した。

#### S K34 (図6) 93A区中央東

列をなす3基の大形土坑の1基である。平面プランは不定形な方形状で253×263cmで88cmの深さを測る。他の土坑に比べて遺物量は少ない。S字型C類(94・95)が出土しやや後出する。

#### S K55 (図6) 93A区中央東

S K55と切り合い関係にある。S K56の使用時に併行的に掘削され同時に使用されている2基の土坑は全体として方形プランとなる。煮沸具はS字型(106・107・109)のみ出土。109には焼成後に底部を穿孔している。(112)は内面が丁寧なヘラミガキ調整がなされており、所々に水銀朱が付着しており、注ぎ口にも付着していた。263×164×76cmの規模である。

#### S K56 (図6) 93A区中央

S K55と切りあう。検出時は方形プランで247×233×87cmを測る。遺物は上位に集中するのではなく土坑内全体から多く出土した。煮沸具としてS字型が圧倒(114~121)する。大形土坑に共通する。

#### S K58 (図6) 93A区中央北

平面プランが円形状呈する大形土坑である。398×333×87cmを測る。西に隣接するSD28の周溝は建物跡を想定できるが、同時併用された関係と考えられる。多量な遺物は完形品がなくすべて細片化されており、S字型(141~156)16点の出土は大形土坑に共通する。最底部より膝柄鍬(図54-2)が1点出土した。

#### 周辺の

#### 遺構 S D28 (図6) 93A区北中央

隅丸方形状に巡る溝である。S K58に隣接するが切り合い関係はない。幅20cmで長軸が570cm・短軸が520cmを測るが西部で開放している。内側には径30cm深さ20cmのPitが4ヶ所認められる。開口部にはS K45がある。何らかの建物跡の周溝と考えられる。

#### S K45 (図6) 93A区北中央

SD28の開口部にある。平面プランは161×119cmの楕円形を呈し35cmの深さであった。口頭部を欠く台付窓(100)が1点出土している。

#### S K48 (図5) 93A区北中央

平面プランは不定形ながら354×99cmを測り深さは25cmと浅い。遺物として(98・99・101・102)が出土している。

#### 93

#### S D34 (図4) 93A区南西

#### A b 区

L字に屈曲する溝でSD27に連続する。長軸が450cm・短軸274cmを測る。中央部が一段深くなり両側はテラス状に浅くなる。遺物として(178・179)が出土している。

#### S D 37 (図 5) 93A 区南

S 字状に湾曲する溝で S D 40 につながる。南東部側には同様な遺構は認めなかった。あるいは、後世の削平の結果かもしれない。一部に深くなる個所もあるが 18cm と浅い。遺物は多くなく、(180・181) が検出できた。

#### S D 38 (図 5) 93A 区東南

A 区の北東部は後世の削平のない本来の高燥地で全体の残りは良い。北東一南西に延びる溝で南西端で終結する。箱形に掘削されており、43cm の深さを測った。

#### S K 59 (図 5) 93A 区西

不定形な長方形状の平面プランを土坑である。上面は削平又は北の一部は N R 01 により削り取られており、N R 01 は古墳時代以降であることが明らかである。そのため、深さは 20cm と浅いが、多くの土器廃棄 (191~205) が認められた。195 の底部に焼成前の穿孔が 4 孔認められた。

#### 周辺の遺構

S D 38 がある北東部は掘削を免れた地で遺構等依存状態は良好であった。地形的に南や西の調査区に比べて一段高い所であったが、遺構の展開状況は他と同様で II - b 期と a 期の遺構が展開していた。さらに、13C 以降の中世期の遺構は顕著に認められた。

II - a 期の遺構は、土坑と溝に至っては軸を北東から南西に延びる特徴があり他の時期遺構とは異なる (S D 38・S K 65)。II - b 期の遺構は小溝からなる。軸はほぼ南北方向の規則性を保って展開する (S D 42~49)。13C 以降は S K 60 の様に東西方向やこれに直交する形で展開する。

**93B 区** この調査区の北半は中世期以降の洪水性流路 (= N R) により深く削り取られている。それより南半に中・小規模の土坑群と若干の大形土坑と溝を検出した。特徴は炭化物を伴う土坑や地震跡の認められる遺構が多い事にある。

**炭化物を伴う遺構** は、S D 91・S K 112・113・114・126・149・17・3・186 であった。  
**伴う** なかでも S D 91 の西半では厚さ 3cm 程に一面炭化物が認められた。地震跡を確認した遺構としては S D 78 (図版 3-1)・79・S K 107・115 (図版 3-6)・117・133 であった。幾度かの地震にさらされているようで、中でも S D 78 での地震跡は古く古墳時代に遡る。

S D 91・103・104・S K 103・104・121・126・149 から実測にたえうる遺構が出土している。

**93C 区** 本調査区内での南西に当たり、遺跡の南部部分を画すると考えられていた。遺構全体の展開は中央部を北東から南西に延びる S D 10 あるいはそれに併行する S D 87 を境にして大きくことなる。以北では基盤層はシルトもしくはシルト混の砂層に対して、以南では中粒砂の砂層であるが、たぶんに鉄分を含んでいた。又、遺構の軸方向が以北では S D 10 に規制されているのに対して、以南では東西・南北方向に主軸をとる。これらは、93A b の東部と同じ状況である。以北では II - b 期の遺構も明瞭 (図版 4-6・7) に検出している。

ここでは、S D 10 あるいは S D 87 を中心に記述する。

**区画溝 SD10 (図7・8)**

SD10とした溝は、調査区の北東から南西に向かって緩やかに傾斜しており、93C区から93D区に延びている。93C区での溝規模は、幅が140cm程で70cmの深さに掘削されている。この規模はD区ではもう少しだくなる。この溝内の堆積は基本的に3層からなる。下層の細粒砂の混じるシルト層が堆積し、中層に細粒砂を含みながらも黒色の腐植土層が20cm程堆積した後、ふたたび細粒砂混じりのシルト層となる。このことは、掘削されたのちある期間水流が認められるが、安定期を経たのち再び大きな水流があったこと物語っている。遺物もこれに対応するかのように中層に完形品を含む土器が多く出土している。この安定期に再度の掘削は認められない。しかし、C区ではD区等ではなかった併行するSD87が北側に掘削されている。C区の東壁の断面を観察すると東方に向かって浅くなる。一方SD87は同じ深度を保ちながら東へと延びている。SD10の溝機能としての代替わりしているようである。出土遺物からSD10もSD87も時間的に大差はなく両溝が短期間だけ機能していたことを示唆する。SD87が機能している段階ではSD10は凹地状を呈してしまっている。埋没後の遺物に(250~270)が出土した。265の壺には朱彩されている。265は焼成前の穿孔が認められる。

**SD87 (図7)**

SD10に並行する溝で幅190cmを測る。SD10の掘削後にC区の所でその機能を受け継ぐように掘削されているが、脆弱な砂層を掘り込んでいたため、北肩では掘り方に不安定感があり、長期的使用は考えにくい。西側のD区では、この溝に相当する溝は検出されていない。土器として(301~324)が出土している。(316)は壺の口縁と思われるが類例がない。(320)は手培形土器である。

**93D区** 93C区同様に中央部北東から南西にSD10が掘削されており、SD10以南と以北では遺構等の様相を異にしている。さらにこの区では東により南北方向に中世の溝がありこれに直交する東西溝が南で検出している。II期の遺構の展開としては中央部に遺構の空白地域がありそれを囲むよう北東に土坑群が分布する。

**SD10 (図8)**

C区に比べるとやや規模が大きくなる。最大幅200cmを越し下層の砂層まで達しているため、一部に掘削間もない頃の崩落部分のあったことが認められる。D区の西南端で中世期の洪水性の流れで切り取られている。遺物はC区に比べて少量であった。

**SD10 SD15 (図8)**

以南遺構 東壁沿いに逆S字に屈曲する形で検出された。方形状に巡るとも考えられる。

**SK40 (図8)**

SD15の北屈曲部に位置する。平面プランは $252 \times 221\text{cm}$ の円形状を呈し、深さは59cmを測る。

**SD10 SK01 (図8)**

以北遺構 西壁際で確認した。方形プランで $154 \times 114 \times 19\text{cm}$ を測った。炭化物が認められる中に327の上に326が逆さまに置かれた状態で検出できた。327は口縁部のみで逆さまにのるS字縦は完形であったと思われる。

**SK16 (図7)**

北東隅にある方形状の土坑である。SD10に並行し長軸は17m以上、短軸は785cmの大形であるが33cmと浅い。住居跡とも考えたが、これを補強する資料は得られなかった。内側に2基(SK33・38)がある。

**SK36 (図7)**

D区の空白地域にあるプランを洋梨形を呈す土坑である。

**SK41 (図7・8)**

円形状のプランを持つ。 $290 \times 265 \times 44\text{cm}$ を測る。

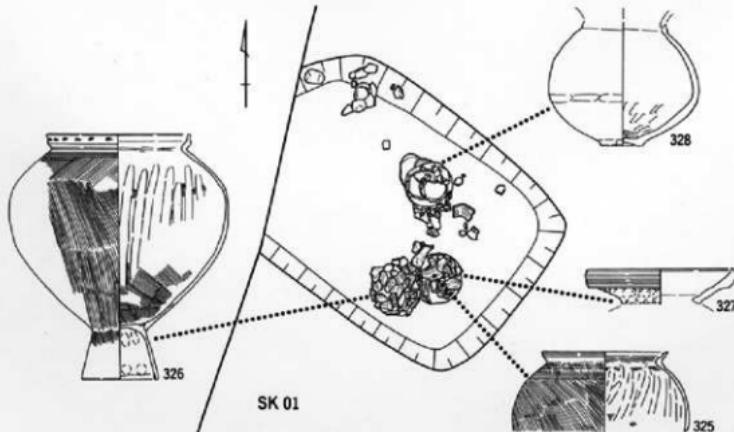


図13 遺構図D区 SK01

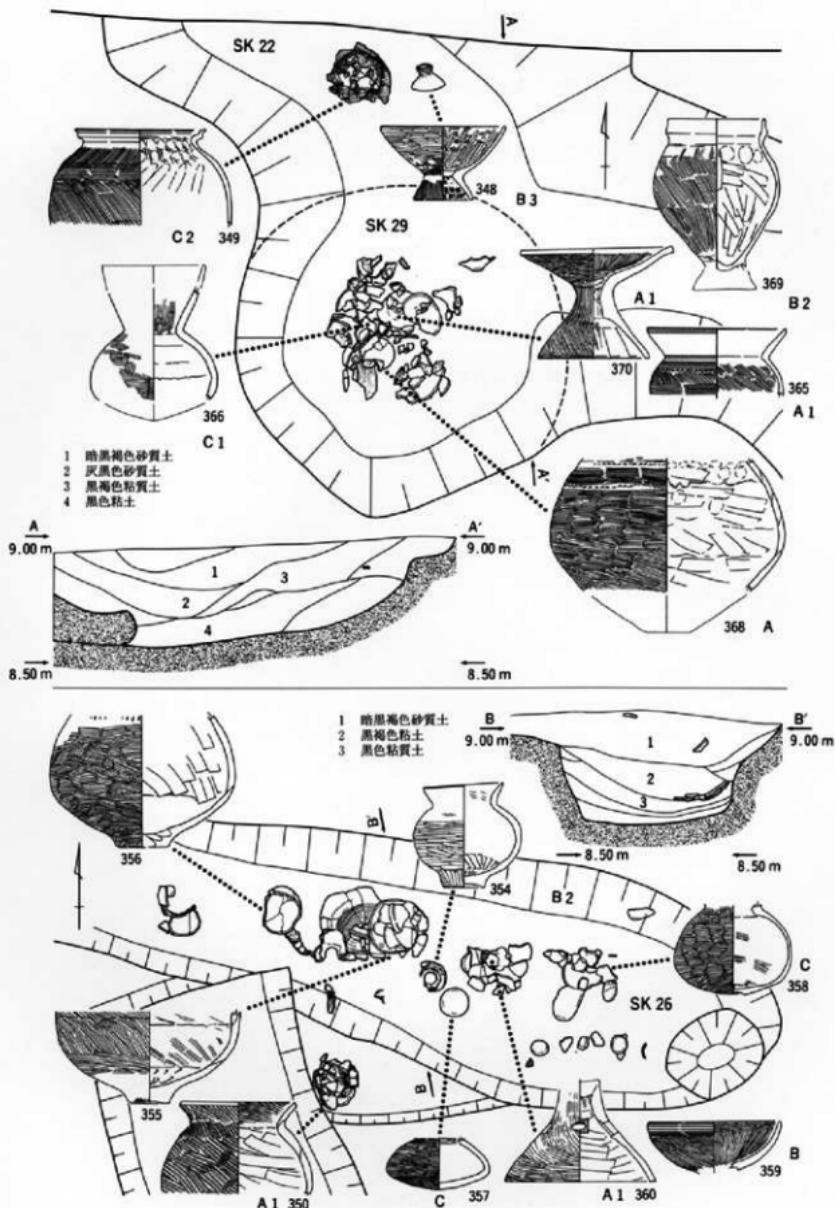


図14 造構図D区 SK 22・26・29

S K 20・22・26・28・29 (図14・15)

S K16の北西側に展開する土坑であるが、いずれも中規模の土坑であるが、完形品を含む土器が多く出土している。前後関係は認められるものの、A区の土坑の状況とは異なる。このことは祭祀空間内の異なる行為の存在を示唆するのであろう。

S B 01 (図8)

1間×2間の唯一の掘立柱の建物である。

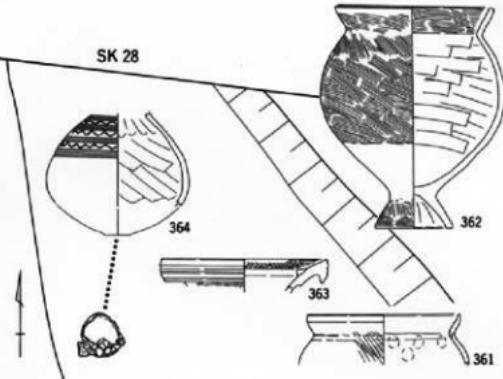


図15 造構D区 S K 28

II-b期 II-a期の造構が機能を失ったのち新たに掘削された造構群である。(図16)

こうした造構を検出したのは全ての調査区であったが全面的ではからずもない。

A区では、調査区の南東側と北東隅の2個所に集中していた。II-a期の造構の主軸が北東から南西方向を指向するのに対して、北西から南東方向に軸線が指向されている。特にA区では、同期のS D10を中心にこれに直交するかたちで幅20~30cm程で100cmから120cmの間隔を保ちながら北西から南西方向に掘削されている。A区の北東隅ではこれほどの規則性は見られないが、ある一定の間隔を置いて掘削されていることは看取される。

B区での分布は調査区の南側、すなわちD区から延びてくる溝群である。A区程顕著ではないが、やはり100m程の間隔は認められる。しかし、これらの溝群はこれ以上北には延びていない。

C区はA区の南側に展開する調査区で先のA区の溝群につながる。ここでは、最も顕著に造構の存在を確かめられた。(図版4-6-7) C区の北半で整然とした状況で16条の小溝が検出できた。それらは、いずれもS D87の埋没後掘削された。わずかながら、S D67(288)・S D68(289)で遺物が出土している。

D区は調査区の北東部で数条の小溝群を確認できた。なかにはB区につながる溝も認められる。ただし、C区ほど整然とはしておらず、検出状況から広範囲に展開していたことが読みとれる。

以上、ここではこれらの造構群を畝状造構群として捉えておく。

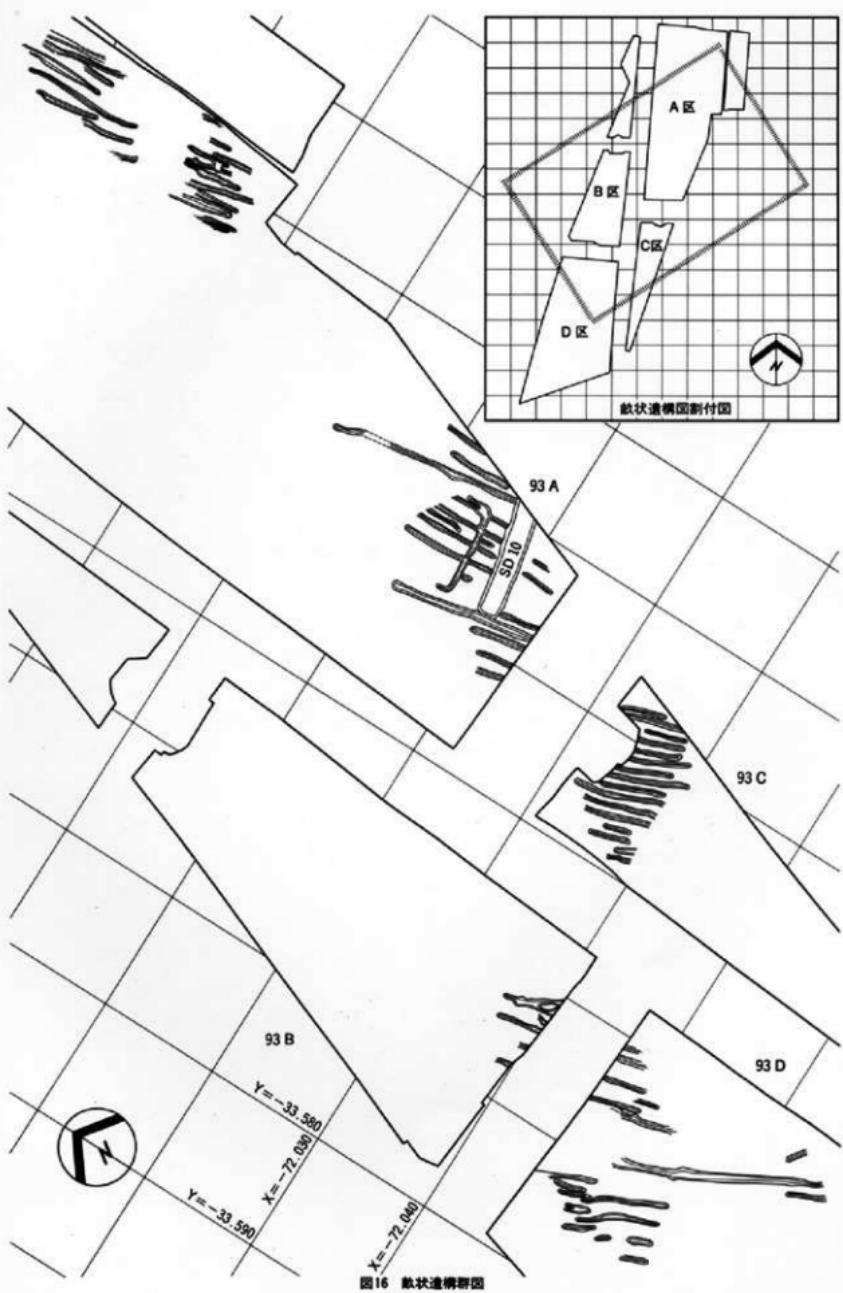


图16 钢状造模群图

**III期** III期の遺構はII期の遺構に比して決して多くない。遺物そのものは、少ないながら全て  
**(図17)** の調査区において出土しているものの、明確な遺構は全調査区の南部（C区の南半とD区の南半に若干）にて検出した。とりわけ、北東から南西方向に延びるII期のSD10以南に集中する傾向にあった。このことは、SD10を境にして基盤層の相違と関連するのであろう。又、北道手遺跡に於けるIII期以降の生活空間の広がりがII期とは異なっていたことを物語っている。

III期の遺構は全てC・D区に限定されており、遺構の主軸方位はやや振れるが東西位と南北位をとる。このIII期の時期は、概ね8世紀代と考えられる。

**C区の  
遺構** C区のIII期の遺構は、SD63・85・89、SK64・91となる。SD85は南北位にとり、SD89がこれに直角する。このSD89の南側の壁際にSK64がある。この土坑より(435)が単独で出土している。(図17)

**D区の  
遺構** SD11は調査区の南壁に併行するかたちで東西位に延びる。幅139cmで24cmの深さを測る。断面はU字形となる。(図17) C区のSD85と併行関係にあり、何らかの区画構と考えられる。

A・B・E区でも遺物を検出したが遺構としては認識できなかった。

\*III期の段階では、NR01は存在していない。

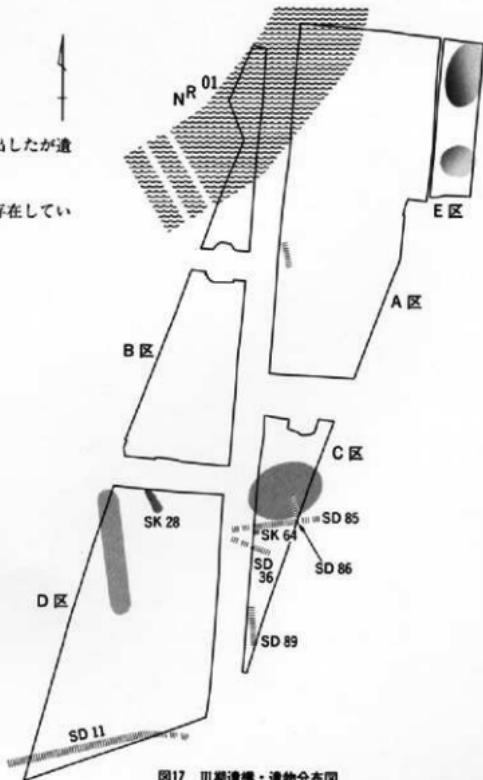


図17 III期遺構・遺物分布図

IV期 (図18) 東隅からB区の北半にかけて北から南への水流が認められるN R01は堆積状況の切り合いでIV期のある段階に起こった自然現象と考えている。以下、検出した遺構について記述する。IV期の遺構も主軸の方向性はIII期と同様に東西方向と南北方向を基調としている。

S D25はD区の中央を南から北へ流れているようで、S D25の他に数条の溝が並行する。これらに共通することは、南で掘削されたと思われるが北につれて溝を溝として明瞭に確認できず、荒い砂のなかに黒色腐植土をブロック状に含む堆積状況から、かなりの水量があたと考えられる。そしてD区の北西隅に向かって深くなる。

S D79はB区とC区にまたがる土坑と考えられる。井戸の可能性はなく、東にS D59が西にS D80が同時期の溝と考えられ、S D79は貯水的な機能を持つ遺構と思われる。

94E区  
94E区は他の区に比べて高位にあり、中世の遺構は想定していかなかったが、II期の包含層を削り取った遺構を確認した。調査区の中央部に堤状の土手があり、これを挟んで凹地状になる。水田かとも考えたが、墨書き器の出土から重要度の高いため池的な機能を持つ遺構と考えている。しかし、堤の北の凹地は急激な水量の変化があったことが認められる。このIV期は本遺跡の南に展開する田所遺跡、なかでも墳墓群跡の時期と同時期で少なからず関連する遺構も存在すると考えられる。しかし、本調査区では墓域的様相を示す遺構は検出されていない。

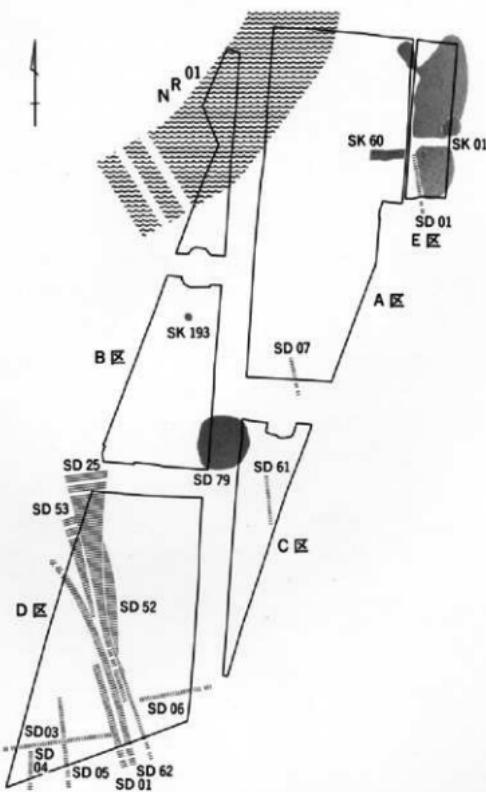


図18 IV期遺構・遺物分布図

## 第3章 遺物

### 第1節 土器

北道手遺跡から出土したⅠ期～Ⅴ期の遺物について記述する。記述する上で便宜上土器類とその他（石製品・土製品・木製品）とに区分する。出土遺物の内土器類が9割以上を占めており、そのうちⅠ期に属する遺物が大半を占める。遺構出土遺物を中心に記述し、検出遺物はこれらを補完するに留める。

Ⅰ期 Ⅰ期の遺物は本遺跡の開始時期を示すもので弥生時代中期中葉に比定できる。土器の他に石器・打製石斧等もこの時期に属するのであろう。土器は93A区に限られるが石器はすべての調査区で出土している。

#### S K22出土（400～403）の中期土器

400は、胴部上半を欠くが受口状の口縁形態を持つ細頸形の壺と思われる。胴部の文様は、クシ描文様帯とヘラミガキされた無文帯の互層構成となる。下胸部は放射状にハケ目調整がなされている。典型的な貝田町期の土器である。SK56出土の140も同様土器である。ただ400のクシ描文様帯の上に縦位の単位クシ描文を描くが140では対を弧状文となる違いがある。

401～403は条痕深鉢である。87（93A区のSK27）や137・138（93A区のSK56）でも出土している。401は底部付近を欠くが口縁外面部は口縁部で右下がりの斜位条痕をその下位に横位条痕を施したのち横位羽状条痕となる。口縁部内面には羽状の刺突列がみられる。402は口縁部破片で401の口縁部同様である。403は横位羽状条痕を施す胴部破片である。137・138も同時期深鉢となる。口縁内面の刺突列の違いから別個体となる。139は同時期の三河に通有タイプの広口壺の胴部片である。太い沈線が文様の基本となる。

クシ描きの壺と条痕の煮沸具の器種構成は尾張北部から美濃に看取できる組み合わせである。

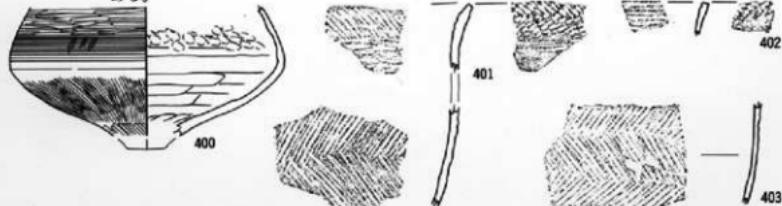


図19 Ⅰ期土器実測図

II期 本遺跡の中心時期である。従ってその遺物量は最も多く本報告での土器分類を行うことが記述する上でもまた資料に普遍性を持たせるためにも必要と思われるが、单一遺跡での分類はかえって混乱のもとであるし、本遺跡の資料では不十分と思われる。本遺跡をとりまく周辺地域をも包括するような分類でなければならない。しかし、現状では資料不足であるため、先決の分類を援用しつつ更なる段階への基礎となるべきよう必要に応じて段階的な分類を便宜的に行うことにする。

機能的分類として壺形土器・甕形土器・高环形土器・器台形土器・鉢形土器・蓋形土器・ミニアチュア土器・特殊土器として手培形土器にとどめ、細部の分類はそのつど提示する。

壺Aは広口口縁を持つ加飾壺とする。特徴は外反する口縁部もち、口縁部は拡張垂下もしくは上方に突き出して断面三角形状を呈し、この面に擬回線を施す。口縁内面に段・綫を有す。

一般的にバレス壺と称する土器をあてる。本遺跡では3タイプに細分できる。

A 1 口縁内面に段を持ち、口縁は下方に拡



張垂下する。擬回線を施した面は垂直となる。

A 2 口縁内面に稜を有し、稜から上方に突き出る。面は斜めとなる。



A 3 円柱状の明瞭な頸部をもち、段をもつて口縁部に至る。

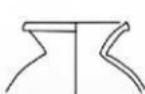


壺Bは広口口縁を持つ壺。壺A程に加飾性はない。若干口縁部や肩部上半に文様が施されている。口頸部の形態により細分できる。

B 1 円柱状の頸部から緩やかに外反するか、水平方向に短く延びる口縁部となる。



B 2 頸部から緩く外反するか、直線的な口縁部となる。口唇部は面をもつタイプ・丸みのタイプ・拡張するタイプを含む。



B 3 口縁部が内側するタイプ



B 4 口縁部が受口状を呈するタイプ



壺Cは口縁部が内擣、もしくは直口するタイプ。本遺跡では全体を知りえる資料が乏しい。出土個体数が少ないため2タイプにのみ細分する。

C 1 口縁部が内擣しながら立ち上がるタイプ。



C 2 口縁部が直線的にひらくタイプ。



壺Dは柳ヶ坪形土器を総称する。細分できるが一括するにどどめる。



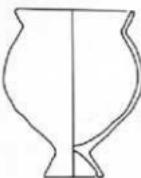
壺Eは二重口縁壺形土器を総称する。



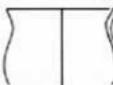
壺形土器は口縁形態を視座に「く」字形口縁・S字状口縁・受口状口縁に大きく分類する。ミクロ的にはおのの細分する。いずれも台付となる。

壺Aは口縁部形態が「く」字形に外反するタイプ。

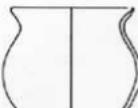
A 1 「く」字状に外反した口縁部は面をもって  
終わるタイプ。



A 2 「く」字状に外反する口縁部は丸みをもって  
終わるタイプ。



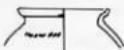
A 3 「く」字状の外反度が弱いタイプ。



A 4 「く」字状に外反するが口縁部先端でわずか  
に立ち上がるタイプ。

壺Bはいわゆる受口状口縁部形態を呈するタイプ。口縁部・胸部に文様を施す例が多い。

B 1 明瞭な頭部を持って立ち上がる口縁部と  
なる。



B 2 受口部が直口するタイプ。



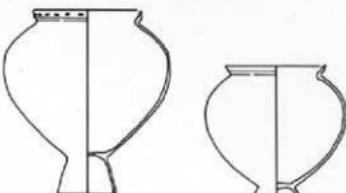
B 3 受口部はつまみ上げによりわずかに  
立ち上がるタイプ。



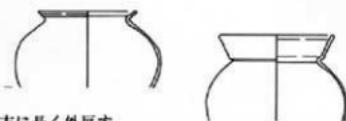
型Cは口縁形態がS字状を呈するタイプを総括する。口縁形態の差異で更に細分できる。

C 1 A類と呼称されているタイプ。直口的に

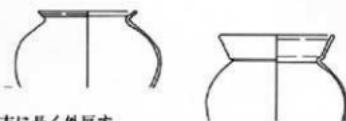
S字が立ち上がる。多くは口縁外面に押引文を有す。胴部の最大径は上半にある



C 2 B類に相当する。S字らしく強く屈曲する。口唇部は上方に面を持つ。



C 3 C類に相当する。S字斜めに開く。胴部最大径は中央にありやや偏平化する。



C 4 D類に相当する。屈曲する口縁の上半は外方に長く外反するタイプ

高坏Aは杯部に段をもち大きく外反するタイプ

A 1 明瞭な段を持ち、内側する脚となる。



A 2 段が鈍くなり、広がる脚となる。

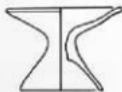


高坏Bは杯部が楕円となる。

高坏Cは小形有稜高坏とする。

器台形土器Aは中形で杯部径が脚径を上回る。

A 1 脚は内側する。



A 2 脚が直線的に開く。



器台形土器Bは小型器台。脚径が杯部径を凌駕する。

B 1 楕円の杯部に直線的な脚。

B 2 筒状の中実な脚。

B 3 杯部に段をもつ。



鉢形土器は大型品をA、小型品をBとしさらにこれを細分する

A1 体部は偏平で外反する口縁をもつ。



A2 体部は偏平で受口状の口縁形態となる。



B1 楠形の口縁となる。 B2 屈曲する口縁となる。 B3 開く口縁である。 B4 その他

以上、報告を進めるうえで最低限度の分類に留めた。北道手遺跡に於ける分類であって何ら広域的に通有するものでもない。あくまでも便宜的な分類にすぎないことを断つておく。

### 北道手遺跡に於ける土器様相

ここでは、北道手遺跡出土の古墳時代初期の土器について、その土器様相を考えてみる。当地域の弥生時代から古墳時代にかけての土器研究の先駆として、大參義一氏の研究<sup>(1)</sup>業績がある。氏は70年代までの調査成果を基に伊勢湾沿岸を視座に捉えた土器編年体系を明らかにし、それまでの地域的混乱を整理した。その後、80年代に入りそれまでに増して大規模化した調査は膨大な資料を提供することとなった。こうした状況下で特に尾張部あるいは伊勢湾沿岸地域での調査例はこれまでの研究成果を見直すのみ充分な内容を伴っていた。赤塚次郎氏は東海系土器の実相を提示したうえで、グローバルな土器編年体系を提示した。<sup>(2)</sup>これまでより深層化した体系であったため、今日広く支持されている。基礎的な週間様式となつたのが、週間遺跡の出土資料であった。北道手遺跡出土土器は赤塚編年上の週間II式が最も多く、若干その前後を含んでいる。しかし、詳細に週間式土器と比較してみるとかなかずしもその範疇に収まり切れない様相も見いだされる。<sup>(3)</sup>週間遺跡が尾張南部であるのに対して北道手遺跡は尾張北部に位置していることに起因すると考えている。北道手遺跡が尾張南部との関係以上により北部すなわち美濃地方との相互影響の結果ではなかろうか。S字形口縁台付型（以下S字型）が煮沸具の主体的地位にあること。口縁内面に加飾する高環形土器の比率が高いこと。<sup>(4)</sup>尾張南部以上に北陸系土器製作の影響を受けた在地土器が多いことなどが挙げられる。これらを視点に土器様相を概観してみる。

北道手遺跡出土の土器として、壺形土器・甕形土器・高環形土器・器台形土器・鉢形土器・ミニチュア土器・特殊な土器として手焙形土器が出土している。

**壺形土器** 壺形土器Aはバレス形土器に当たる。口縁形態・文様構成等南部と軌道を共にするが、壺A3の264は円筒系の頸部をもち胴部文様に山形文を配さない構成となるうえ朱彩は認められない特徴を有す。口径部形態からは古相を示すが週間III式の土器と共に伴する。壺Bを一括して広口壺とした。B3の内側口縁土器やB4のような受口状を呈す土器は低い比率を示している。短く直口する頸部をもつB5（54）は他の壺に比して大型品で類例が少く、大形品はあるがカゴ目跡が見られる。壺Cの出土比率は低く、これとセットを成す大形器台も少ない。壺Dは樽ヶ壺坪形土器と称す器形である。頸部に凸帯を巡らす土器（266）は（264）と共に二重口縁壺E（265）とも共伴する。SD10の埋没後の廃棄で週間III式に比

定できよう。

**變形土器** く字形口縁甕A・受口口縁甕B・S字甕Cで構成されるが、甕Cが主体を示す。なかでもC2のb類が本遺跡の中心的存在となる。變形土器で明らかに他地域の土器製作の影響を受けたと考えられる一群が看取される。19・369の口縁部形態は北陸系土器製作に由来するのであろう。口縁部の擬回線等ではなくナデ調整のみで終わるが、19の胴部内部調整はケズリとなる。甕ではないが、鉢の278は口縁に擬回線を胴部調整にケズリを用いている。北陸系土器製作の影響を受けた土器は他に343の器台形土器も模倣された土器と考えられる。尾張北部から美濃地方にかけて明らかに北陸系土器を出土する遺跡に藤掛遺跡(笠松町)<sup>(6)</sup> 器台城内遺跡(岐阜市)<sup>(7)</sup> 特殊器台今宿遺跡(大垣市)<sup>(8)</sup> 月影式甕曾根八代町遺跡(大垣市)<sup>(9)</sup> 月影式甕があり、近年出土例が増えつつある。これらが搬入品かは今後の研究を待たなければならない。

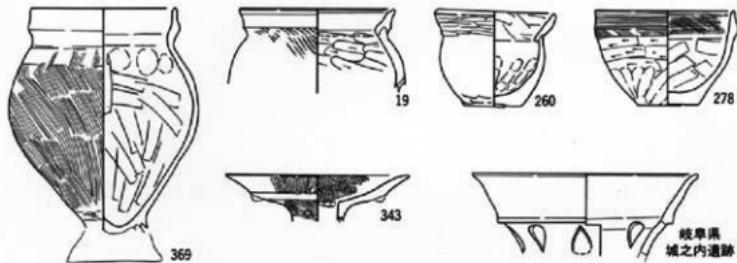


図20 北陸系土器

**器台形** 器台形土器には器台Aの大形品に比べて、小形のBの比率が高くかつ変化に富む特徴を土器持っている。<sup>(10)</sup>

**鉢形土器** 他の器種に比べて変化に富む。無台で112の如く朱をといたと思われるもの、135は精製された胎土に丁寧にヘラミガキされており、典型的な尾張の土器。286は小型丸底壺を連想させる。しかし、平底でかつハケ調整の土器となる。263は使用の痕跡ではなく、土坑出土の45などは全面に模が付着する違いを示している。

その他の検出遺物ではあるが、396は唯一出土したタタキ甕である。390のようなヘラ描き紋を持つ一群がある。321~324・395は人物と船を描く線刻絵画土器である。手焙形土器片が2点(44・320)ではあるが出土している。

**高环形  
土器** 高环A・B・Cに分類した。特に高环A1は本遺跡を特徴づけている。口唇部や口縁内面にクシ横線や沈線文を施すことにある。加飾を視座に更に分類できる。A1-a類：口唇部に数条の文様を施す。A1-b類：口縁内面に幅広に文様を施す。A1-c類：口縁部を肥厚させて文様を施す。系譜的にA1-a類→b類とA1-a類→c類の2系統ある。口唇部への加飾は高环の口唇部面取りが前提であるゆえに、加飾への発展は比較的広い範囲で生じたのではないか。しかし、三河部では面取りの伝統がありながら加飾高环は見られない地域であった。発展の中心地は尾張から美濃更に近江東部に限定される。特にb類は美濃西部に中心が、a類は近江東部が中心地となる。

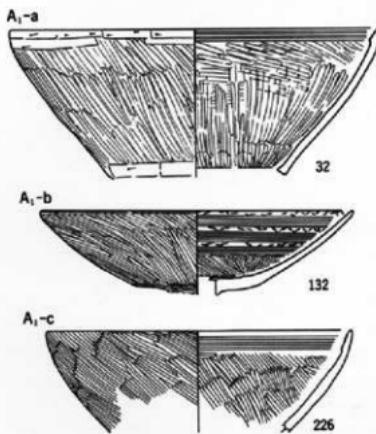


図21 高環A1分類図

- (注) (1) 1968 大參義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』第47輯。  
1974 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号。  
(2) 1990 赤塚次郎「廻間式土器」「廻間遺跡」附愛知県埋蔵文化財センター。  
(3) 土器型式の設定の前提条件として、共有する時間幅と共有する地域が存在し、この二者を諸条件の元でどのような枠組みを構築するかである。巨視的に枠組みを共通的な文化圏とし、微視的な変異を地域的小文化圏として捉えられる。廻間式土器は尾張南部域の土器様式である。これを取り囲む地域では地域的小文化圏をそれぞれ形成していると考えられる。  
(4) 煮沸具はその本来の機能を究極的に追及すれば、器壁を極力薄くするであろうし、還元炎の効率を最大限に生かそうとすれば胴部の形へ影響を与えるであろうし或いは底部そのものを火元から一定の距離を保つ工夫（台を付ける・支脚）へと指向するであろう。その意味でS字口縁台付變形土器（以下S字彫とする）は煮沸具としては完成された一つの姿と言える。であるならば、S字彫が主体を占める地域があり、その機能故に他地域に移動し得たのは理解できる。しかし、S字彫がく字彫を圧倒する地域は尾張北部から美濃西部にかけて限られてくる。  
(5) 加飾土器のうち加飾（口縁内面を加飾する）高杯はS字彫と同様な分布域を示すと考えられていたが、東海南部域即ち三河と伊勢地方には分布をみない。一方、尾張西部から美濃西部・近江東部にかけて濃厚に分布している。二者を東海的土器と考えると異なる分布域はただ単なる土器そのもの機能に起因するのではなく、もっと本質的な要因を含んでいるようである。  
(6) この遺跡は正式調査によるものではなく、従ってその名称も一定していないが、現木曾川の河道の中洲部から多量の古式土師器が出土している。その中に北陸系の装飾器台の脚部が1点ではあるが含まれている。1981 宮川将治「線刻絵画」のある土器について』『岐阜県考古』第8号。  
(7) 装飾器台の杯部が1点出土している。花弁形の透かしが北陸系の特徴的をあらわしている。岐阜県教育委員会『城之内遺跡』岐阜市文化財報告1990-1。廻間II式～III式に比定できる。  
(8) 大垣市教育委員会の鈴木・高田両氏の好意によりご教示をいただいた。  
(9) 未報告資料にもかかわらず大垣市教育委員会の鈴木・高田両氏より実見の機会を得た。  
(10) 器台の大形・小形は時間的な幅で捉えることが一般的である。本遺跡では、廻間I式～3式に比定できるが2式が中心となることから大形の器台の消失期にあたっている。しかし、小形器台とセット関係になる壺は器台の点数に見合うだけの個体数は認識していないのが現状である。  
(11) 口径は体部径を凌駕する器形は、口頭部を大きく開き、やや縦長な球形気味な体部となる丸底とはならず、小さな平底となる。小形丸底壺の先行的形態を連想させる。類例は未見である。

A区 SD 05

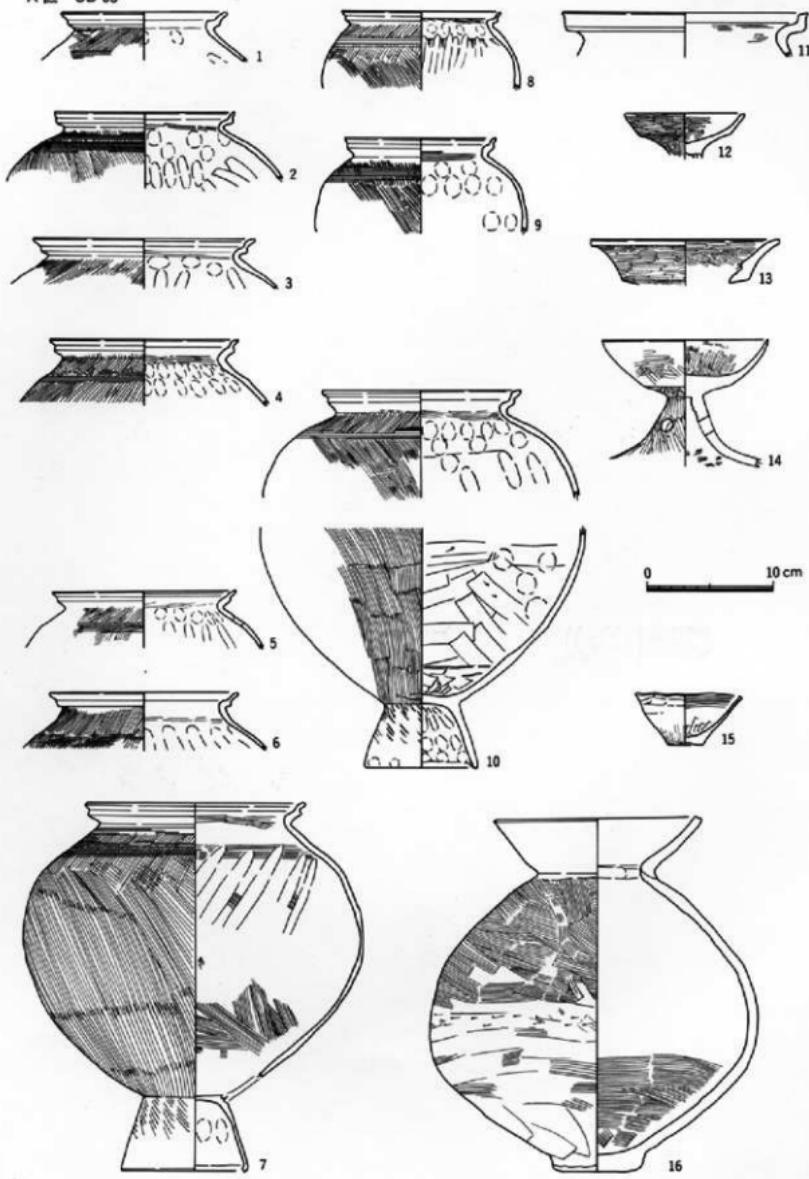


図22 II期土器実測図 A区 SD 05

A区 SD 19

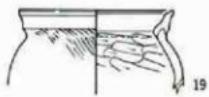


17



18

A区 SD 25



19

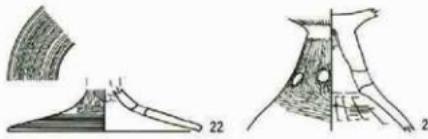
A区 SD 27



21



20



22



23

A区 SD 36



26

A区 SK 15



27



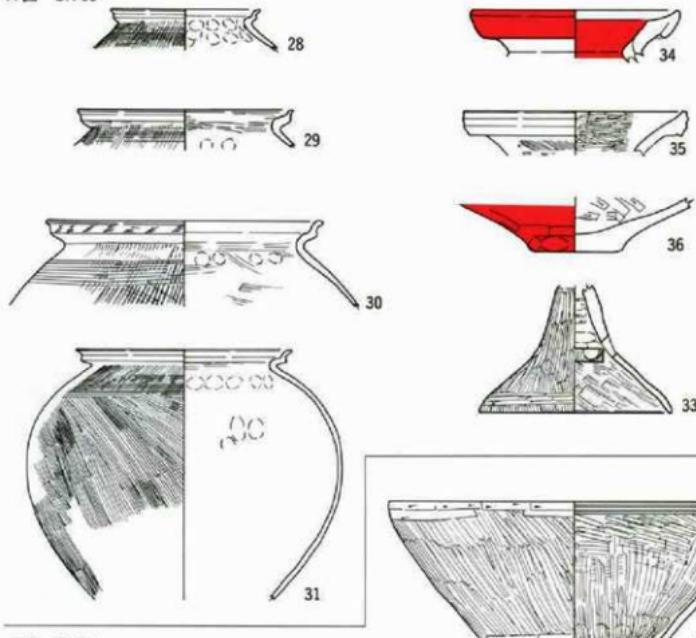
24



25

图23 II期土器実測図 A区 SD 19・25・27・36・SK 14

A区 SK 16



A区 SK 18

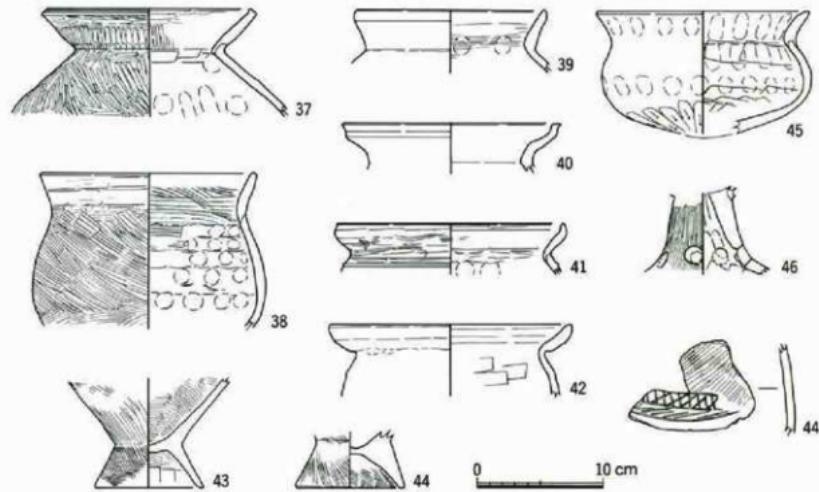


図24 II期土器実測図 A区SK16・18

A区 SK 19

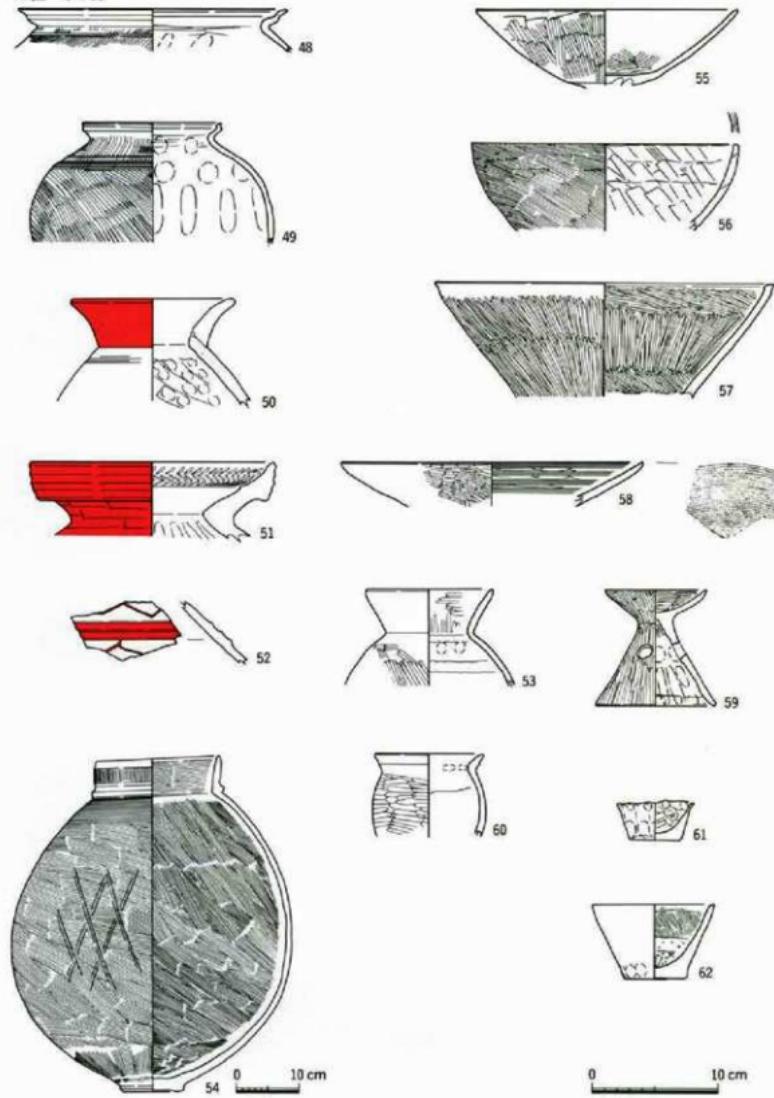


図25 II期土器実測図 A区 SK 19

A区 SK 24

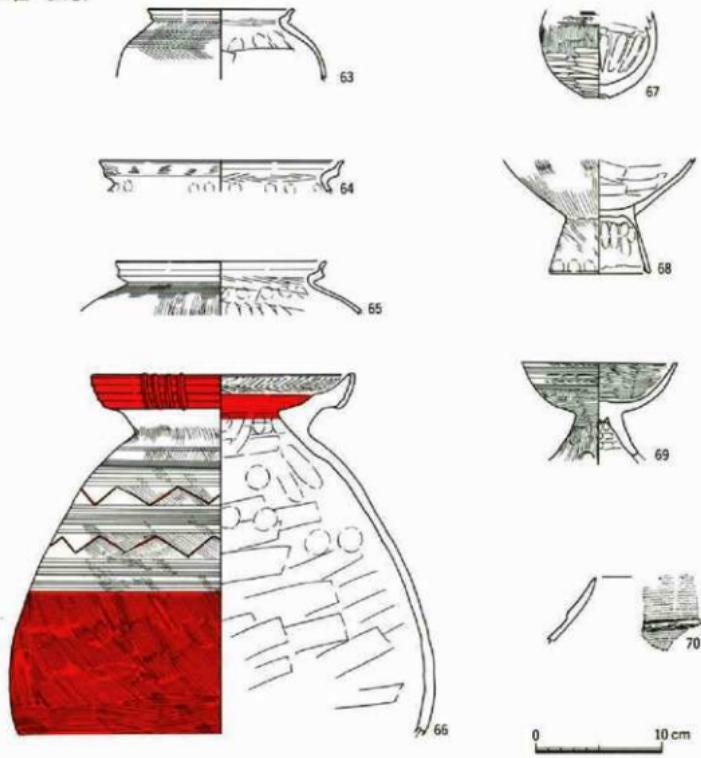


図26 II期土器実測図 A区 SK 24

A区 SK 27

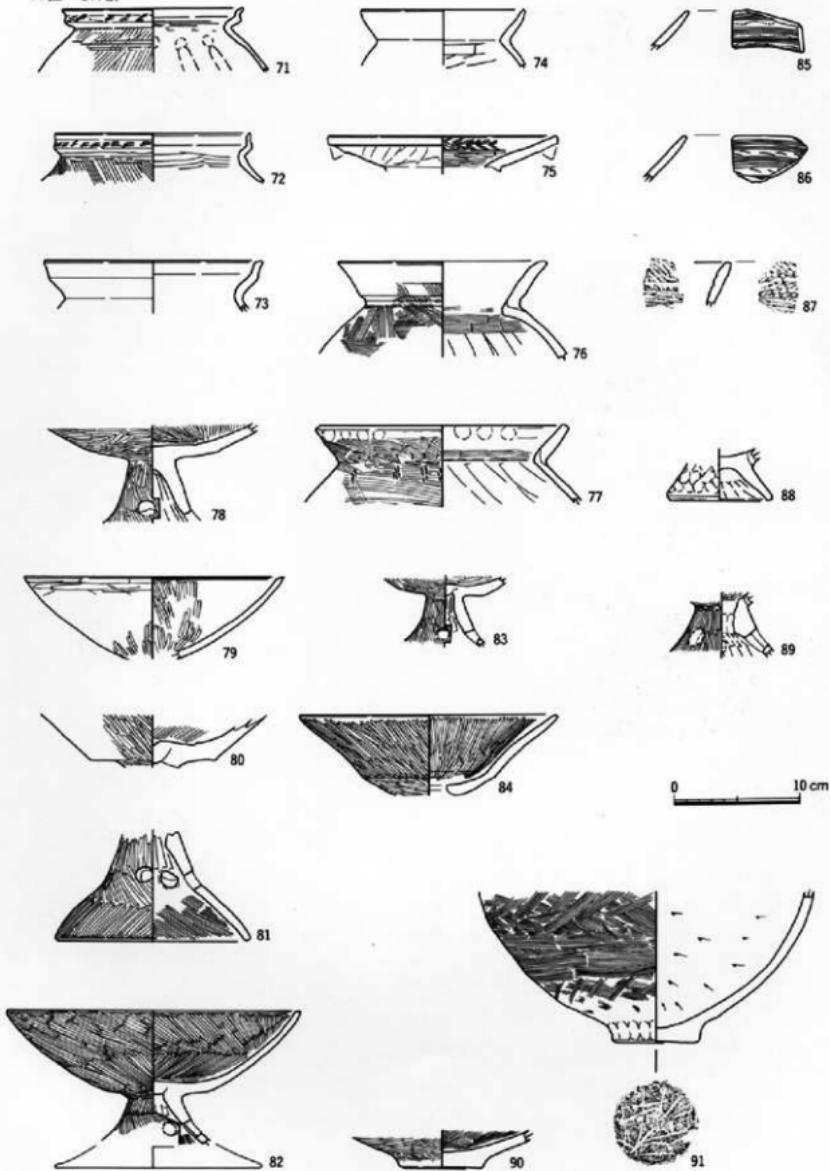
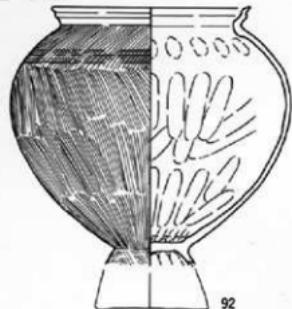


図27 II期土器実測図 A区SK27

A区 SK 28

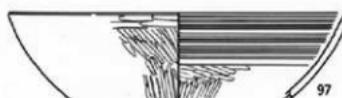


A区 SK 33

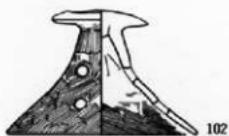


0 10 cm

A区 SK 34



A区 SK 48



A区 SK 49



图28 II期土器実測図 A区SK 28・33・34・48・49

A区 SK 55

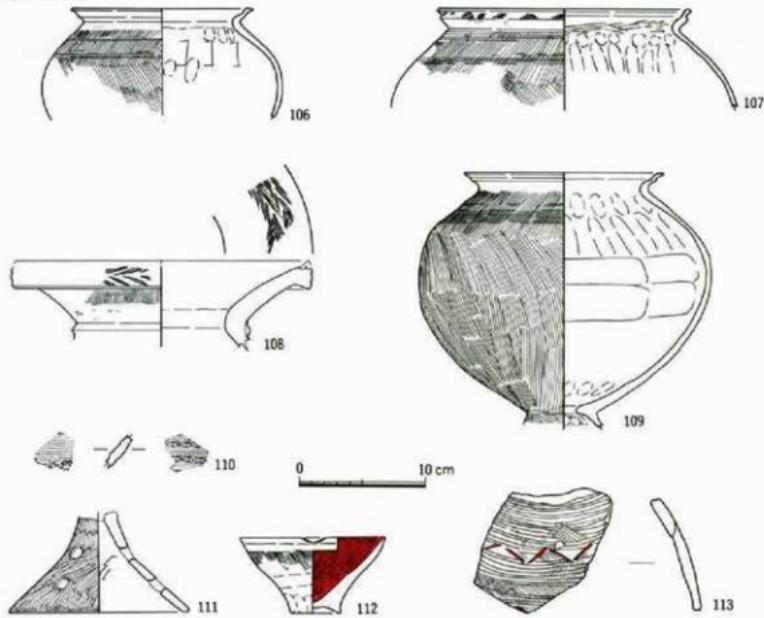


图29 II期土器实测图 A区SK55

A区 SK 56

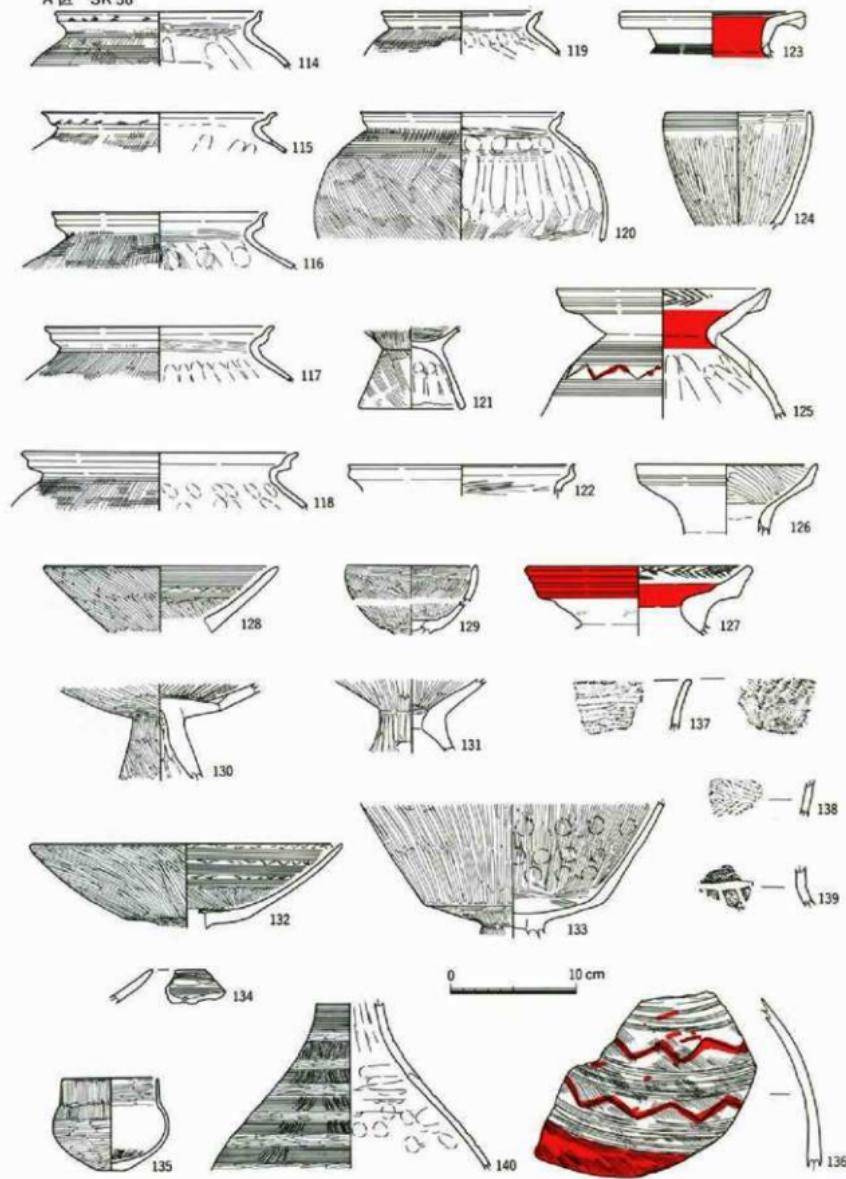


図30 II期土器実測図 A区SK56

A区 SK 58

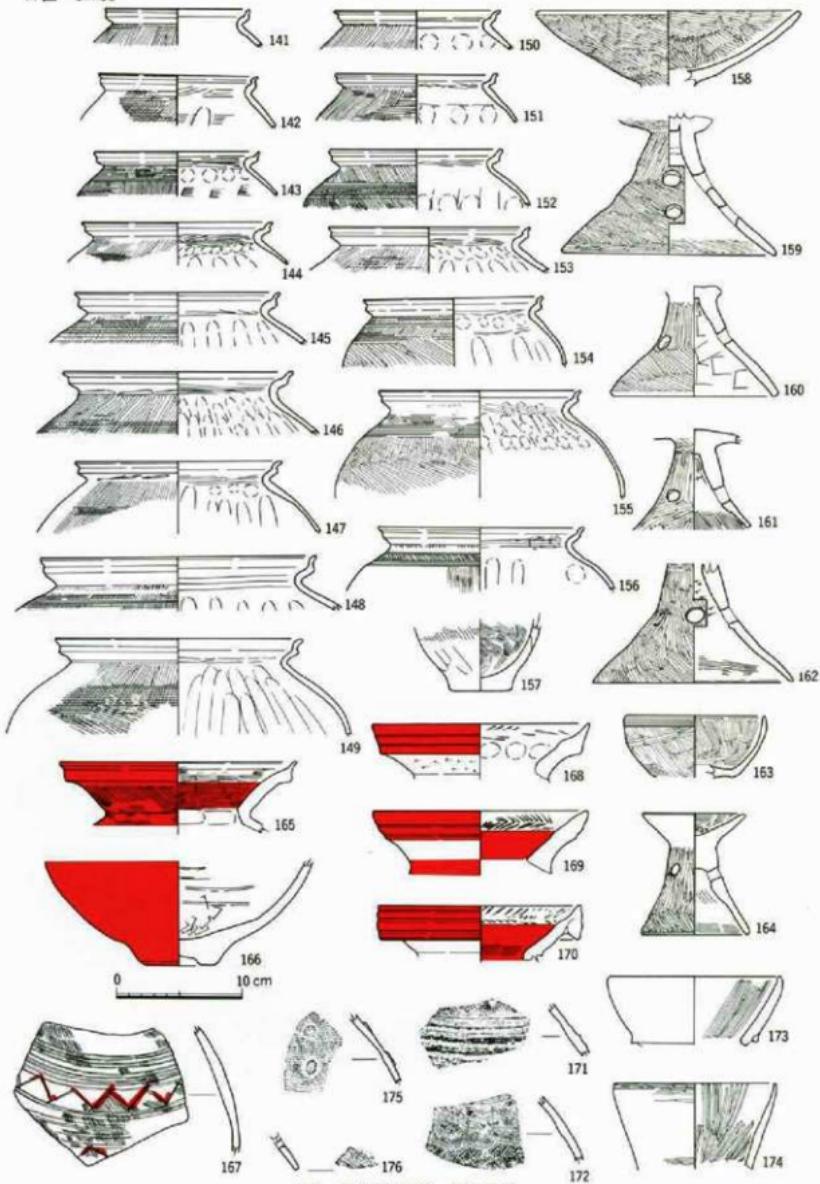
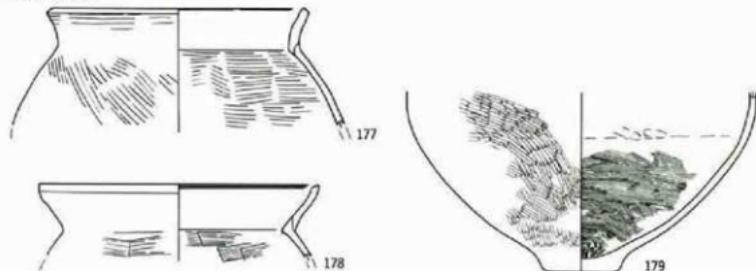


図31 日期土器実測図 A区 SK 58

A区 SD 34



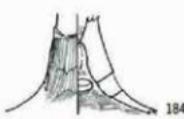
A区 SD 37



A区 SD 38



A区 SD 44



A区 SD 64



A区 SD 65

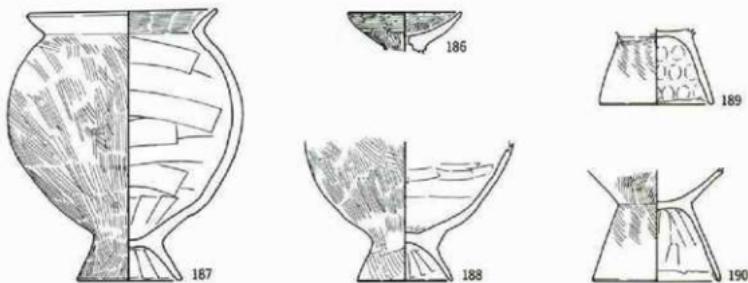
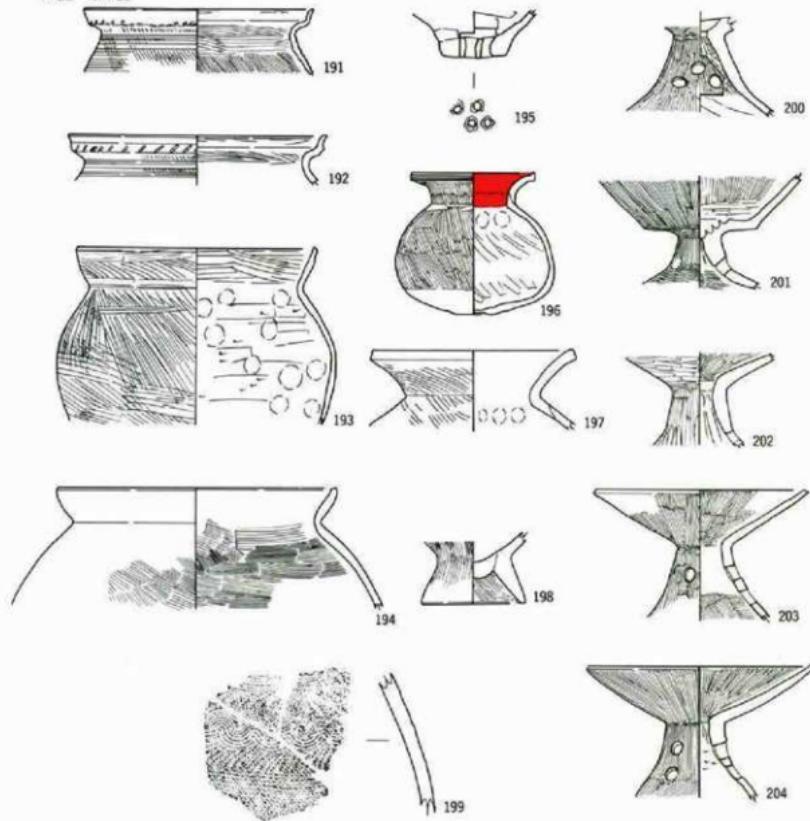
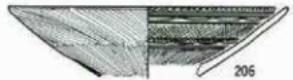


図32 II期土器実測図 A区 S D34・37・38・44・64・65

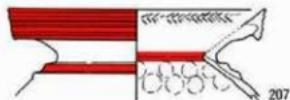
A区 SK 59



A区 SK 68



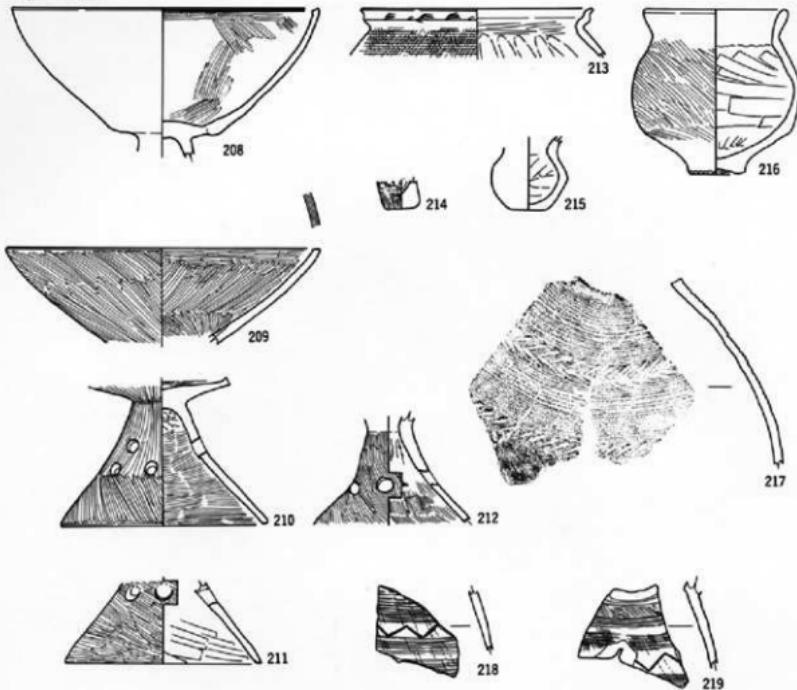
A区 SK 99



0 10 cm

图33 II期土器实测图 A区 SK 59+68+99

B区 SD 91



B区 SD 102



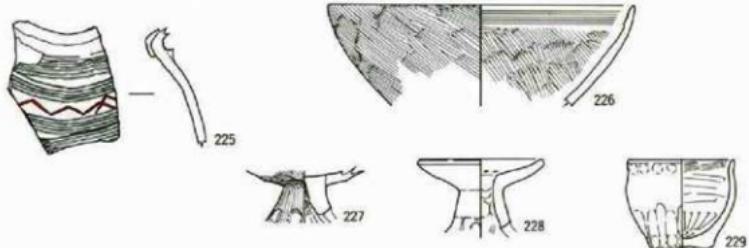
0 10 cm

B区 SD 103

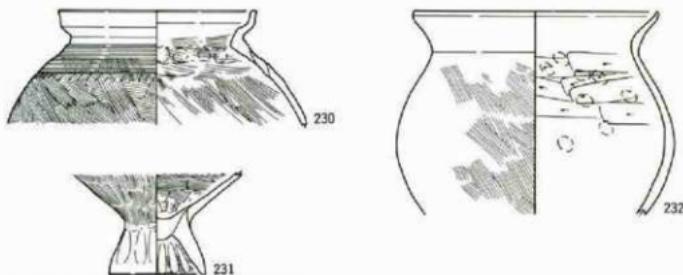


图34 II 湖土器实测图 B区 SD 91 + 103 + 104

B区 SK 103



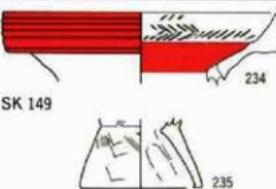
B区 SK 104



B区 SK 121



B区 SK 149



0 10 cm

B区 SK 126

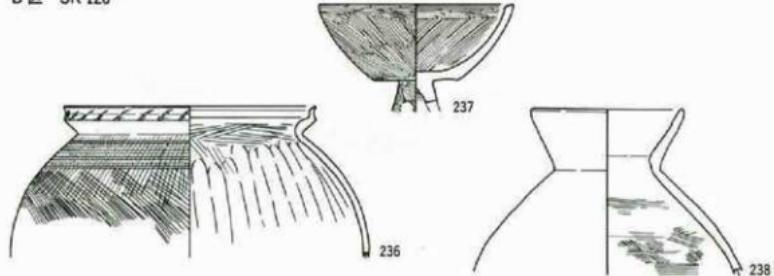
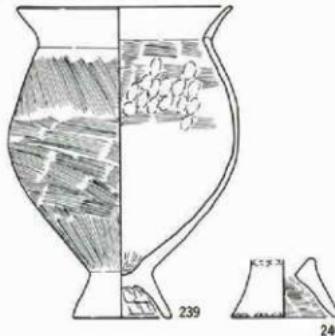


図35 II期土器実測図 B区 SK 103・104・121・126・149

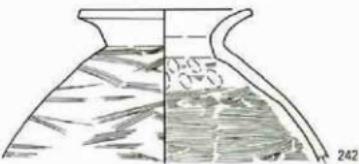
B区 SK 174



B区 SK 186



B区 SK 201



B区 SK 202

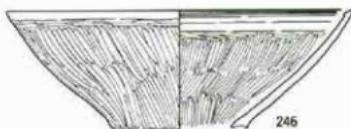
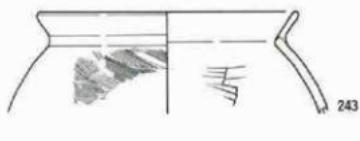


図36 II期土器実測図 B区 SK 174・186・201・202

C区 SD 10

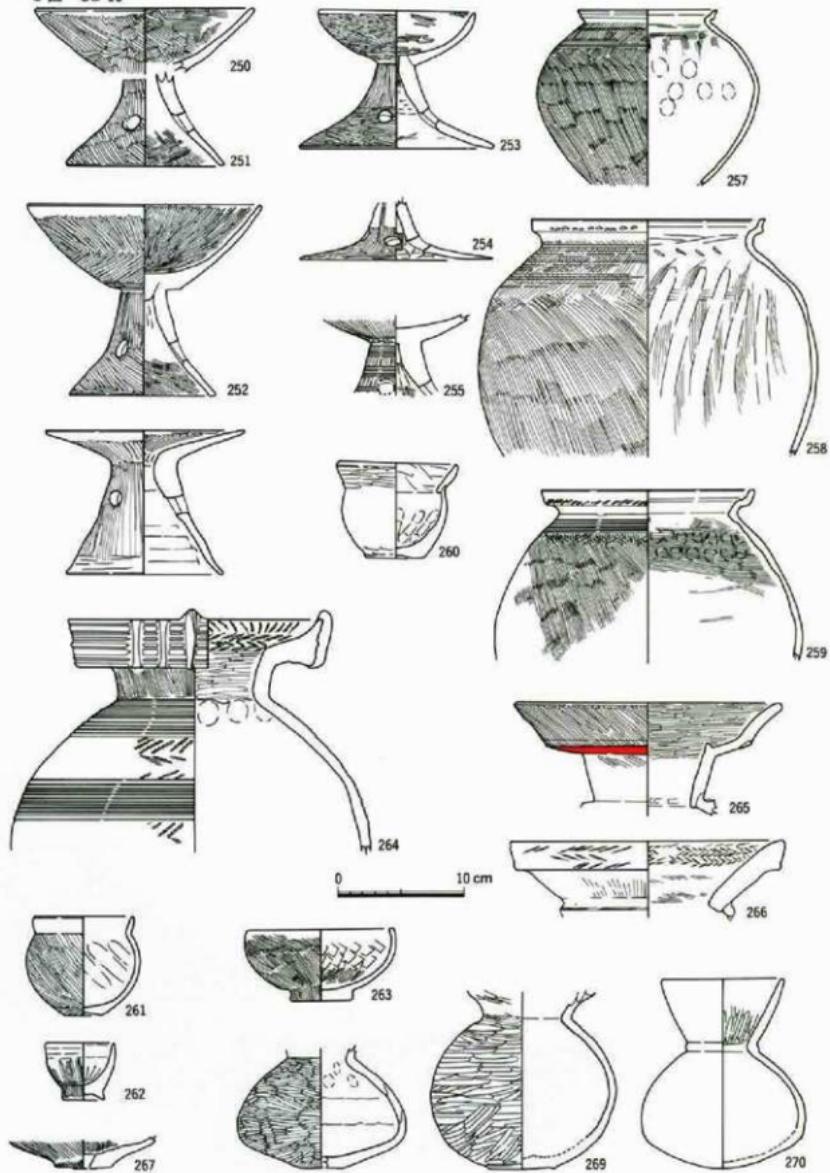


图37 II 湖土器実測図 C区 SD 10

C区 SD 10

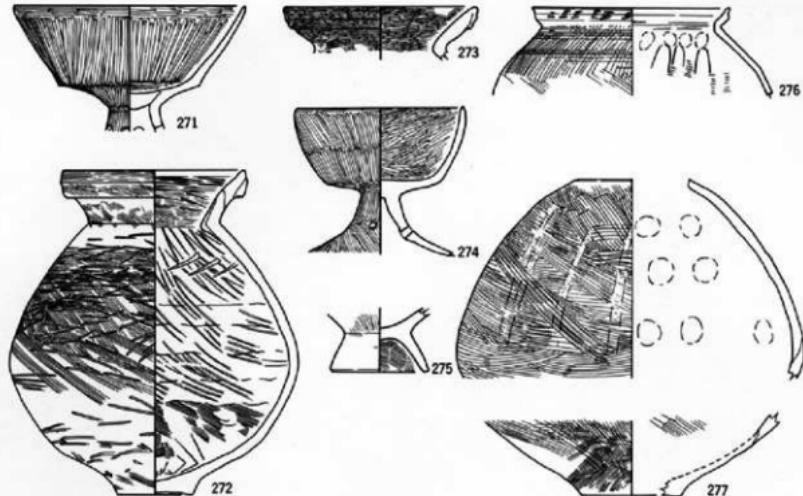
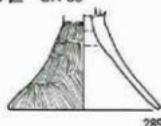


图38 II期土器实测图 C区 SD 10 D区 SD 10

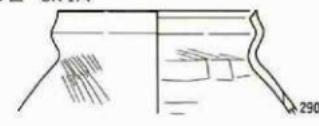
C区 SD 67



C区 SK 68



C区 SK 174



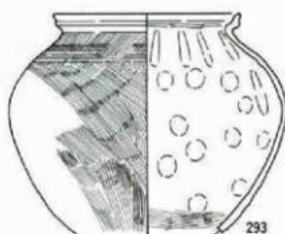
D区 SD 03



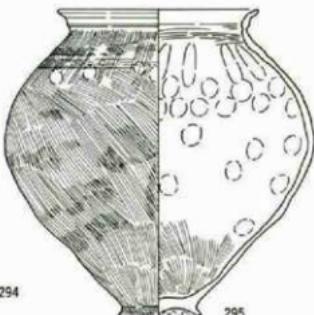
D区 SD 09



D区 SD 15



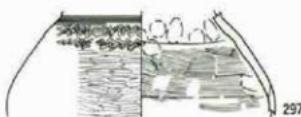
0 10 cm



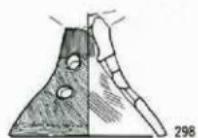
D区 SD 16



D区 SD 18



D区 SD 20



D区 SD 21

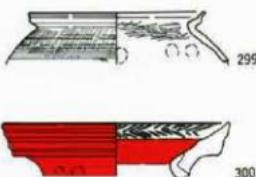


图39 II期土器測図 C区SD67・SK68・174 D区SD03・09・15・16・18・20・21

C 区 SD 87

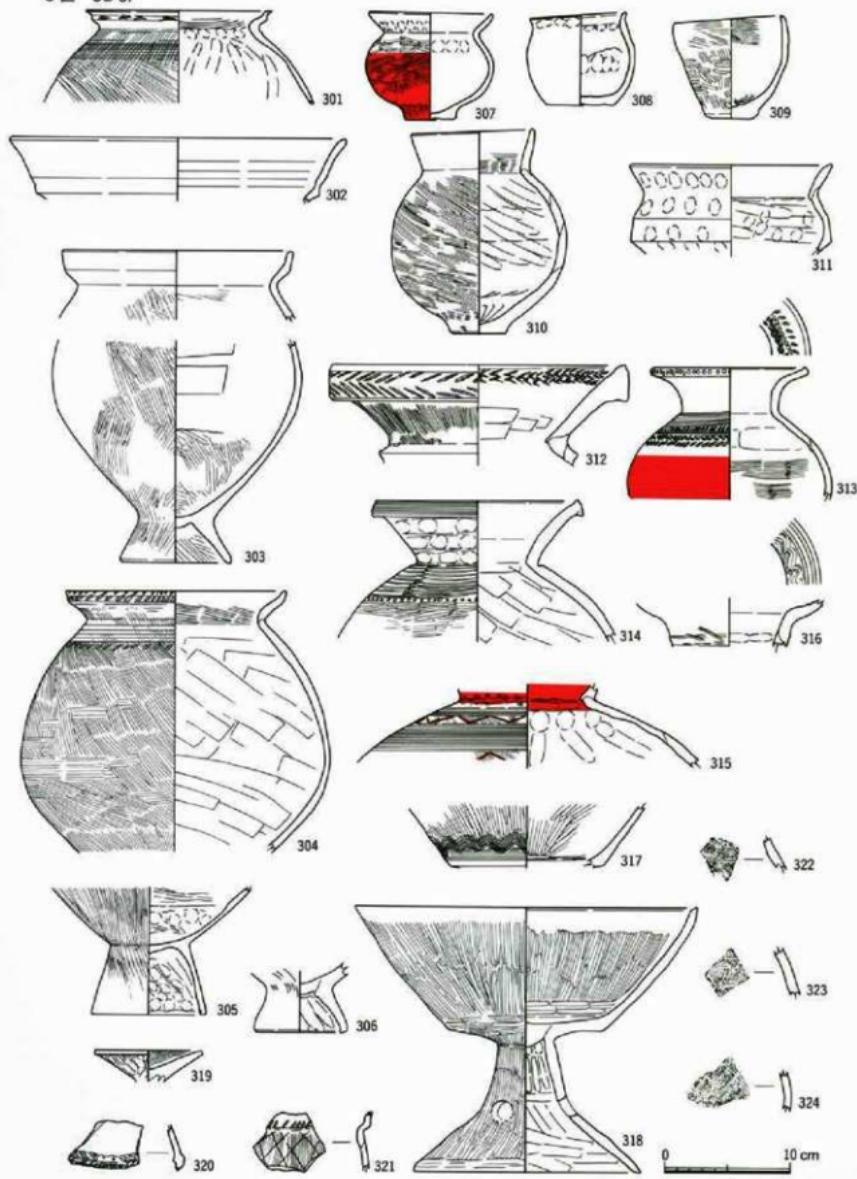
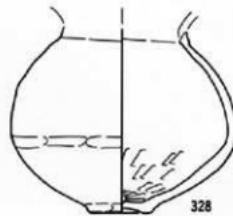
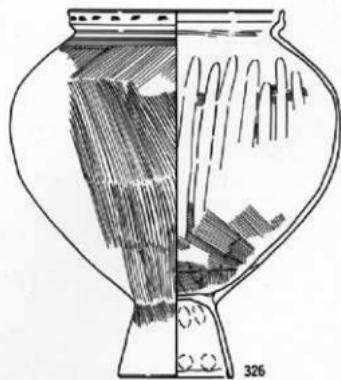
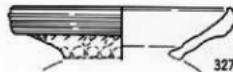


図40 II期土器実測図 C区 SD 87

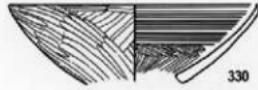
D 区 SK 01



D 区 SK 02



D 区 SD 25



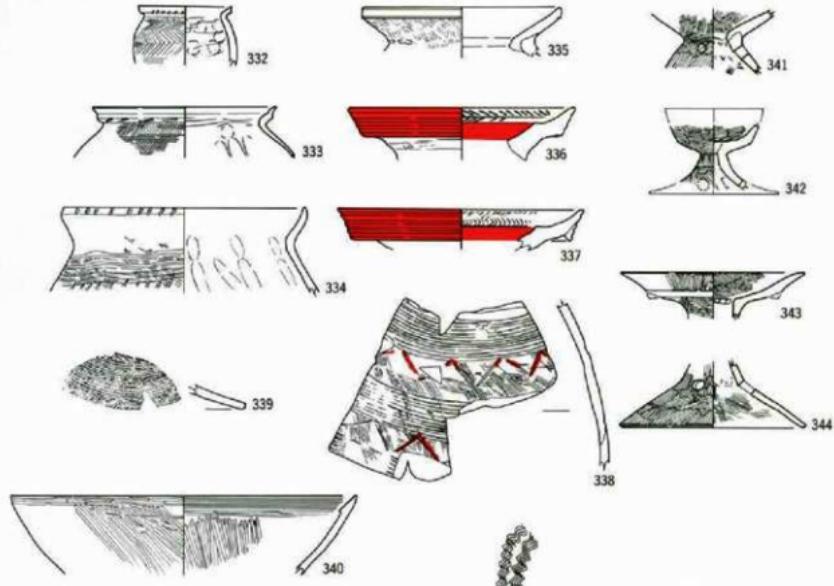
D 区 SD 43



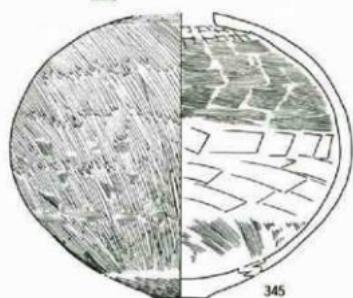
0 10 cm

図41 II期土器実測図 D区 SK01・02・SD25・43

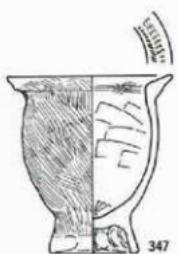
D 区 SK 16



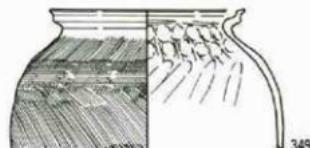
D 区 SK 21



D 区 SK 25



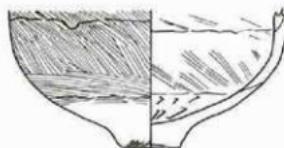
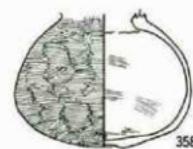
D 区 SK 22



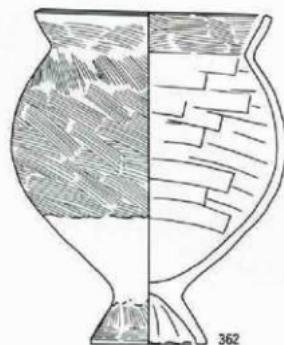
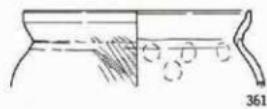
0 10 cm

图42 II期土器实测图 D区 SK 16・21・22・25

D区 SK 26



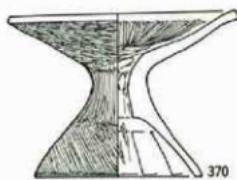
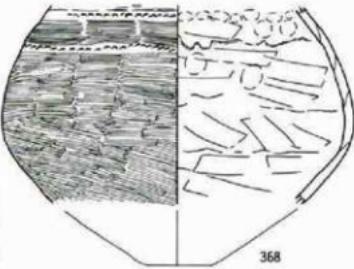
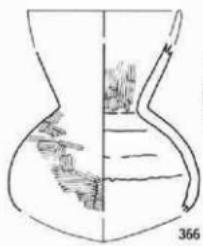
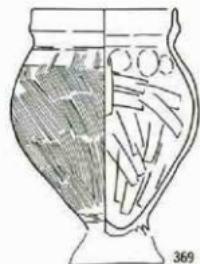
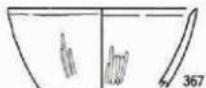
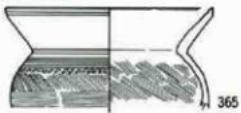
D区 SK 28



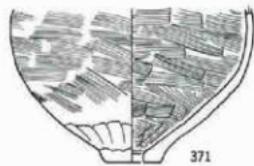
0 10 cm

図43 日期土器実測図 D区SK26・28

D区 SK 29



D区 SK 38



D区 SK 39



0 10 cm

D区 SK 40



D区 SK 41

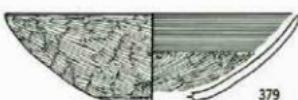
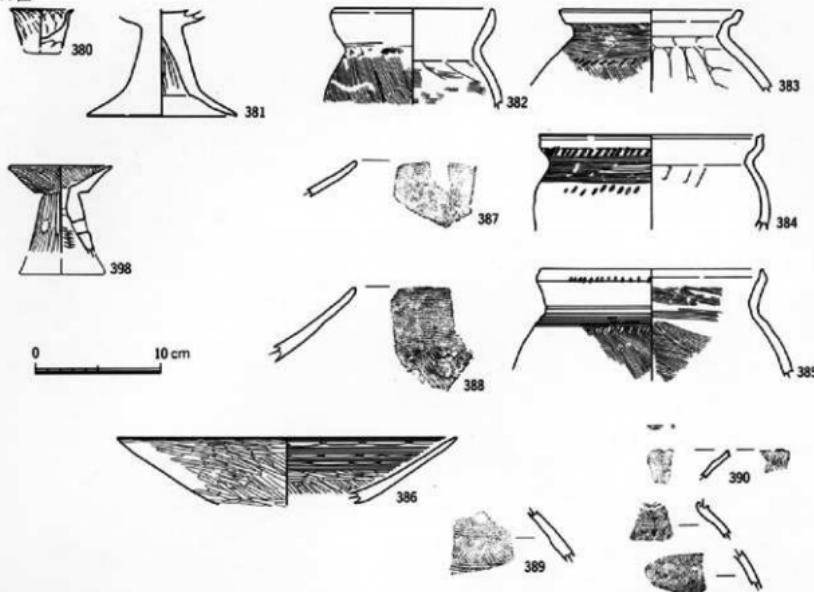
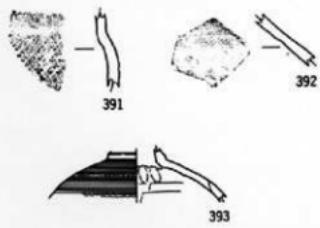


図44 II期土器実測図 D区 S K29・38・39・40・41

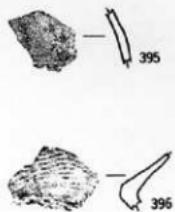
## A 区



## C 区



## E 区



## D 区

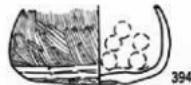


图45 II期土器实测图 包含层出土

### III期の遺物

III期 III期の遺物は、概ね8世紀代の須恵器となる。なかに435の白色系陶器と称される遺物と436の土師器甕を含んでいる。須恵器は美濃須衛産と考えられるが、一部に猿投産も含まれる。

#### 杯身 (404~419) : 美濃須衛産

404~408は高台付の杯身である。404は腰に明瞭な稜を持たず直線的に開く。405・406は腰に明瞭な稜を持ちやや反り気味に立ち上がる。407は腰に明瞭な稜を持つが外反ではなく、口縁部を摘み上げている特徴を持つ。408は406等と同様に口縁は外反するが、底部外面が高台部を上回り突出する形となる。

#### 無台杯身 (409~414) : 美濃須衛産

いずれも明瞭な底部を持たず、直線的な口縁部をつくる。底部に粘土巻き跡を残している。410の内面には煤・タールの付着が認められ灯明皿としての使用が考えられる。412・413の内面底部からタールの付着が口縁部にかけて認められる。

#### 碗 (415~418)

415・416は底部をやや突出するが、口縁部で強く外反する共通を示す。417あるいは418は平底となろう。418は大形品で前3者に比べて口縁の外反は弱く、腰中央部に1条の沈線をもつ。これは佐波理碗の写しと考えられる。いずれも、美濃須衛産と考えられる。416・417の内面に煤が付着していた。

419はおおきさから鉢であろうか。420は高盤の杯部と思われる。美濃須衛産？

#### 杯蓋 (421~427)

いずれも擬宝珠の摘み部を持つと思われる。422~427は口縁端部でわずかに折り返す。421は折り返しがなく新しい。427は1条沈線を施しており、佐波理碗の蓋か。

428は瓶の口縁部か？429は小瓶、430は口縁部が特徴的で鉢に近い甕であろう。431は長頸瓶の口徑部、下が研磨されており何かに転用されたか。猿投産？

432は器面に亀甲文を配し中空の2本の筒が付く。碗の蓋か？

433は形象窓の四足の前足と思われる。434は器面に鱗状にヘラ文があり形象窓の一部か？

435はC区のSK64から単独で出土。小型の高盤に托を組み合わせたような形状を示す。全体に淡い白色で艶い感じがする。

436は8C代の土師器甕である。

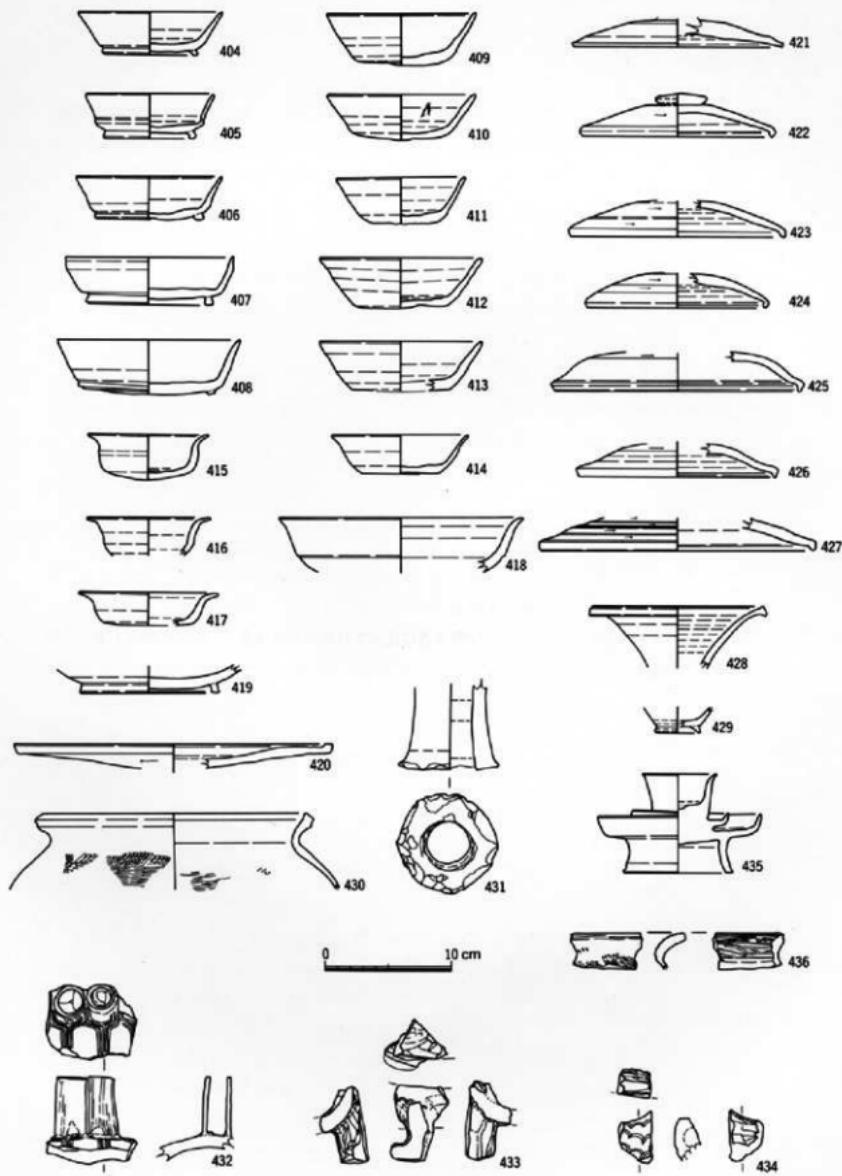


图46 Ⅲ期土器实测图

## IV期の遺物

IV期 IV期は一部に12世紀後半を含むが、大半が13世紀代の前半期に限られる。灰釉系陶器を北部系と南部系に大別したとき、本遺跡ではほぼ同比率となる。土師質皿は94E区13C前半の灰釉系陶器と共にした。輸入陶磁・常滑窯・土師質鍋等をIV期の範疇で扱う。

### 灰釉系碗 (437~449)

北部系は437・440・442・443・445~448、南部系は438・439・441・444・449である。439・443・447・448・448の内面に煤の付着が認められる。

### 灰釉系皿 (450~464)

450は唯一高台を持つ小皿で12世紀後半と思われる。北部系は452・454・456・457・458・459・462で、南部系は451・453・455・461・463・464である。461は内面に煤が付着している。

### 土師質皿 (465~479)

口径が13~14cmとなるタイプと10cm未満のタイプがある。前者の特徴は467を除いて厚手の作りで口縁端部を回転による強いナデ調整を行っている。470~479は非ロクロ成形となる。470は内面に煤が付着している。

### 輸入陶磁 (480~483)

480・481は連弁文を持つ青磁碗、482は文様のない青磁碗で龍泉産であろう。483は同安産の青磁皿となる。12世紀後半から14C世紀の初頭に比定できる。

484・485は口縁端部を内側に折り返した鍋である。486は羽釜である。487は内耳鍋、488は灰釉系陶器の鉢となる。489・490は常滑の大甕で491は火鉢であろうか、足部のひとつである。

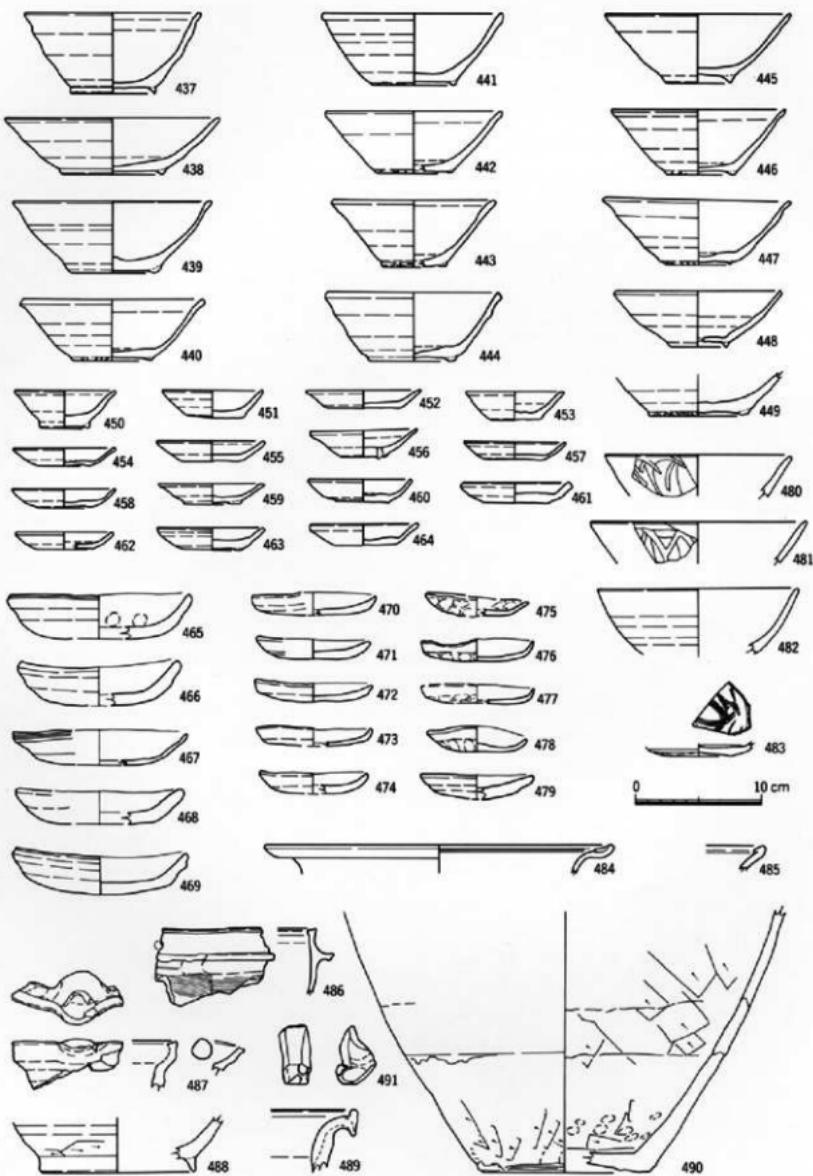


图47 III期土器实测图

## 墨書き土器

### 墨書き土器 (492~513)

北道手遺跡からは21点の墨書き土器が出土した。21点中18点が94E区から出土している。492は8世紀代の須恵器で残りは全て灰釉系陶器であった。墨書きが描かれたのは、492は口縁部に近い外面であるのに対して灰釉系陶器の場合は全て底部外面である。

492は鉄鉢を写した須恵器体である。2文字描かれているが左の墨書きは何か漢字の読みだらうか。右は佛と読める。

灰釉系陶器に描かれた墨書きは記号的なもの(499の○とか507の×)と漢字(498)や平仮名(500)に分類できる。灰釉系陶器20点中の5点が小皿の底部に描かれている。493・494の墨書きは解読できないが、底部から側面にかけて底部で十字状に何かの路がみとめられる。火棒の路と思われる。口縁部には火棒によるくぼみがあり焼成前に掛けられていた。墨書きは火棒に切られている。496は×で498は楷書で鳴六と人名であろうか。500は平仮名でいぬと読める。501・508もいぬと読みないだらうか。503は読みないが、509は台所か?

南部系や北部系を問わず墨書きされており、墨書きの内容も一定しない。概ね13世紀代に比定できる。

番号	調査区/遺構	器種/分類	积文	墨書き部位	備考
E-492	C S D85	須恵器 鉢	□佛	体部外面	美濃須衛?
E-493	E 檜出II	灰釉系陶器 皿	□(六カ)	底部外面	"北部系,火棒"
E-494	E 檜出II	灰釉系陶器 皿	□	底部外面	"北部系,火棒"
E-495	A 檜出II	灰釉系陶器 皿	□	底部外面	北部系
E-496	E 檜出II	灰釉系陶器 皿	十	底部外面	南部系
E-497	E 檜出II	灰釉系陶器 皿	□(十カ)	底部外面	北部系
E-498	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	鳴六	底部外面	北部系
E-499	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	○	底部外面	北部系
E-500	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	いぬ	底部外面	北部系
E-501	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	い□(ぬカ)	底部外面	北部系
E-502	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	上	底部外面	北部系
E-503	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	[ ]	底部外面	北部系
E-504	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	[ ]	底部外面	北部系
E-505	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	[ ]	底部外面	北部系
E-506	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	[ ](十カ)	底部外面	北部系
E-507	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	十	底部外面	南部系
E-508	A S K92	灰釉系陶器 梗	い□(ぬカ)	底部外面	南部系
E-509	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	臺所カ	底部外面	南部系
E-510	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	○	底部外面	南部系
E-511	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	け□(さカ)	底部外面	南部系
E-512	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	[ ]	底部外面	南部系
E-513	E 檜出II	灰釉系陶器 梗	[ ]	底部外面	南部系

第3表 墨書き土器积文一覧

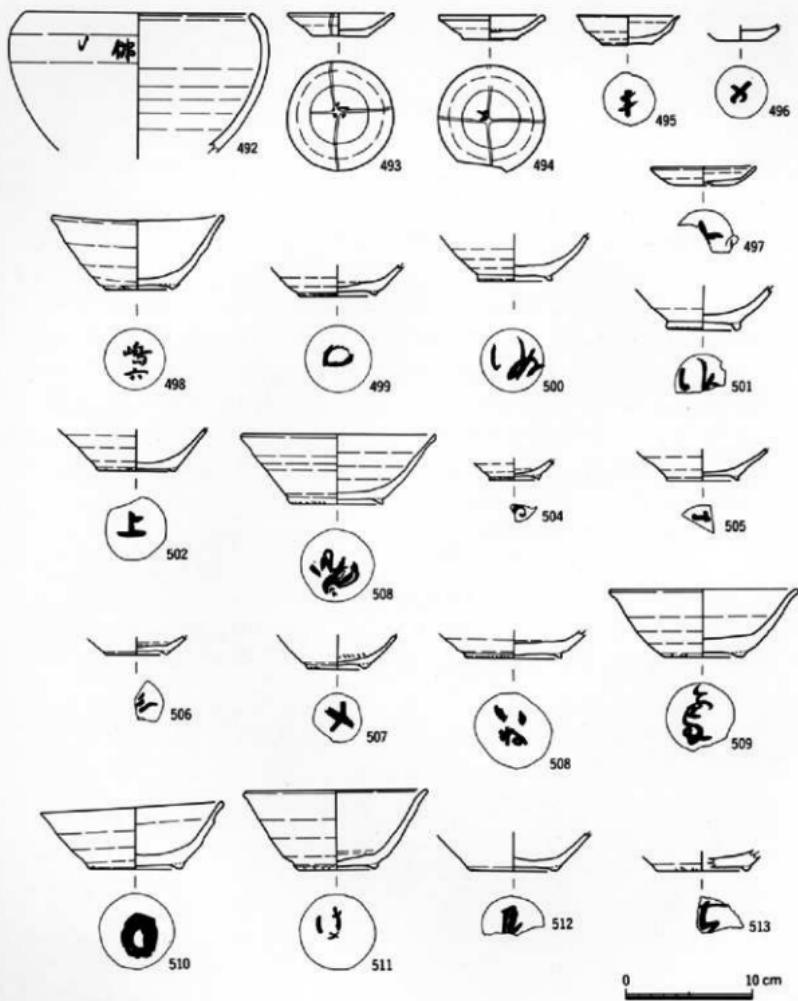


図48 墓出土器実測図

## 第2節 その他

### 石製品(1~25)(図52)

すべての調査区から出土したが層属時期はかならずしも明確にできない。出土した石製品の内容は打製石鎌・搔器・打製石斧・敲石・砥石であった。

#### 打製石鎌(1~6)

凹基形石鎌1点、有基形石鎌4点、柳葉形石鎌1点の計6点である。1はホルンフェルス製で両肩に棱をもつ五角形を呈す。2はチャート製で短い基部を持つ。1と同様五角形をしている。3はチャート製で棱を持たない三角形となる。4は6.4gと他に比べて格段に重い。チャート製である。5は透明度の高い黒曜石製でめずらしい。縦長であるが五角形をしている。6はいわゆる下呂石の安山岩系の基部を丸くするタイプである。これらは、弥生中期に属すると思われる。

#### 搔器(7)

両端の一部を欠くが $4 \times 2.3$ cmの長方形を呈す。石質は安山岩系である。

#### 打製石斧(8~9)

8は一部を欠損しているが全体として長方形状を呈すると考えられる。石質が安山岩系であるため(7)と同様な搔器かも知れない。9は結晶片岩で先端から側面にかけて摩滅の跡が認められる。弥生中期の掘り具か?

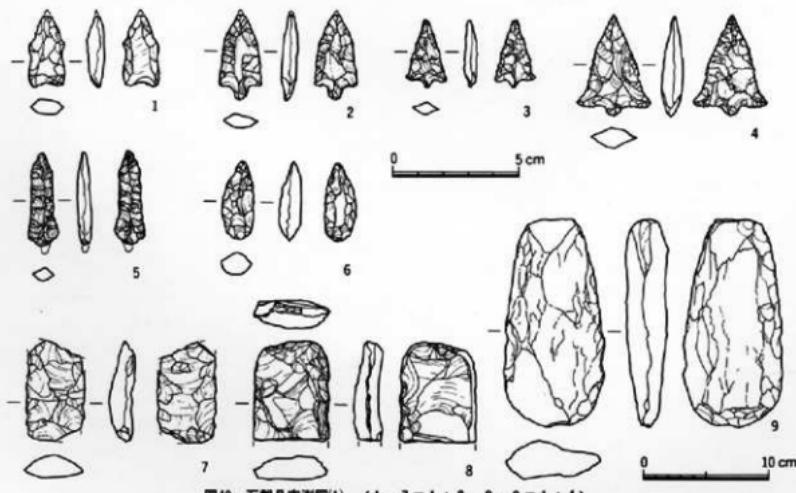


図49 石製品実測図(1) <1~7=1:2、8~9=1:4>

敲石 (10~14)

5点の敲石が出土した。いずれも円筒形のいかにも握りやすい長さ15~18cmの河原石で両端がすり減っている(10~14)。一部に側面をも摩滅の模跡がある(11)。10は漂飛流紋岩、11は砂岩、12は漂飛流紋岩、13は凝灰岩、14は安山石質凝灰岩となる。帰属時期は判然としないがⅠ期からⅡ期に属すると考えていいだろう。これらに対応する皿状の石は出土していない。

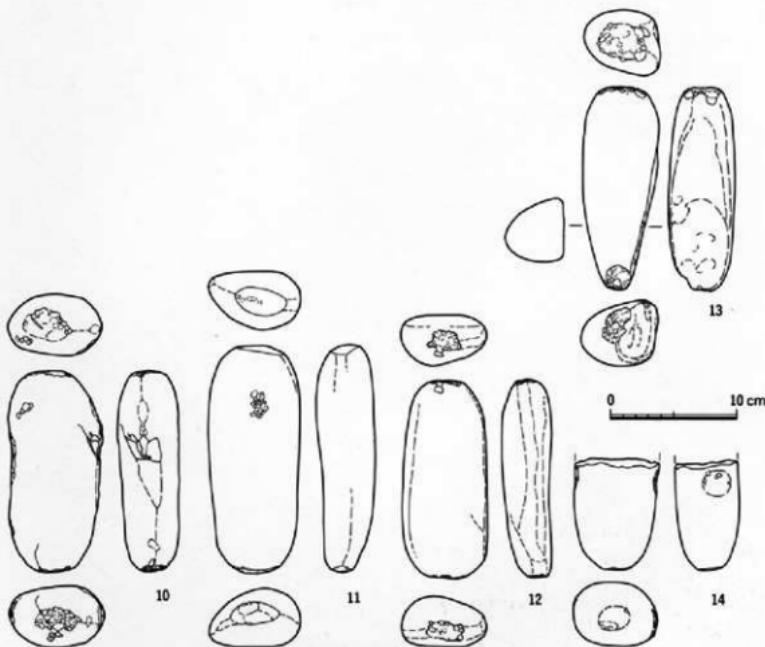


図50 石製品実測図(2) <1:4>



図51 石製品実測図(3) <1:3>

#### 砥石 (15~25)

大小は別として形態上、方形と長方形の2タイプがある。石質はさまざままでホルンフェルスが15・19、流紋岩質凝灰岩は16、頁岩は17、泥岩は18、凝灰岩は20・22・23・24、安山岩は21、砂岩は25とばらつきある。使用工程上に起因するのであろうか。いずれも小型品であり、手持ち砥石と思われる。出土状況からII期に属すると思われる。

## 土製品(514~544)(図52)

ここに土製品とするのは、加工円盤（II期・IV期）・陶丸・加工土器・土錐・土玉・土鈴である。帰属時期は判然しない。

### 加工円盤（514~526）

加工円盤にはII期に属するものとIV期に属するものがある。514~523はII期に属する。523の径2.7cmを除いて5cm前後の大きさに集中する。使われた土器も壺・甕・高环と一定しない。不定形ながら周縁を乱暴に打ち欠いただけである。

524~526はIV期に属する。524は擂り鉢を525・526は灰釉系陶器の再利用品である。形態はII期もIV期も同型であるが、時代と規模の違いはそれぞれの使用法に起因するのである。

### 陶丸（527）

灰釉系陶器で径2cmの大きさである。

### 加工土器（528~533）

加工土器とは土器片を用いて、その周縁がすり減っているものを指す。II期の所産である。器種は壺片が528・530・531で他は高环片を利用している。使用目的は語れない。

### 土錐（534~543）

円形容と管状との2タイプがあった。534・540~543はI期又はII期に属する。

543は全面に朱彩を施している。

542・543は土錐ではなく別の装飾性の高い土玉であるかも知れない。

### 土鈴（544）

紐部と球形部の一部を欠く。IV期に比定される。

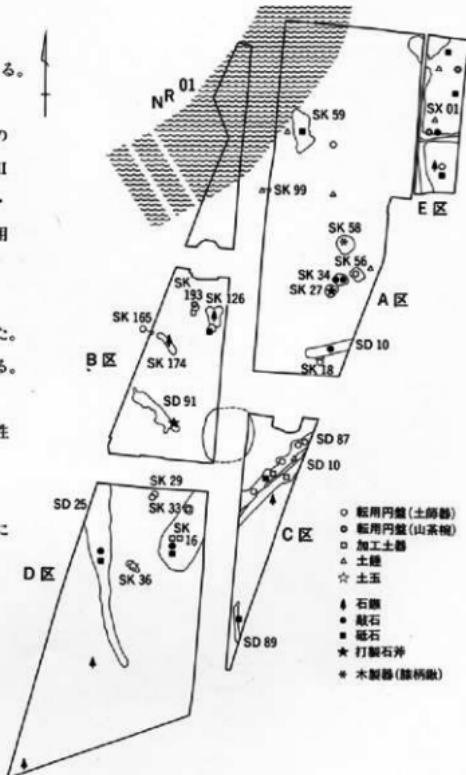


図52 石製品・土製品・木製品分布図

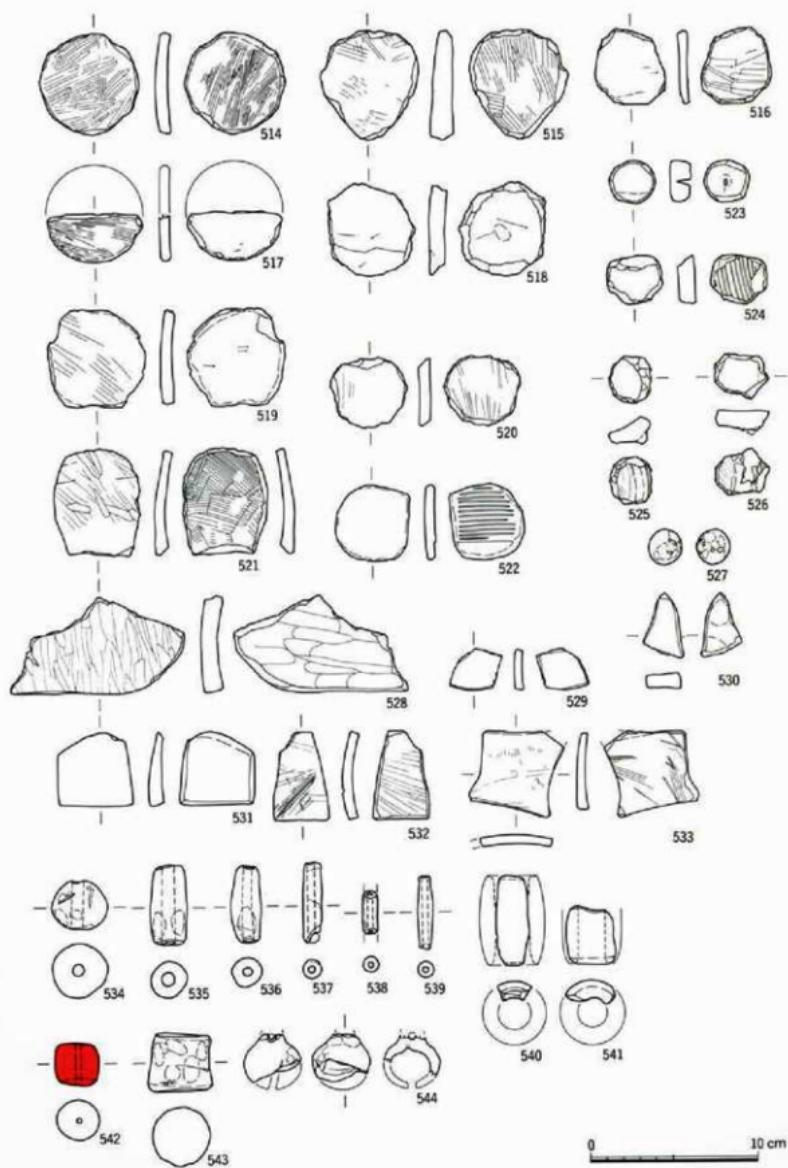


図53 土製品実測図 <1 : 3>

木製品(1・2)(図54)

穿孔のある木製品(1)

93C区のSD10より出土している。現長は12.2cmを測る。両端は欠損しているが、その一端に1孔が穿たれている。

膝柄鍬(2)

ほぼ全形を知りえる。全長48.6cm、幅9.0cmを測る。基部には取り付けようの刻みが彫り込まれている。SK59の最底部から出土した。最底部からは他の遺物は出土しておらず、膝柄鍬が発掘の初期行為の中でなされたことを物語っている。出土木器そのものは東海地方にみられる一般的な形態を示している。北道手遺跡唯一の農耕具である。

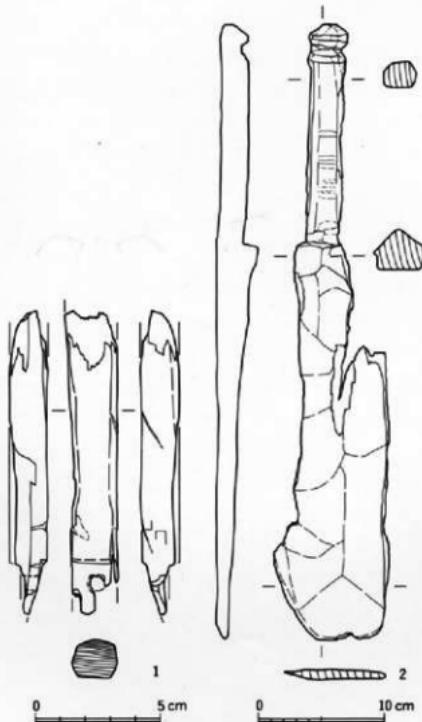


図54 木製品実測図 <1=1:2、2=1:4>

## 第4章 科学分析

### 第1節 北道手遺跡の地形・地質

北道手遺跡は濃尾平野北西部、一宮市大字光明寺字北道手に位置する。調査地の北側およそ1.0kmには木曾川が西流する。北道手地区の東には犬山付近から南西方向に向かって半径およそ12kmで広がる犬山扇状地がある。標高およそ10m等高線にこの扇状地の扇端部は設定できる。そこから標高およそ2.5mまでが、上流側の扇状地帯に対して河川地形がみられることから自然堤防帯という。調査地である北道手地区は扇状地帯と自然堤防帯の境界部付近にあたる(図55)。

疊などの粒径の大きいものを扇状地帯で堆積させてきた河川は、本地域付近で地形勾配が急に緩やかになるため、疊よりもさらに細かい砂などを堆積させるようになる。そのため、ときに砂が小高い丘状に堆積し、いわゆる自然堤防を形成しているところがみられる。例えば、調査地東方の一宮市光明寺地区には、東西およそ1.0km、南北およそ0.5kmの東西に長い自然堤防が認められる。また、調査地の南側およそ0.4kmの一宮市田所地区にも、集落を囲んで東西・南北およそ0.3kmの自然堤防が存在している。北道手遺跡はこれらの自然堤防がつくる微高地と微高地とに挟まれた低地にあたり、調査当時は水田が広がっていた。

江戸時代に藤藩がおこなった築堤により木曾川の流路が固定されるまでは、本地域周辺には河川が北西-南東方向に幾本も流下していたことが文献資料からわかっている。これら河川の運搬・堆積作用は、当地域に砂を主体とした碎屑物を厚く堆積させた。調査地も河川營力が大きいところに位置するため砂質堆積物が厚く埋積している。また、調査区が比較的新しい河川により削制を受けている場所(93A b区)もみられた。遺跡の堆積層序は、下位よりシルトや粘土などを含まない非常に淘汰のよい白色細粒砂からなる。本層はときに細疊を含んでくる。その上位には明瞭な境界面をもたずに漸移する砂質シルトが堆積する。堆積構造は見られない。この砂質シルト層の上部は基本的に構成堆積物は同じであるものの、腐植質を多く含み黒色を呈する部分で更に2層に分けられる。上部と下部の境界面は漸移的に変化し、明瞭な境界面をもたない。主に遺跡から出土する土器および遺構は、本層の上部である黒色を呈する腐植質な砂質シルト層から検出され、本層が当時の生活面であったと考えられる。

北道手地区は、木曾川本流にも近く地下水位が高いことが予想される。そのため砂層自体は過去においても過飽和状態にあったと期待される。第4章、第2節で後述するように、過去の地震により形成された地震痕が数多く確認される。

北道手遺跡A区およびB区を北東から南西方向に削剥する河川流路跡で、砂層の液状化およびそれに伴う流動化跡が確認された。A区の西半分には古墳時代の遺物包含層である黒色腐植質砂質シルト層を切る河川堆積物がみられる。この堆積物中に砂層の液状化跡がみられ、極細粒砂とシルトからなる平行葉理が乱されたコンボルート葉理(convolute lamination)と、遺物包含層である黒色の中粒砂

質膜食質土が砂層中に取り込まれた粘土の集合片 (mud clast aggregates) が確認された。コンポルート葉理は、黒色の中粒砂質腐植質土の境界面に沿って東西の幅約3~4m、南北約15mにわたって発達するが、境界面から離れる（西側へ向かう）と変形構造はみられない。粘土の集合片は、砂層内部の堆積構造とはほとんど無関係に不規則な形で含まれる。集合片は平均数cm程度の角礫状を呈し、淘汰は悪く配列に規則性は認められない。B区では、遺物包含層である黒色の中粒砂質腐植質土を切る砂脈が多數確認された。これは地震により間隙水圧の高くなった砂が、構造的に弱い部分をめがけて貫入したものである。また、S D79では構造を埋積する層厚およそ25cmのシルト中にコンポルート葉理がみられた。このコンポルート葉理や泥質堆積物の集合片という現象は、ともに地震などの繰り返し応力を受けた堆積物が粒子間応力（有効応力）を失って、浮遊・流動状態になり形成されるものである。北道手遺跡でみられるコンポルート葉理の特徴には次のようなものがある。

1. 砂層全体または単層上部に発達する。
2. 褶曲はなめらかで小断層はみられないことが多い。
3. 褶曲は砂層の下部より上部で著しい。
4. 平行葉理や斜交葉理の変形でその存在がわかる。

北道手遺跡では砂層の変形構造が顕著である。これは、北道手遺跡が木曾川に近く地下水位も高いと予想され、砂層内部は少なからず飽和状態にあったと考えられるからである。飽和した砂の液状化現象が地震などにより普遍的に生じることが知られており、本地域の現象も地震により生じたことは確実である。



図55 北道手遺跡の位置と周辺の地形  
(国土地理院発行 1/25,000 土地条件図を使用)  
黒いトーン部分が自然堤防（洪高地）、白抜き部分は後背湿地にあたる。

## 第2節 北道手遺跡の地震の痕跡

**地震の痕跡** 沖積平野である濃尾平野は厚く堆積した未固結の礫・砂・シルトなどの堆積物から構成されており、軟弱地盤ゆえの災害を被りやすい。地震による液状化をはじめとした災害もその代表的な例といえよう。近年、遺跡における地震の痕跡の発見は、歴史時代における単なる災害の研究に留まらず、防災的な意味あからも注目されている。

ここでは、北道手道路で確認された地震痕の記載を行い、その意義について検討する。

### 地震痕の (1) 93A区

**記載** 93A区においては、次の2つの形態の地震痕が確認された。

#### 異常堆積 1. 河川堆積物に認められる異常堆積構造〈図58A〉

**構造** 93A区内で検出された河川 (N R01) を埋積する堆積物は、当時の岸に相当する部分で、細粒砂及びシルトの互層で構成される (第1節参照)。この互層のラミナは、一部で液状化した砂に引き裂かれており、また不自然な歪みも観察される。また、岸に接する部分では、地震痕の1つの形態である砂脈に引き裂かれた黒色シルト塊の取り込みが認められることから、地震の影響を受けているものと考えられる。

#### 砂脈 2. 砂脈〈B〉

93A区南端では、黒色シルト層を垂直方向に20cm以上引き裂き、上昇する幅1cm、延長1m、70~80°W方向にのび、「杉」型の雁行配列をする砂脈が3本観察された。砂脈の給源となった砂層は黒色シルト層直下の灰白色粗粒砂層である。



図56 旧河川堆積物にみられる異常堆積構造



図57 砂脈の産状

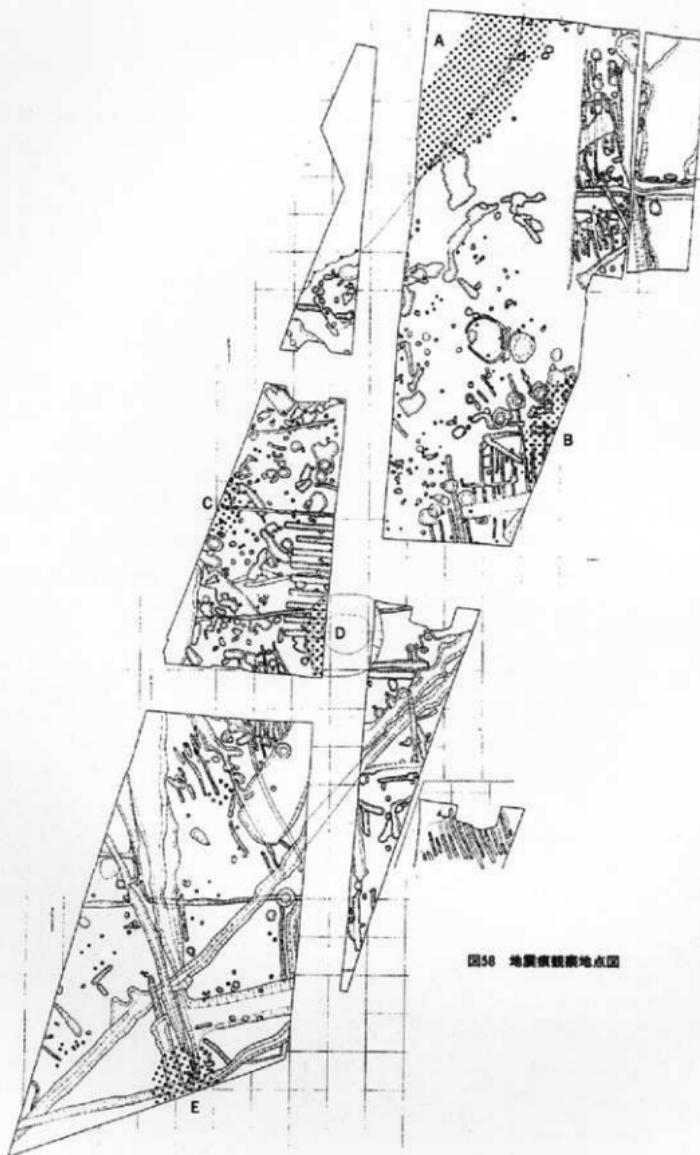


图58 地质剖面图

## (2) 93B区

93B区においては、断層と地層の液状化(流動化)の痕跡が認められた。

### 断層

#### 1. 断層(図58C)

断層は、図58のC地点で観察された(図59・60)。この断層は、古墳時代初頭の遺物を含する黒色砂質シルト層を見かけ上、西側に30cm程度沈降させる正断層の形態を示している。走向はN10°W、傾斜は上端部で80°、下方部で45°Wを示している。

断層運動により沈降した西側の黒色砂質シルト層の上位には、断層に対して東側の黒色砂質シルト層上位には認められない灰白色粗粒砂層が、断層の落差により生じた窪みを埋積するように20cm程度堆積している。この砂層は断層が生じた直後の出水により、窪みを埋め立てるよう速やかに堆積したものと考えられる。この上位には、中世の遺物を含む灰色砂質シルト層が断層面を挟んだ両側に連続して堆積しているが、これは、窪みが中世の頃までには完全に埋積されたことを示している。また、この灰色砂質シルト層は断層の変位を全く受けていないことから、断層そのものの活動は、黒色砂質シルト層を変位させた1回だけであると考えられる。

### 砂脈

さらに、断層面に沿って発達する砂脈も観察された。この砂脈は幅3mm程度の灰白色粗粒砂により構成されている。この砂脈の上端部は、中世の灰色砂質シルト層を引き裂いていることから、断層の活動とは時期を異にするものであろうと考えられる。また、砂脈は途中で、見かけ上断層を挟んだ東西両方向へ、水平方向に2本ずつ枝分かれしている部分も認められた。図61は、この分岐した砂脈部分の拡大模式図であるが、枝分かれした砂脈は、断層の両側で食い違いが認められる。図61のb-b'で示した下方の砂脈は、断層を境に西側が2.4cm上昇、また、a-a'で示した上方の砂脈は西側が7mm程度上昇している。この変異量の差は、以下のような砂脈と断層の動きを想定させるものである。

まず、すでに形成されていた断層面が、物理的な弱線となっており、大規模な地震によって液状化した砂の通路に利用されたことが考えられよう。液状化した砂が上位の地層を引き裂いて上昇する際には、物理的な弱線に集中することは、寒川(1992など)や服部(1994など)の遺跡における地震痕の研究成果からも明らかである。

また、a-a'、b-b'それぞれの砂脈の断層を挟んだ両側の変位は、断層そのものの活動を示すものではないと考えられよう。それは、砂脈が上位の中世の灰色砂質シルト層を引き裂いているにもかかわらず、断層による変位を受けていないことからも証明できる。

ではなぜ砂脈に変位が生じたのであろうか。これは弱線である断層面に沿って噴き出した砂が潤滑剤の役割を果たし、断層面を掘り動かしたためと考えられよう。a-a'、b-b'の上下の砂脈で変位量に差があることは、ごく短い流れの間に発生した砂脈の形成時期に差があったためであることが原因であろう。すなわち下方の水平砂脈は地震発生初期、上方の砂脈は地震終末期という砂脈形成の時間差を表すものと考えられる。上位の灰色砂質シルト層に見かけ上の変位が全く見られないことは、砂脈を発生させた地震が灰色砂質シルト層の未固結時に発生したためにわずかな断層の変位を吸収したためと考えられる。



図59 93B区 断層の産状

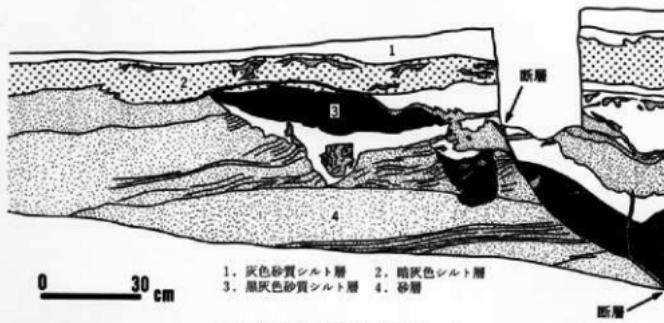


図60 北道手造跡93B区 断層スケッチ

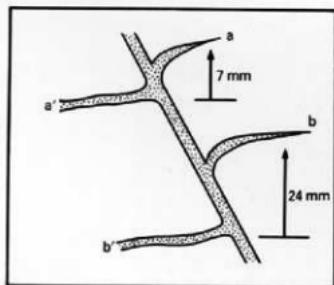


図61 断層運動と砂層の変位

## 2. 地層の液状化（流動化）〈図58D〉

**液動化** 地層の液状化は、噴砂（砂脈）などの現象として北道手遺跡でも一般的に認められる地震痕の形態であるが、SK79においては噴砂を作わない、地層中のラミナが流動化した痕跡として観察された（図62）。この流動化層は、土坑埋土である斑状のシルト塊を多量に含む層の下位に位置する灰色～暗灰色シルト互層中に発達する。このような流動化は、地層が未固結な状態で地震による振動を受けたことを示していると考えられる。



図62 中世土坑中の地層の液動化

## （3） 93D区 〈図58E〉

**小断層** 93D区では調査区南端の壁面において小断層が確認された。この壁面は、図63に示すように下位から灰白色粗粒砂層、暗灰色シルト層の順に堆積し、この暗灰色シルト層を弥生時代末～古墳時代初頭の遺構（SD14）が掘り込んでいる。その上位には埋積された遺構上面を覆うように灰色砂質シルト層が堆積している。

小断層は、図64に示すように灰白色粗粒砂層、暗灰色シルト層およびSD14の埋土の一部を見かけ上3cm位変位させている正断層である。走向はN10°Wを示し、93B区で見られた断層とほぼ同じ方向を示し、傾斜は88°Wを示す。



図63 93D区断層の產状

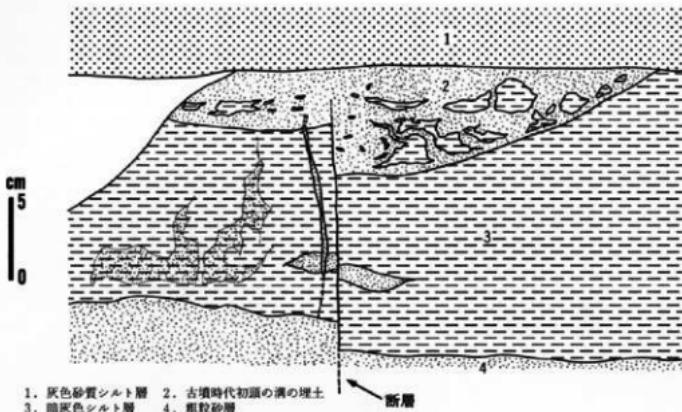


図64 北道手遺跡93D区南壁断層スケッチ

S D14の埋土は、中～粗粒砂を基質とし、これに最大3～5cmのシルト塊を混じえる。溝内の堆積物の特徴として断層により落ち込んだ側のシルト塊がより大きいこと、またシルトの一部で断層活動により引き伸ばされた構造が認められる。このような堆積物の変形は、S D14の埋土が未固結な状態の時のものと考えられる。

この断面では同時に、基盤の粗粒砂層から上昇する3～4mm程度の砂脈も認められ、S D14の埋土に噴き上げている。

なお、S D14を覆い堆積している灰色砂質シルト層は、断層による変位や噴砂の影響を受けていない。

#### (4) 地震痕に関するまとめ

北道手遺跡で確認された地震痕から考えられる地震の発生時期を推定してみよう。

93A区の河川堆積物中の地震痕は、河川堆積物そのものの年代が不明なため地震発生年代は確定できない。砂脈については、地表付近まで噴き出しが確認できること、砂脈の雁行配列が付近を通る濃尾地震の際に形成された根尾谷断層の延長「岐阜—一宮線」の横ずれ運動に整合的であることなどから、1891年発生の濃尾地震による地震痕と考えられる。

93B区の断層については、古墳時代前期以後、中世以前という年代幅が考えられるが、断層によって形成された崖みは、速やかに埋積されたであろうと考えられるので古墳時代前期に近い時代が考えられる。なお、砂脈および流動化層については、中世の地震によるものと推定される。

93D区の断層は、古墳時代前期の溝が埋積された直後、埋土が未固結状態のものであり、時期的には93B区の断層とほぼ同じ時期であろうと考えられる。

なお、ここで断層として表現した地震痕は、地震断層（活断層）本体ではなく、おそらく液状化による砂の噴き出しで、下位の地層の体積が減少したために生じた陥没性の断層（断裂）と考えられる。

## 第3節 岩倉城・北道手遺跡出土土器胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

愛知県西部濃尾平野における古墳時代前期のS字口縁を持つ土器(以下S字口縁とする)は同時期の他の土器や時代の異なる弥生土器や中世の土師器などとは明らかに異質な胎土を持つことが、当社による分析で明らかにされている。S字口縁の胎土は角閃石とザクロ石を主体とする組成を示し、「受口」や「く字」と呼ばれる口縁の土器胎土は、尾張地域在地を示す両輝石型の組成を示す。このように同時期の土器の胎土との組成の違いは明瞭であり、中間的な組成も認められない。また、S字口縁の中には両輝石型の胎土のものが少數含まれる場合があるが、「受口」や「く字」の中には角閃石やザクロ石の多い胎土はない。さらに、角閃石とザクロ石を主体とする胎土は、尾張地域の弥生土器や中世土師器にもほとんど認められない。

この胎土の状況から、濃尾平野におけるS字口縁の製作と流通には、特別な事情が背景にあることは間違いない。本分析では、S字口縁の出土例が多い濃尾平野北部に位置する北道手遺跡とそこから地理的には若干離れた濃尾平野北東部に位置する岩倉城遺跡から出土したS字口縁を試料として、これまでの胎土の傾向を確認し、さらにS字口縁の胎土の細分を試みる。これによって、S字口縁をめぐる状況を詳細に捉え、濃尾平野内での地域的な差異の有無を確かめる。さらに、角閃石とザクロ石という鉱物組み合わせから考えられる地質学的背景について、既存の文献資料から検討し、考察する。

### 1. 試料

試料は、愛知県岩倉市にある岩倉城遺跡より出土したS字カメ15点(試料番号1~15)と一宮市北道手遺跡より出土したS字カメ20点(試料番号16~35)と丹彩土器15点(試料番号36~50)である。各試料には、出土位置などを記した注記と時期などの備考がある。これらは、重鉱物組成を示した図1に併記する。

### 2. 分析方法

これまで、愛知県の胎土分析では、一貫して胎土中の砂分の重鉱物組成を胎土の特徴としてきた。本分析でも、この方法に従う。処理方法は以下の通りである。

土器片約10~15 gを鉄乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、簡別し、得られた1/4mm~1/8mmの粒子をテトラブロモエタン(比重約2.96)により重液分離、重鉱物および軽鉱物を

偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉱物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。鉱物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数%を算出し、グラフに示す。

### 3. 分析結果

#### (1) 胎土の分類

50点の試料のうち、同定粒数100個未満のものは14点あった。(表1、図1)。これらのうち試料番号23、26、32、36、37、38、41の7点は、同定粒数100個以上を得られた他の試料の分量に比べて特に少ないと見えないため、重鉱物の含量が少ないと胎土の特徴になるかも知れない。他の7点は、試料の分量が少ないと考えられる。同定粒数100個以上を得られた試料では、角閃石が多く、少量のザクロ石を伴うものが多いが、中には斜方輝石と単斜輝石を主体とする組成のものも認められる(表1、図1)。

冒頭で述べたように尾張地域のS字口縁の胎土については、これまでの分析により1) 角閃石が多く少量のザクロ石を伴う、2) ザクロ石が多く少量の角閃石を伴う、3) 両者の中间組成の3種類といわゆる両輝石型から構成されるとしてよい。ここでは、この分類に基づき、さらに両輝石型については、今回報告(別報告)する一色青海遺跡の当社胎土分析報告書に示された、分類に基づき記載する。

##### a) I型

角閃石が非常に多く、少量のザクロ石を伴う組成。試料によっては、微量～少量の黒雲母、ジルコン、緑レン石などを伴う。

##### b) III型

ザクロ石が多く、少量の角閃石を伴う組成。試料によっては、微量～少量の黒雲母、ジルコン、ザクロ石、電気石などを伴う。I型とIII型の中間組成をII型とするが、本分析では認められない。

##### c) IV型

角閃石と黒雲母およびザクロ石の3鉱物を主体とする組成。角閃石とザクロ石の関係はII型に準ずるが、黒雲母の量比の多いことでIV型とした。

##### d) V型

角閃石が非常に多く、少量のジルコンと緑レン石を伴う。角閃石の多いことはI型に似るが、ザクロ石をほとんど含まないことでV型とした。

##### e) A型

いわゆる両輝石型の中でも出現数のもっとも多い組成。斜方輝石が主体を占める組成であるが、他の種類に比べて単斜輝石の量比が多い。

##### f) C型

斜方輝石が主体を占め、単斜輝石は微量、角閃石を伴い、少量または微量のジルコンを

試料番号	カ ン ラン 石	斜 方 輝 石	單 斜 輝 石	角 閃 石	酸化角閃石	黒 雲 母	紅 柱 石	ジ ル コ ン	ザ ク ロ 石	緑 レ ン 石	電 気 石	不 透 明 鉱 物	そ の 他	同定鉱物粒数
1	0	0	0	173	1	10	0	0	10	2	1	1	52	250
2	0	2	0	161	1	8	0	1	34	1	4	4	34	250
3	0	8	6	5	1	4	0	4	2	2	0	2	78	112
4	0	8	0	7	1	0	0	4	2	9	0	56	163	250
5	0	1	1	9	0	0	0	0	5	0	1	1	3	21
6	0	11	2	200	0	2	0	1	14	1	1	1	17	250
7	0	5	0	196	0	5	0	1	4	1	0	3	35	250
8	0	1	0	1	0	0	0	0	47	0	2	0	7	58
9	0	112	36	9	0	6	0	2	0	0	0	1	84	250
10	0	151	31	4	0	0	0	0	0	0	0	4	60	250
11	0	5	0	176	0	1	0	0	30	0	3	14	21	250
12	0	2	2	177	5	1	0	0	13	0	0	5	45	250
13	0	11	1	0	1	39	0	0	2	0	0	0	43	97
14	0	1	0	8	0	0	0	3	49	0	18	15	10	104
15	0	55	16	36	0	2	0	3	1	3	0	61	73	250
16	0	3	0	146	4	36	0	0	12	1	1	2	45	250
17	0	5	0	155	1	33	0	1	5	1	0	4	45	250
18	0	0	0	38	4	32	0	0	145	2	4	1	24	250
19	0	7	2	37	97	13	0	0	14	6	4	0	70	250
20	0	3	1	15	1	31	1	0	20	7	1	9	38	127
21	0	7	1	179	1	16	0	0	2	2	1	0	41	250
22	0	3	2	199	1	8	0	0	9	1	3	4	20	250
23	0	1	0	6	1	41	2	0	3	1	0	2	16	73
24	0	13	2	115	5	16	0	0	16	0	4	3	34	208
25	0	4	0	165	13	22	0	0	9	0	3	0	34	250
26	0	4	1	10	0	9	0	1	2	0	0	5	13	45
27	1	16	1	172	1	4	0	2	16	1	4	11	21	250
28	0	2	0	151	7	9	0	0	36	1	2	2	40	250
29	0	1	0	1	1	7	0	0	5	0	0	2	11	28
30	0	10	1	144	2	12	1	1	34	2	3	7	33	250
31	0	15	2	83	0	7	0	2	7	0	0	2	9	127
32	0	1	0	7	0	0	0	0	3	0	0	1	3	15
33	0	9	1	186	1	0	0	0	19	2	2	7	20	250
34	0	3	1	153	0	5	0	1	43	2	11	5	26	250
35	0	4	0	119	1	0	0	9	2	18	0	14	69	236
36	0	8	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	19	31
37	0	9	1	6	1	0	0	1	0	0	0	4	2	24
38	0	29	1	14	0	0	0	0	0	2	1	8	4	59
39	0	99	10	11	8	1	0	0	0	2	0	3	32	166
40	0	7	0	1	0	0	0	0	0	0	0	20	205	233
41	0	6	0	2	0	0	0	0	0	0	1	3	10	22
42	0	115	21	16	2	1	0	1	2	0	0	38	36	232
43	0	134	21	4	2	2	0	3	0	0	3	31	35	235
44	0	93	2	32	3	0	0	2	0	1	0	15	34	182
45	0	25	0	6	7	0	0	6	2	0	0	18	186	250
46	0	18	0	0	0	0	0	3	0	1	0	26	130	178
47	0	23	1	11	0	0	0	3	1	1	0	36	174	250
48	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4
49	0	30	3	2	3	0	0	0	0	0	1	6	18	63
50	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	6	11

第4表 土壤試料分析結果

含む組成である。

g) F型

上記の一色青海遺跡では認められなかった両輝石型の組成なのでF型とした。「その他」が非常に多く、同定される主な鉱物は、両輝石と角閃石、ジルコン、緑レン石、不透明鉱物などである。

h) G型

これも上記の一色青海遺跡では認められなかった両輝石型の組成なのでG型とした。「その他」が非常に多く、斜方輝石と不透明鉱物が少量含まれる。

(2) 遺跡および種類別の胎土の状況(図64)

a) 岩倉城遺跡(S字カメのみ)

同定粒数100個以上の12点の試料のうち、I型の胎土が最も多く、試料番号1、2、6、7、11、12の6点を占める。他は、A型3点(試料番号9、10、15)、F型2点(試料番号3、4)、III型1点(試料番号14)である。同定粒数100個未満の試料では、試料番号8は明らかにIII型の組成を示す。試料番号5はI型またはIII型の可能性があり、試料番号13は両輝石型であると考えられるが、細分はできない。

b) 北道手遺跡

1) S字カメ

同定粒数100個以上の16点の試料のうち、I型の胎土が圧倒的に多く13点を占める。I型に分類されない3点は、試料番号18はIII型、試料番号20はIV型、試料番号35はV型にそれぞれ分類される。同定粒数100個未満の4点の試料の中は、いずれもI型またはIII型に分類されると考えられる。

b) 丹彩土器

同定粒数100個以上の8点の試料は、全て両輝石型である。そのうち試料番号44~47の4点はC型に分類され、試料番号39、42、43の3点はA型に分類される。また、試料番号40は、G型である。同定粒数100個未満の試料も全て両輝石型に分類される可能性があるが、細分はできない。

## 4. 考察

(1) S字口縁の胎土について

これまでに分析された尾張地域の古墳時代前期の土師器は、今回の調査も含めると13遺跡約290点に及ぶ。ここでは、これらの成果から認められるS字口縁の胎土の傾向について述べてみたい。本分析結果において、岩倉城遺跡と北道手遺跡のS字口縁の胎土の状況には差異が認められる。すなわち、どちらの遺跡ともI型が多いことは共通するが、岩倉城遺跡では少數の両輝石型が混在するのに対し、北道手遺跡のS字口縁では両輝石型は存在せず、しかもI型の占める割合が非常に高い。このような状況は、これまでの分析でも認

められる。岩倉城遺跡の状況に類似するのは、廻間、松ノ木、土田、朝日、町田の各遺跡であり、北道手遺跡の状況に近いのは、下渡、山中、南木戸、元屋敷の各遺跡である。前者の遺跡の分布域は濃尾平野中部および東部であり、後者は濃尾平野北西部である。ただし、岩倉城遺跡と元屋敷遺跡は濃尾平野中部と北西部の中間的な位置にある。この遺跡の分布と胎土との状況から、S字口縁の胎土の主流ともいえるI型やII型の生産地に近いのは、濃尾平野北西部であり、生産地からより遠い濃尾平野中部や東部では、地元で作られる両輝石型のS字口縁が混在していたことが推定される。岩倉城遺跡や元屋敷遺跡の辺りは、その中間的な地域であったといえないだろうか。この傾向は、さらに多くの分析例を増やすことで、より確かなものとなるかあるいは異なる傾向となるかもしれない。問題は、I型やII型の生産地である。

I型およびII型の特徴は、多量の角閃石とザクロ石の組み合わせにある。仮にこの組み合わせの中にジルコンが入っていれば、それは西三河型の組成になり、生産地も西三河地域ということになる。しかし、ほとんどジルコンが含まれることはないから、西三河地域という可能性はない。この点において、西三河地域から多くの搬入があった可能性の高い尾張地域の弥生土器とは状況が異なっている。さて、濃尾平野をとりまく地質を概観すると、重鉱物の供給源となる火成岩および変成岩の分布はかなり広い。そのなかで、角閃石とザクロ石の給源になりそうな地質は、濃飛流紋岩（濃飛流紋岩団体研究グループ、1973；1976；1979；1982；小井土、1974）、奥美濃酸性岩類（柳瀬、1982）、貝月山カコウ岩（鈴木、1975）、三重県北部の鈴鹿カコウ岩や青山高原の領家変成岩類およびそれに接する領家カコウ岩類（以上端山ほか、1982）が上げられる。これらの地質のうち、濃飛流紋岩、奥美濃酸性岩類、貝月山カコウ岩は、いずれも黒雲母が優先する岩質であり、角閃石は少量または微量しか含まれない。また、ザクロ石の記載はない。鈴鹿カコウ岩および領家カコウ岩は、黒雲母と角閃石が多く含まれるが、ジルコンも比較的多く含まれる。したがって、これらの地質は、I型やII型の給源になる可能性は低い。残る青山高原の領家変成岩類では、泥岩相の変成岩にはザクロ石の記載があり、また、石灰質砂岩相の変成岩には角閃石が多く含まれるという記載がある。以上の資料から考えれば、I型やII型の給源は、三重県北部地域である可能性がある。今後、これを検証するための資料（自然堆積物の重鉱物組成や三重県北部地域のS字口縁の胎土重鉱物組成など）が是非必要であると考える。また、S字口縁を持つ土器の分布などを検討し、その地域的傾向を理解しておくことも重要である。ところで、当社の分析例では、三重県松阪市出土のS字口縁は本分析のV型の組成を示すものが多い。したがって、三重県内でもS字口縁の胎土には地域的な差があることが推定される。

## (2) 丹彩土器の胎土について

丹彩土器の胎土から考えられることは、1) 同時期に使われていたS字口縁とは全く別の生産・流通事情にある、2) 生産地は尾張地域内である、3) 複数種の胎土の存在から、尾張地域内でも複数の生産地あるいは生産者がいた、の3点である。本分析で認められた

複数種の胎土のうち、弥生土器の例でみればA型は朝日遺跡周辺の濃尾平野中部に多く認められ、C型は勝川遺跡や月輪手遺跡周辺の濃尾平野東部地域に多く認められる胎土である。現段階では、A型は濃尾平野中部域、C型は濃尾平野東部域を生産地とすると判断するまでには至っていないが、丹彩土器の生産・流通にも一樣でない事情があるようと思える。

#### 文献

- 端山好和・山田哲雄・伊藤誠・吉掛俊夫・政岡邦夫・宮川邦彦・望月康年・仲井豊・田崎庄良昭・吉田勝・河原林育朗・津村善博(1982)近畿地方東部の領家帯の地質—特に花崗岩の岩体区分と相互関係。地質学雑誌, 88, p.451-466.
- 小井土由光(1974)岐阜県下呂町東部地域の濃飛流紋岩とともに、赤石溶結凝灰岩層の細分について。地質学雑誌, 80, p.307-322.
- 濃飛流紋岩団体研究グループ(1973)濃飛岩体東縁部における流紋岩類の層序と形成史。地球科学, 27, p.161-179.
- 濃飛流紋岩団体研究グループ(1976)濃飛岩体西部の流紋岩類—特に陥没運動と火山活動のステージについて。地球科学, 30, p.193-205.
- 濃飛流紋岩団体研究グループ(1979)飛驒古川-御母衣湖地域の濃飛流紋岩-濃飛岩体北部地域における東西地質断面。地質学論集, 17, p.165-176.
- 濃飛流紋岩団体研究グループ(1982)濃飛岩体北部地域における玄武岩質安山岩類の活動。地質学雑誌, 88, p.231-248.
- 鈴木和博(1975)岐阜県春日村の接触変成帶に発達する特異な安代变成岩の脈について。地質学雑誌, 81, p.487-504.
- 柳瀬光史(1982)奥美濃酸性岩類-両白山地における白亜紀火成作用。地質学雑誌, 88, p.271-288.

## 第5章 考察

### 第1節 北道手遺跡の位置づけ

北道手遺跡の調査は、その遺跡の範囲と思われる西部地域の一部であるため、遺跡の中 心地と異なり様相を示していると思われる。しかし、集落内的一部構成していた以上この 遺跡の最盛期である古墳時代初頭の時代相あるいは地域相を反映していると考えられる。こ こでは、尾張北部に留まらず尾張南部はもちろん美濃地方特に西濃地方を視野に捉えて北 道手遺跡を考えてみたい。

北道手遺跡は木曾川中流域に位置し、同時期の遺跡として下渡遺跡（一宮市）、藤掛遺跡（笠松町）、伊八弾兵衛島遺跡（川島町）、江東遺跡（岐阜市）、八竈遺跡（各務原市）等が 知られている。これらの地域でかならずしも資料は充実してきている訳ではないが各遺跡 を包括する地域の土器様相から概観する。

各地の土器様相はかならずしも一様ではなく、器種構成上、同一地域は存在しない。単 純化すると、S字状口縁台付甕が多く採用されたのは尾張低地部や伊勢・大垣を中心とする 西濃地域であり、バレス形甕は尾張低地部に近接する地域を中心に比較的広範囲な地域 で受け入れられている。受口状口縁台付甕も尾張東部をも含み更に広い範囲で採用されて いる。有段高坏のうち、口縁内面に多状沈模を施したものは、尾張低地部や美濃地方でも

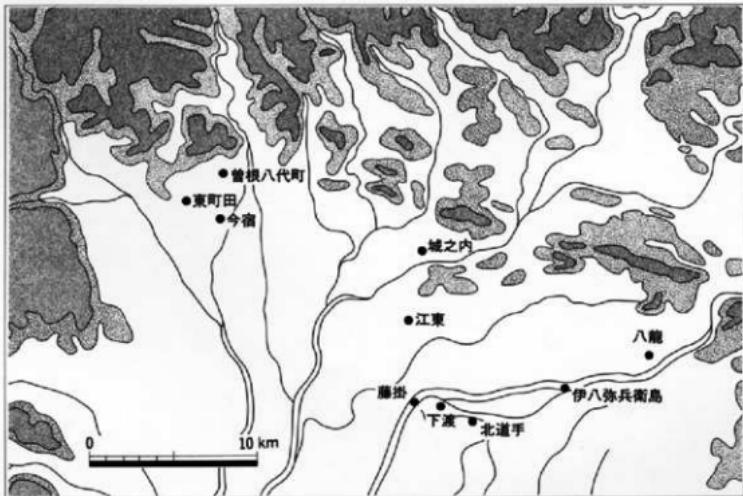


図66 古墳時代前期の遺跡分布 <1 : 300000>

西濃地域に分布し、更に近江の東部に濃密に分布する。今一つ考慮しなければならない遺物に北陸系土器の存在がある。つまり尾張北部から美濃西部からより北ないしは北西方向の地域との地域交流を示していることは、充分想定される。尾張北部に位置する北道手遺跡は尾張南部の土器様相とは異なりむしろより北部や西部地域に惹かれる土器様相であることが指摘できる。

ここでは、北道手遺跡をミクロ的に見ようする。その材料を土坑群の分布のあり方とそこからの出土遺物の関係に求めたい。これを土台にさらにマクロへと展開する。

#### 土坑群

北道手遺跡を特徴付けている遺構は土坑群の存在にある。あらためて追求する。検出した土坑群のなかからある程度土器を出土している土坑を対象に器種別に数量化した。先に触れたが土坑群はその規模によって大きく2つのグループに分けられる。土坑の長辺と短辺の関係から両辺とも2m未満に収まるAグループと長辺が2m以上のBグループに分けられる。これに深さ50cm以上の要素を加えると、Bグループの方が規模も大型でしかもより深いものが多い共通性を見出だせる。これを各調査区ごとにみるとA区ではSK14・19・22・27・34・55・56・58のBグループとSK15・16・17・18・24・25・26・30・33・52のAグループの両グループから構成されている。B区ではBグループよりむしろAグループが多い。つまり、小規模の土坑が主体となる。D区はBグループが5基、Aグループが4基となりA区と同様な構成を示すがA区の土坑群に比べて深さが1m前後しかなく、A区に比べて浅い土坑であることが解る。これらから、便宜的に調査区毎に土坑を比較してきたが、土坑は決して一様に分布するのではなく何らかの機能的かつ役割的に意図された配置がされているようである。今一つに土坑より炭化物の検出率がB区の土坑が最も高かった。特に、土坑ではないがSD87では1m四方に厚さ3cm程散き詰めたような状況で検出した。炭化物の混入は他の土坑でも観察できたが、いずれも少量に留まるのが多いようである。つまり、A区ではSK19を除き各土坑は廃棄用の役割を有していたのであろう。B区のSD87を中心とする土坑群は何らかの炭化物を生じるような行為そのものがそこで行われていた

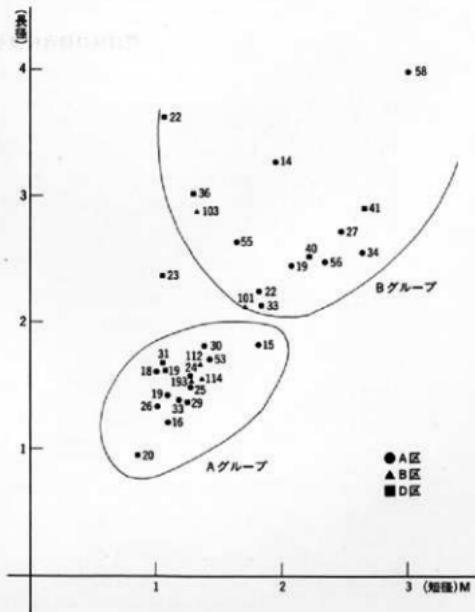
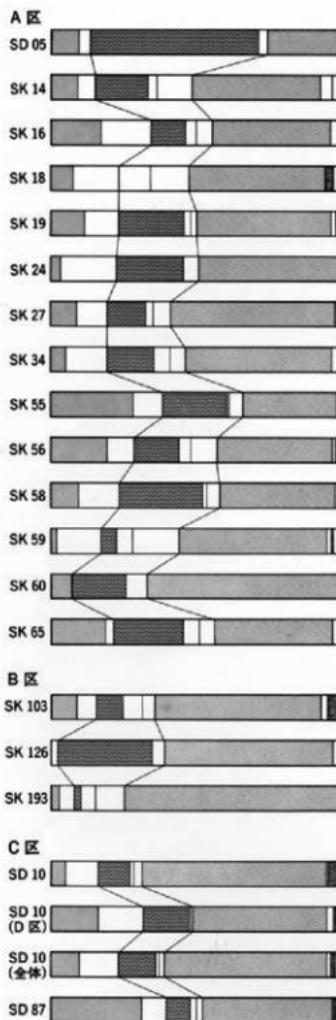
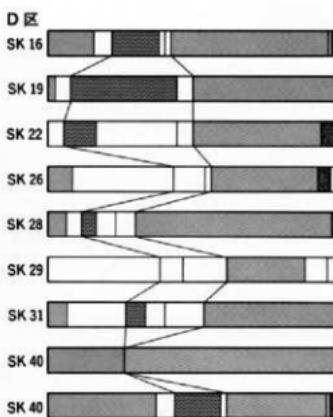


図67 土坑相関図



第5表 土坑土器カウントグラフ



第6表 遺物カウント土坑一覧

区	遺構	長cm	短cm	深cm
A	SK14	326	194	37
	SK15	181	180	57
	SK16	121	109	43
	SK17	142	109	47
	SK18	160	(100)	70
	SK19	244	207	68
	SK22	224	181	70
	SK24	157	127	44
	SK25	(149)	108	5
	SK26	133	101	8
	SK27	271	247	79
	SK30	180	138	14
	SK33	138	117	64
	SK34	253	263	88
	SK52	170	142	44
	SK55	263	(164)	76
	SK56	247	233	87
	SK58	398	333	87
	SK59	886	300	20
	SK60	(710)	(362)	(39)
	SK65	(686)	237	39
B	SK101	213	170	33
	SK103	288	132	23
	SK112	165	137	26
	SK126	425	330	20
	SK114	155	138	22
	SK193	155	128	50
D	SK16	(1715)	785	33
	SK19	162	107	50
	SK20	(96)	85	16
	SK22	(362)	125	43
	SK23	236	106	25
	SK26	0	120	42
	SK28	0	(143)	33
	SK29	138	122	48
	SK31	165	105	41
	SK33	212	184	41
	SK36	302	130	45
	SK40	252	221	59
	SK41	290	(265)	44

結果ではないだろうか。そして、B区の南に展開するD区では土坑自体の減少化と集中化する一方で他の調査区の土坑にはない完形品の土器を出土する特徴を具备している。完形品遺物の出土率の高さはこれらの土坑群の前方（南側）は同時期の遺構が分布せず、空白地区を確保していることと有機的関連があると思われる。

各土坑群の配置からB区の南部からD区の西南部にかけての空白域こそが、土坑を伴う一連の祭祀行為にとって重要な役割を果たしてたのであろう。

次に各土坑群から検出した土器類について検討を加える。土器カ

ウント作業は遺構内すべての土器を対象とし、残存率2分の1以上をカウントして明らかに同一個体と思われる個体は除外した。選別器種は壺形の場合、壺Aとその他に区分し、甕形の場合は甕A・甕B・甕C（く字甕・受口甕・S字甕）とした。高環・器台・鉢は括してカウントした。（第5表）

まず注目に値するのは高環の出土比率が極めて高いこと。第2点として、煮沸用としてS字甕の占める割合が高いことにある。第3点として、土坑によっては壺Aのバレス壺が他の壺形を凌駕する状況を示すことがある。

土坑をその規模（A：大形、B：中形）による分布のあり方から、各土坑群にはそこで行われた全体的な行為に対して特定的な役割を担っていたようである。本遺跡においてはB区及D区に展開する土坑Aグループは前者に炭化物を伴う例が多く、後者に多くの完形品を伴っていることから、全体的行為の中核ゾーン（遺構空白ゾーンをも含む）と捉えることができる。一方、土坑Bグループでは規模が大形であるにもかかわらず完形品の出土例は稀でむしろ細片化された土器で充満していることから、全体的行為に対しては従的な存在で中核ゾーンに対して外縁ゾーンを形成していたようである。中核ゾーンと外縁ゾーンにより構成されていた行為は水際で展開された祭祀にはかならない。N R01は古墳時代初頭段階では流れていなかったが、A区～B区で確認したN R01は中世期の氾濫の最大規模を示すものであって、本流とも言うべきN Rはより西方に流动していたと考えている。常に氾濫の危機にさらされている地域が本遺跡の調査区にあたるのである。

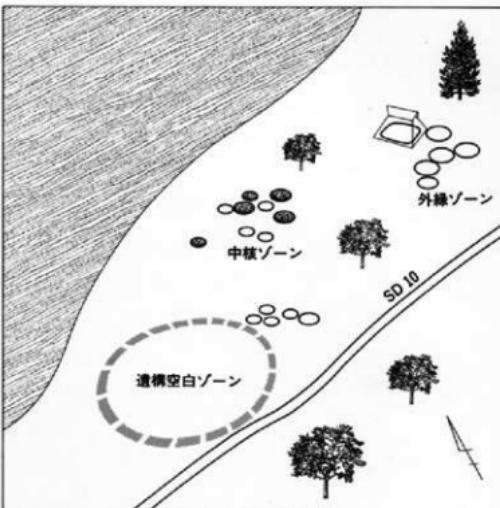


図68 北道手遺跡概本図

第7表 土坑出土器カウント一覧

調査区	遺構	壺			甕			高 坏	器 台	鉢	その他	総 計
		バレス	その他	S	字	く	字					
A	SD05	18 9.7%	7 3.8%	108 58.1%	0.0%	6 3.2%	46 24.7%	0.0%	1 0.5%	1 0.0%	1	186
	SK14	3 9.1%	2 6.1%	6 18.2%	1	4 3.0%	15 12.1%	1 45.5%	1 3.0%	1 0.0%	1 3.0%	33
	SK16	9 17.3%	9 17.3%	6 11.5%	2 3.8%	3 5.8%	21 40.4%	2 3.8%	2 0.0%	2 0.0%	52	
	SK18	3 7.9%	6 15.8%	4 0.0%	5 10.5%	5 13.2%	18 47.4%	1 0.0%	1 2.6%	1 2.6%	1 38	
	SK19	22 11.8%	22 11.8%	42 22.5%	4 2.1%	4 2.1%	87 46.5%	3 1.6%	3 1.6%	3 0.0%	3 187	
	SK24	2 3.5%	11 19.3%	13 22.8%	3 0.0%	3 5.3%	28 49.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	57
	SK27	21 9.1%	25 10.8%	30 12.9%	6 2.6%	14 6.0%	132 56.9%	1 0.4%	3 1.3%	1 0.0%	3 232	
	SK34	4 5.5%	10 13.7%	12 16.4%	4 5.5%	4 5.5%	37 50.7%	2 2.7%	2 0.0%	2 0.0%	2 73	
	SK55	36 28.6%	13 10.3%	28 22.2%	1 0.8%	6 4.8%	41 32.5%	1 0.0%	1 0.8%	1 0.0%	1 126	
	SK56	24 19.8%	11 9.1%	19 15.7%	5 4.1%	11 9.1%	48 39.7%	1 0.8%	2 1.7%	2 0.0%	2 121	
B	SK103	4 8.9%	3 6.7%	4 8.9%	3 6.7%	2 4.4%	26 57.8%	1 2.2%	2 4.4%	1 0.0%	2 45	
	SK126	1 0.0%	15 2.2%	2 32.6%	2 4.3%	2 0.0%	27 58.7%	1 2.2%	1 0.0%	1 0.0%	1 46	
	SK193	1 2.5%	2 5.0%	1 2.5%	2 5.0%	4 10.0%	30 75.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 40	
C	SD10	11 5.0%	25 11.3%	24 10.9%	3 1.4%	6 2.7%	142 64.3%	1 0.5%	4 1.8%	5 2.3%	5 221	
	SD10 (D)	28 16.2%	27 15.6%	27 15.6%	1 0.6%	1 0.6%	81 46.8%	4 2.3%	2 1.2%	2 1.2%	2 173	
	SD10 (計)	39 9.9%	52 13.2%	51 12.9%	4 1.0%	7 1.8%	223 56.6%	5 1.3%	6 1.5%	7 1.8%	7 394	
	SD87	342 31.1%	96 8.7%	89 8.1%	23 2.1%	24 2.2%	498 45.2%	5 0.5%	14 1.3%	10 0.9%	10 1101	
D	SK16	126 16.0%	48 6.1%	130 16.5%	15 1.9%	16 2.0%	432 55.0%	6 0.8%	4 0.5%	9 1.1%	9 786	
	SK19	1 2.6%	2 5.3%	14 36.8%	2 0.0%	2 5.3%	19 50.0%	1 0.0%	1 0.0%	0 0.0%	0 38	
	SK22	1 0.0%	2 5.6%	5 11.1%	1 27.8%	1 5.6%	8 44.4%	1 0.0%	1 5.6%	1 0.0%	1 18	
	SK26	4 8.7%	16 34.8%	5 0.0%	1 10.9%	1 2.2%	17 37.0%	2 0.0%	2 4.3%	1 2.2%	1 46	
	SK28	4 6.8%	3 5.1%	3 5.1%	4 6.8%	4 6.8%	40 67.8%	1 0.0%	1 1.7%	1 0.0%	1 59	
	SK29	10 0.0%	2 38.5%	4 0.0%	7 7.7%	7 15.4%	7 26.9%	2 7.7%	2 0.0%	1 3.8%	1 26	
	SK31	1 6.7%	3 20.0%	1 6.7%	1 6.7%	2 13.3%	7 46.7%	1 0.0%	1 0.0%	1 0.0%	1 15	
	SK40	4 26.7%	7 0.0%	17 0.0%	2 0.0%	2 0.0%	37 73.3%	1 0.0%	2 0.0%	1 0.0%	1 15	
	SK41	40 37.4%	7 6.5%	17 15.9%	2 1.9%	0 0.0%	37 34.6%	1 0.9%	2 1.9%	1 0.9%	1 107	

## (2) 着飾った土器

土器は本来その機能だけを究極的に追求すれば、どの世界でも同じ様な形になるであろう。何かを貯蔵しようとすれば、口があり胴部はいくらかの膨らみを持たせるであろう。何かを煮ようとすれば、口は大きく底に向かって細くするであろう。しかし、現実は土器を生み出した世界のそれぞれは決して同じではないのである。機能面での最大公約数ではまとめるとは可能でも形式なる最小公倍数で括ることは不可能なのである。なぜなら、土器は決してその機能だけが一人歩きするわけではない。それを生み出した社会を反映している。そこで生まれ、社会の規制を享受した人々が作るのである。社会の構成員である以上没個性的にはなりえない。製作された土器は個性的な属性を備えつつも社会規制・規範の産物と理解できる。

着飾った土器とは、土器の胴部あるいは口縁内外面に文様を施した土器をさす。ただし、日本史上最も華麗で派手やかな土器は掲文土器であろうが、しかし、ここでは弥生土器の系譜上にありながら、古墳時代になると汎日本的に無文化あるいは簡素化が進行するなかで局部的・限定的ではあるものも伊勢湾沿岸地域では文様を施す土器が古墳時代前期段階まで依存するのである。そして、それが伊勢湾沿岸地域の地方色に成りえているのである。ここで取り上げようとするのも、地方色を生み出しただけではなくすでに説かれていることではあるが、その出土分布が伊勢湾沿岸に留まらず比較的広範囲に及んでいることがある。伊勢湾沿岸の土器が他地域に影響を与えつつ拡散していく代表的遺物にS字彫口縁古付彫（以下S字彫とする）が存在する。S字彫の発生・変遷過程の論は他に譲るとして、S字彫なる煮沸土器のみが人とともに移動するのであろうか。S字彫の拡散は一定方向を取らず四方に及んでいる。西あるいは東へとしかも、その受容姿勢は各地域のその地域を持つ感電性により大きく異なっている。西方に比べて東方地域では感電性はより高く一部では、独自の変遷過程を示しているようである。ものが時空間的距離を隔てて共有する場合、単にものあるいは人と言った移動・交流では説明できないことがある。そしてこうした事象の起り得た時代背景が問題になるであろうし、ましてや弥生時代から古墳時代への画期に展開していることは、他の諸問題に大きな反響となろう。

着飾った土器として、S字彫の拡散範囲を基軸に同時期の高環形土器・器台形土器・鉢形土器・壺形土器を対象とする。ここでの定義は着飾る文様には、クシやヘラによる横線・刺突・強文・波状文・浮文があり、施文部位を口縁部・脚端部・胴部の上半部と言った限定された場所とする共通する要素を持った一群の土器とする。

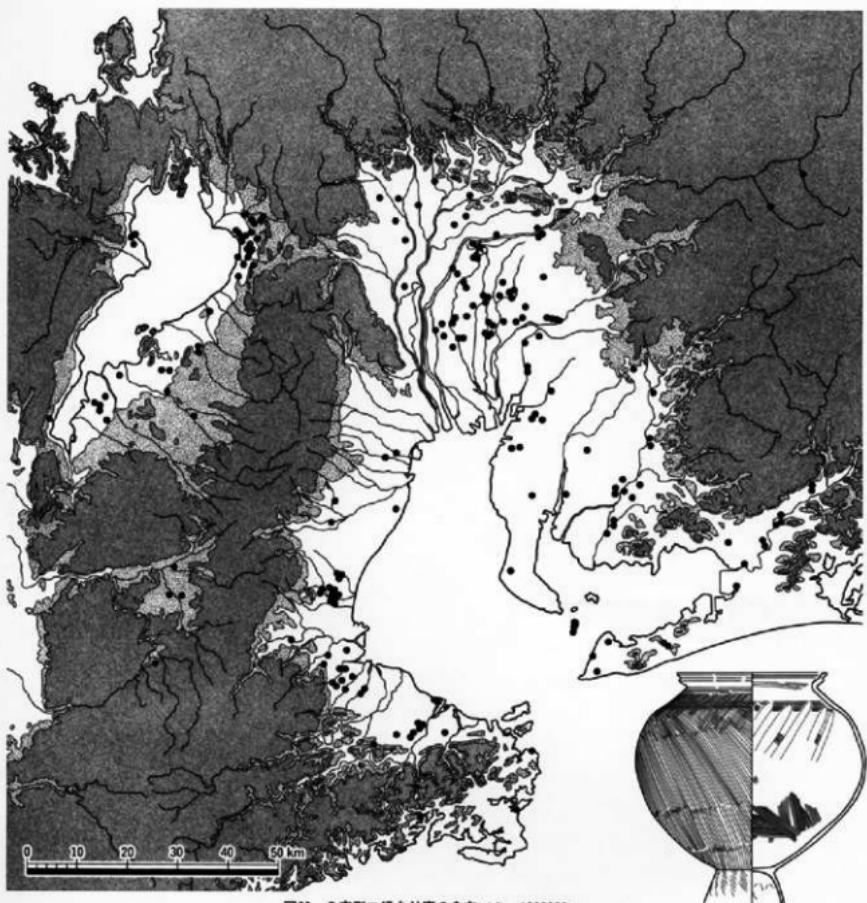


図65 S字形口縁台付瓈形土器の分布 (1 : 1000000)

S字形口縁台付瓈形土器（以下S字瓈）が東海系土器の代表的存在と認識されて久しい。しかし、その故地を伊勢湾沿岸域のどこに求めるのか。尾張北部から美濃西部に求めるのか。確たる定見は示されていない。胎土分析・重鉱物分析等の物理的手法から究明しようと試みも有効と考えられる。ここでは、着飾った土器を考察する上でS字瓈はキーに成りうると考え、S字瓈の持つ必要最低限度の情報である分布を第一に概観する。分布は大きく3つ存在する。尾張北部から美濃西部域・近江東部域・伊勢域となる。三河部は希薄で渥美や豊川流域はおそらく伊勢からの影響であろう。伊勢湾沿岸域と言いかながらも3つの中心域の存在を指摘できる。では、着飾った土器たちの分布と一体どんな関係になるのだろう。

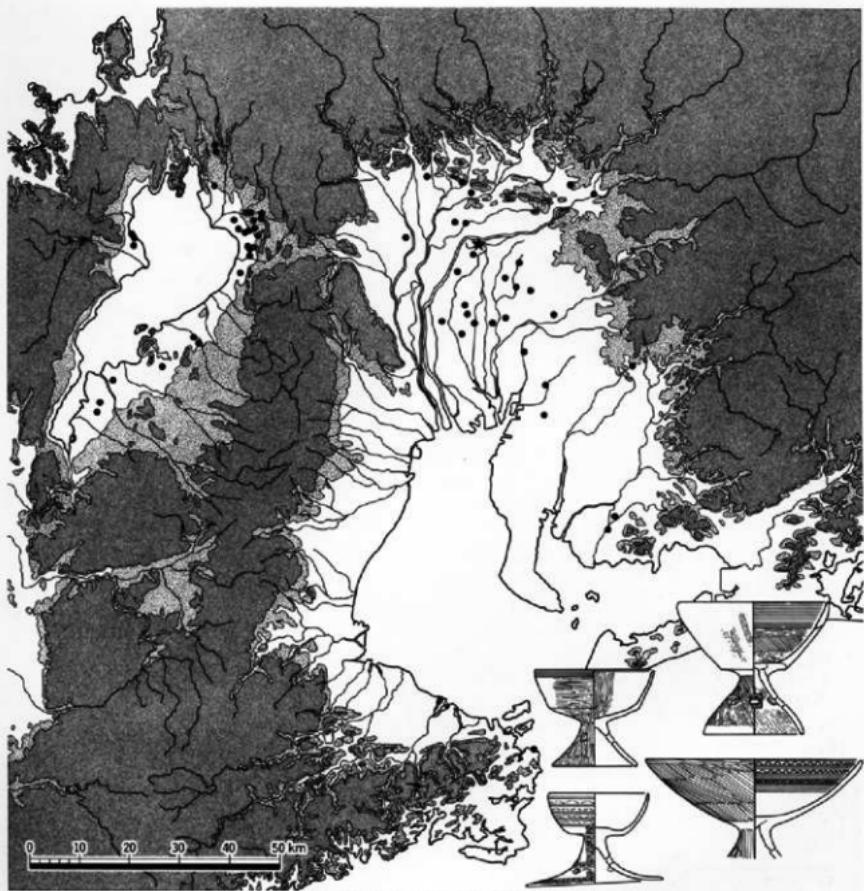


図70 高杯形土器の分布 (1 : 1000000)

当地域での高杯への装飾は杯部・脚部に多用された山中期を最後に急速に消失傾向にある。そして、無文化した時を経て再び装飾を指向するのである。しかしこの装飾指向は前時期とは異なり杯部内面への装飾である。これらの分布は、S字縫の分布範囲内に包括されている。ただし、伊勢地域では鳥羽地方で若干の出土例に留まっている。特に器種分類した高杯Aの分布は極めて特徴的である。

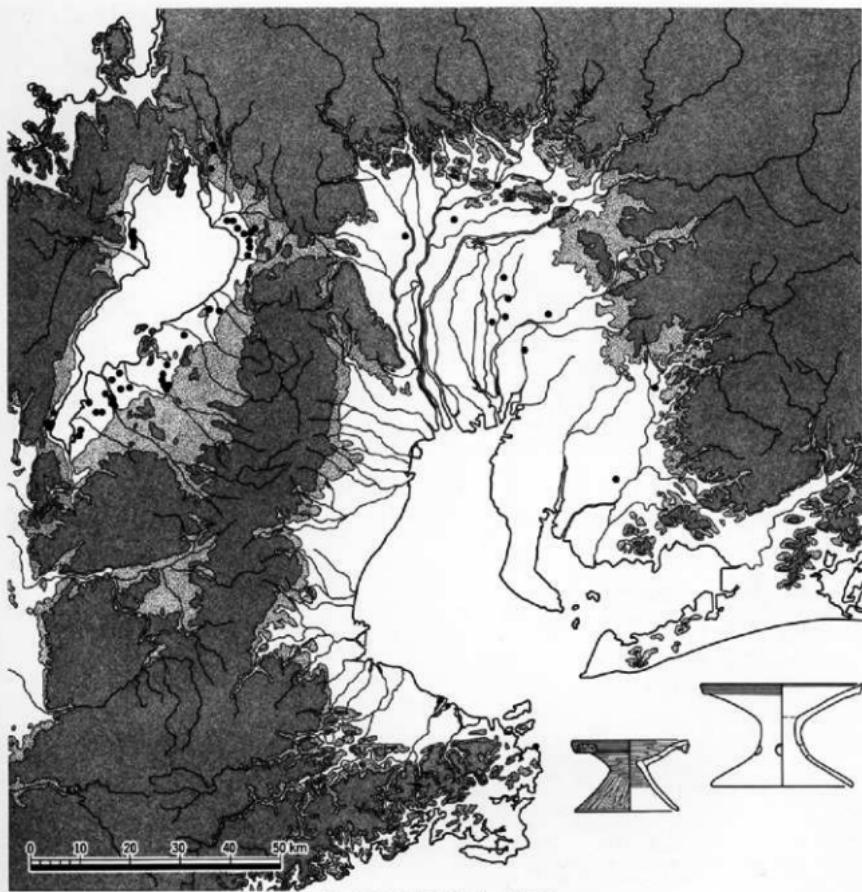


図71 器台形土器の分布 (1 : 1000000)

着飾った器台と捉えたのは、杯部端部を拡張或いは肥厚させ壺Aと同様な加飾を施したもの指す。高杯の分布と同様なあり方を示している。出土例では、近江地方が湖東に集中するのが湖南或いは湖西へと拡散する傾向を示している。一方、尾張北部や美濃西部では散在するに過ぎない。しかし、近江地方の加飾指向は、端部の拡張でありその部位に沈線・クシ書き横線で満たすのにすぎないが、尾張部加飾指向は器台そのものに壺の加飾を加えており加飾に2系統が存在している。尾張的特徴と言える。

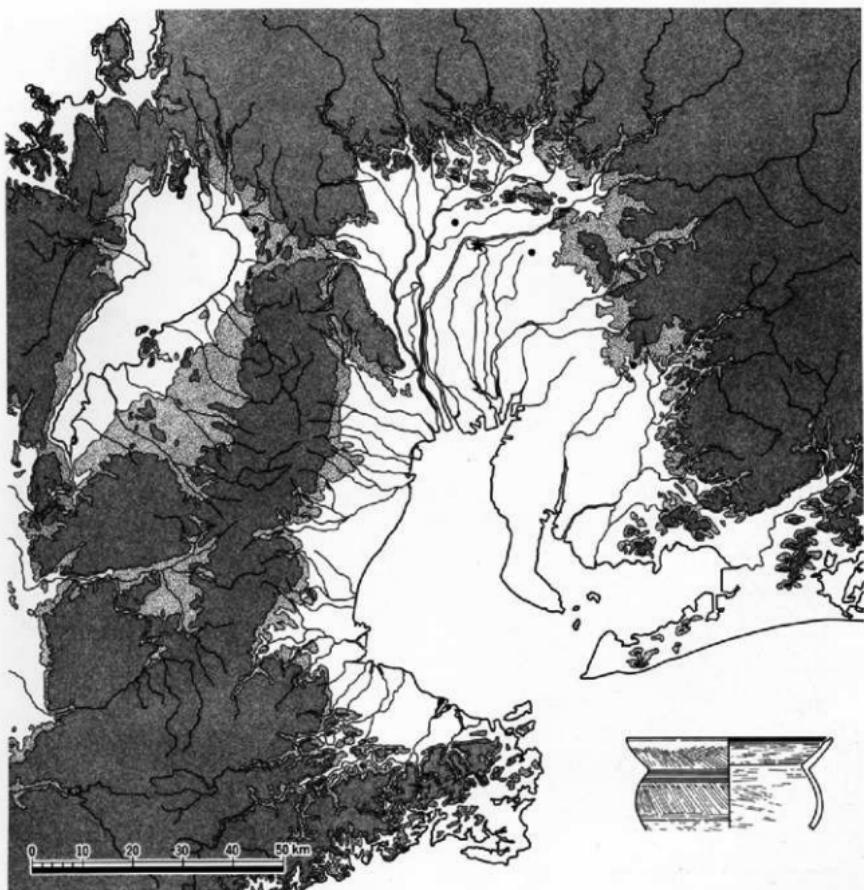


図72 鉢形土器の分布 <1 : 1000000>

鉢形土器への加飾は口縁端部内外面への数条の沈線・クシ書き横線に限られる。出土例は極めて少なく特徴を見い出せない。尾張北部から美濃地方と近江東域に分布することは高杯Aの加飾指向と軌を同一とする結果であろう。

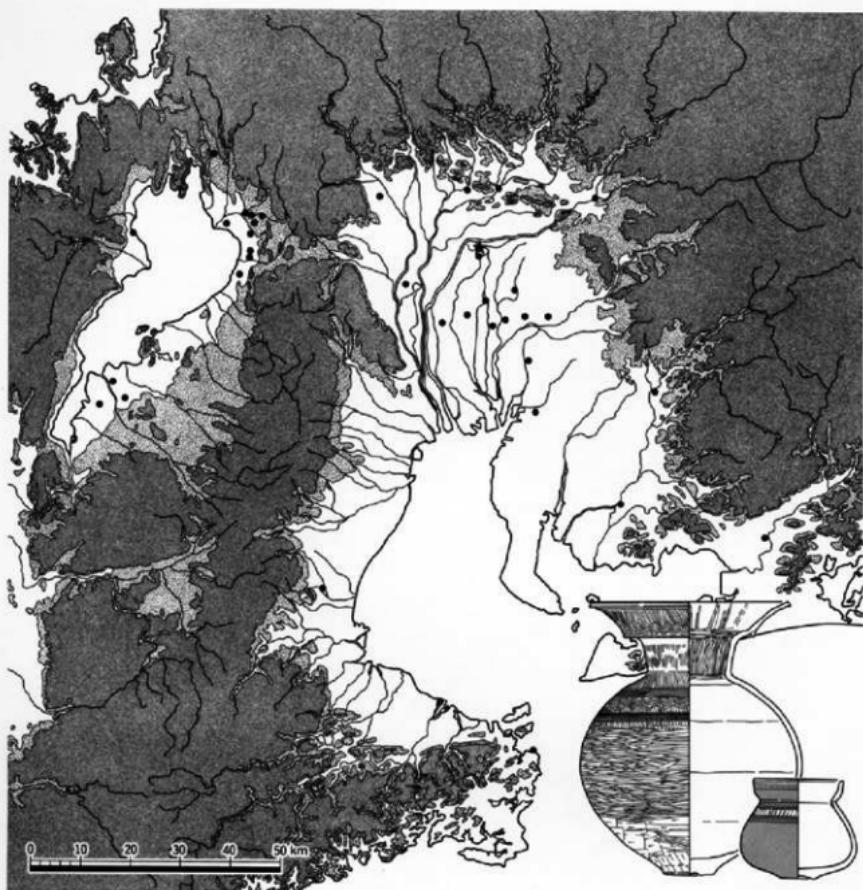


図73 壺形土器の分布 (1 : 1000000)

壺形土器への加飾はなにも伊勢湾沿岸域の特徴とはならないが、東海的なバレス壺に見られる加飾指向とことなる二重口縁壺的な加飾指向の2系統が存在している。ここでは前者の分布を重ねていな  
いが、近江東部の分布と尾張北部からの美濃西部の分布の2大域に集中する傾向は他の器種と同様で  
ある。

伊勢湾沿岸地域は周辺に大小河川による低湿地部を形成し、それを取り囲む様に高地部を配している。それは、一見すると全体が他地域と閉塞された感がある。(逆の視点にたてば海に対して限りなく開かれている)しかし、実際には尾張と美濃の間には木曾川が流れしており、木曾三川が尾張あるいは美濃と伊勢とを分断しており、更に三河部にも大きな河川が大地を分断しているのである。伊勢は南北に長く、鈴鹿山系に発する多くの河川は東流して伊勢湾に注ぎ、南北に長い伊勢を更に分断している。一方、同じ鈴鹿山系を源を持つ河川のうち西流・北西流すれば、それらは皆近江の琵琶湖に注いでいる。

鈴鹿山系の北端は北に広がる伊吹山系に連なるのではなく、今の関ヶ原付近で途切れ狭いながらも谷部を形成しているのである。それは伊勢湾沿岸地域においては閉塞部の抜け道であるかの如く地形環境を示している。いや閉塞部への唯一の交流路(海以外)になり得ているのではなかろうか。近江から関ヶ原を抜けるとまるで大地と空とが限りなく広がっているようで、原野を遮るものは何も無い地形となっている。この、鈴鹿山系と伊吹山系の谷部は、今日では日本の主要な幹線交通網の集中地帯になっている。こうした地理的環境故には古くから重要な交通路であったことは容易に想像できる。しかし、長い時間の中ではこの抜け道が内から外への抜け道ではなく、むしろ外から内への入り口にも成りうる道となる。こうしたこととは、土器(弥生後段階)交流からすでに指摘されている。時代によりその強弱の相違はあるが、閉塞部(抜け道・入り口)を挟んだ両地域に於ける各時代の土器に見られる親縁性は十分想定できる。

東海系土器に於ける広がりは、S字甕(廻間II式段階の第一次拡散)に牽引されるように他の器種(壺・高杯・器台:鉢は資料店数が少ない)も拡散している様相が指摘されている。そして、近年美濃西部での調査事例の増加によって近江東部・北東部(琵琶湖東岸)の事例比較検討が容易になりつつある。それは、土器への加飾現象が当地では一過性の現象に留まるものではなく普遍的な地域相の表出にほかならない。近年こうした事象を東海系土器の名のもとに当地の自己表現力の求心性及びその特殊性として位置付け、新たな歴史の構築を摸索している。

第 1 表 S 字彙・加飾土器出土土器一覧

道路名	所在地	S字高环	环台	环底
名古屋城三の丸通路	愛知県名古屋市	●		
高蔵通路	愛知県名古屋市	●		
月岡手通路	愛知県名古屋市	●	●	
食生町通路	愛知県名古屋市	●		
古沢町通路	愛知県名古屋市	●		
下前津通路	愛知県名古屋市	●		
若葉通路	愛知県名古屋市	●		
三王山通路	愛知県名古屋市	●		
見晴台通路	愛知県名古屋市	●		
雙三慶通路	愛知県名古屋市	●	●	
本塙歌通路	愛知県名古屋市	●		
下波通路	愛知県名古屋市	●		
平松通路	愛知県名古屋市	●	●	
南木戸通路	愛知県名古屋市	●		
山中通路	愛知県名古屋市	●		
さんやま古墳	愛知県名古屋市	●		
北道手通路	愛知県名古屋市	●	●	●
鶴川通路	愛知県豊田市	●	●	●
町田通路	愛知県春日井市	●		
空河戸通路	愛知県春日井市	●		
南北山通路	愛知県春日井市	●	●	
西石神 B 地区	愛知県大山市	●		
流古瀬跡付近	愛知県大山市	●		
木曽川水没道路	愛知県尾西市	●		
大平通路	愛知県尾西市	●	●	
西之海道通路	愛知県小牧市	●		
三ツ山古墳群	愛知県小牧市	●		
塔之船通路	愛知県稻沢市	●	●	
陸田白山通路	愛知県稻沢市	●		
瓶之内花／木道路	愛知県稻沢市	●	●	●
下津通路	愛知県稻沢市	●		
上田閑通路	愛知県稻沢市	●		
東木・横地通路	愛知県稻沢市	●		
込野通路	愛知県稻沢市	●		
琵琶ノ通路	愛知県稻沢市	●		
森舟通路	愛知県岩倉市	●		
岩倉通路	愛知県岩倉市	●	●	●
西北北通路 B 地点	愛知県岩倉市	●		
鶴田通路	愛知県西春日井郡御嶽町	●		
免菴寺御中塙通路	愛知県西春日井郡御嶽町	●		
朝日通路	愛知県西春日井郡御嶽町	●	●	●
西通路	愛知県西春日井郡御嶽町	●	●	●
土田通路	愛知県西春日井郡御嶽町	●		
仁門野通路	愛知県羽部市大口町	●		
大郎通路	愛知県羽部市大口町	●		
門前通路	愛知県葉栗郡曾根川町	●		
金塚出土	愛知県葉栗郡曾根川町	●		●
福塚出土	愛知県葉栗郡曾根川町	●		●
法立文字作正沿土	愛知県中島郡平和町	●		
法立文字聚落敷出土	愛知県中島郡平和町	●		
埋田通路	愛知県津島市	●		
寺野通路	愛知県津島市	●	●	
阿弥陀寺通路	愛知県海部郡甚目寺町	●		
大洲通路	愛知県海部郡甚目寺町	●		
清明通路	愛知県海部郡甚目寺町	●		
定納通路	愛知県海部郡八幡町	●		
東西野通路	愛知県海部郡佐伯町	●	●	●
鵜堀通路	愛知県海部郡佐伯町	●		
奥津社古墳	愛知県海部郡佐伯町	●		
五反田通路	愛知県半田市	●		
塚森通路	愛知県東海市	●		
トトメキ通路	愛知県東海市	●		●
子安神社通路	愛知県大府市	●	●	
細見通路	愛知県知多市	●		
法海寺通路	愛知県知多市	●		
神明社貝塚	愛知県知多郡南知多町	●		
神明社東坂道通路	愛知県知多郡南知多町	●		
飯浜通路	愛知県知多郡南知多町	●		
相模谷通路	愛知県知多郡美浜町	●		
坂戸通路	愛知県岡崎市	●		
御所通路	愛知県岡崎市	●		
高木通路	愛知県岡崎市	●		
生平通路	愛知県岡崎市	●		
木野通路	愛知県岡崎市	●		
矢作川河床通路	愛知県岡崎市	●		
龜塚通路	愛知県安城市	●		
中抜間通路	愛知県安城市	●		
本神通路	愛知県安城市	●		●
岡島通路	愛知県西尾市	●	●	
尾山門通路	愛知県西尾市	●		
不毛第一通路	愛知県西尾市	●		
荒新切通路	愛知県知立市	●		
王江通路	愛知県碧南市	●		
中根山通路	愛知県豊橋市	●		
高橋通路	愛知県豊橋市	●	●	●
伊保通路	愛知県豊橋市	●	●	●
八郷通路	愛知県新城市	●		
南貝津通路	愛知県新城市	●		
市杵嶋神社古墳	愛知県豊橋市	●		
瓜郷通路	愛知県豊橋市	●		
雨谷通路	愛知県豊川市	●		
原原通路	愛知県豊川市	●		
郷中通路	愛知県豊川市	●		
大理古墳	愛知県宝飯郡一宮町	●		
宮衛通路	愛知県宝飯郡一宮町	●		
宮代通路	愛知県宝飯郡一宮町	●		
柳原通路	愛知県美浜郡田原町	●		
山崎通路	愛知県美浜郡田原町	●		
瓦場通路群	愛知県渥美郡渥美町	●		
(大草地区)				
八幡上通路	愛知県渥美郡渥美町	●		
ドウツン松通路	愛知県渥美郡渥美町	●		
江東通路	岐阜県岐阜市	●	●	●
城之内通路	岐阜県岐阜市	●	●	
御望通路	岐阜県岐阜市	●		
一本松通路	岐阜県岐阜市	●		
龜田町通路	岐阜県岐阜市	●		
下川手通路	岐阜県岐阜市	●		
下城田寺山二通路	岐阜県岐阜市	●		
太田通路	岐阜县岐阜市	●		
花輪山通路	岐阜县岐阜市	●		
(大野晋遺跡)				
今宿通路	岐阜县大垣市	●	●	●
登根八千町通路	岐阜县大垣市	●		
八重通路	岐阜县各務原市	●		
磐舟山通路	岐阜县各務原市	●		
宮之崎通路	岐阜县河内市	●	●	
小村通路	岐阜县中津川市	●		
尾崎通路	岐阜县美浓加茂市	●		
伊澤要地通路	岐阜县美浓加茂市	●		
轟之内四郷通路	岐阜县安八郡轟之内町	●		
大通東通路	岐阜县各務原市	●		
南山道通路	岐阜县街賀郡大野町	●		
(南山古墳下層)				
水没通路	岐阜县羽島郡笠松町	●		
宗大坂古墳	岐阜县本郷郡真正町	●		

道 路 名	所 在 地	S字	高环	幕合	跡 台
船来山古墳群	岐阜県本巣郡多賀町	●	●		
九合洞窟遺跡	岐阜県山県郡美山町	●			
納所遺跡	三重県津市	●			
櫛山遺跡	三重県津市	●			
養老遺跡	三重県津市	●			
六犬A遺跡	三重県津市	●			
六犬B遺跡	三重県津市	●			
里原遺跡	三重県津市	●			
太田遺跡	三重県津市	●			
巖田遺跡	三重県津市	●			
西垣内遺跡	三重県津市	●			
中郷遺跡	三重県津市	●			
竹川遺跡	三重県津市	●			
野垣内遺跡	三重県伊勢市	●			
中塩山遺跡	三重県伊勢市	●			
尾間遺跡	三重県伊勢市	●			
高ノ御前遺跡	三重県伊勢市	●			
澤田遺跡	三重県伊勢市	●			
小芝遺跡	三重県伊勢市	●			
神郎遺跡	三重県伊勢市	●			
地藏僧遺跡	三重県龜山市	●			
山城遺跡	三重県龜山市	●			
天ノ宮遺跡	三重県龜山市	●			
白瀬遺跡	三重県龜山市	●	●	●	●
人參寺遺跡	三重県名張市	●			
草山遺跡	三重県松阪市	●			
鴨跡遺跡	三重県松阪市	●			
曲遺跡	三重県松阪市	●			
大足遺跡	三重県松阪市	●			
堂ノ後遺跡	三重県松阪市	●			
深長古墳	三重県松阪市	●			
杉垣内遺跡	三重県松阪市	●			
上野遺跡	三重県桑名市	●			
水井遺跡	三重県桑名市	●			
淨寺上寺南遺跡	三重県安芸郡安濃町	●			
酒水西遺跡	三重県安芸郡安濃町	●			
高堀遺跡	三重県志摩郡志摩町	●			
貝塚遺跡	三重県志摩郡志摩町	●			
宮の越遺跡	三重県志摩郡志摩町	●			
女牛谷古墳群	三重県志摩郡志摩町	●			
松阪市					
小村遺跡	三重県志都崎野町	●			
下之庄東方遺跡	三重県志都崎野町	●			
西殿遺跡	三重県志都崎野町	●			
牛バサマA遺跡	三重県多気郡多気町	●			
椿崎遺跡	三重県多気郡多気町	●			
湯野田遺跡A	三重県多気郡多気町	●			
小社遺跡	三重県多氣郡玉城町	●			
勝田遺跡	三重県多氣郡玉城町	●			
追田浦遺跡	三重県度会郡度会町	●			
滋賀里遺跡	滋賀県大津市	●			
豆木原遺跡	滋賀県大津市	●			
銅鏡遺跡	滋賀県大津市	●			
南遺跡遺跡	滋賀県大津市	●			
穴太遺跡	滋賀県大津市	●			
金剛寺、後川遺跡	滋賀県近江八幡市	●			
曳小舟(高木)遺跡	滋賀県近江八幡市	●			
紀坂遺跡	滋賀県近江八幡市	●			
東遺跡	滋賀県近江八幡市	●			
黒櫻遺跡	滋賀県近江八幡市	●			
千留供佛寺遺跡	滋賀県近江八幡市	●			
馬渡遺跡	滋賀県近江八幡市	●	●		
九重館遺跡	滋賀県近江八幡市	●			
五条・南山田遺跡	滋賀県草津市	●			
御倉遺跡	滋賀県草津市	●			
大亥支遺跡	滋賀県長浜市	●			

道 路 名	所 在 地	S字	高环	幕合	跡 台
金剛寺遺跡	滋賀県長浜市	●	●	●	
高田遺跡	滋賀県長浜市	●	●	●	●
袖田遺跡	滋賀県長浜市	●	●	●	●
越前塚遺跡	滋賀県長浜市	●	●	●	●
大東遺跡	滋賀県長浜市	●			
熊岡山西遺跡	滋賀県長浜市	●	●		
松塚遺跡	滋賀県長浜市	●			
鳴田遺跡	滋賀県長浜市	●	●	●	
国友遺跡	滋賀県長浜市	●	●	●	●
永久寺遺跡	滋賀県長浜市	●	●	●	
森前遺跡	滋賀県長浜市	●	●	●	●
高幡南遺跡	滋賀県長浜市	●			
大坂已遺跡	滋賀県長浜市	●			
今川東遺跡	滋賀県長浜市	●	●	●	
十種寺遺跡					
相模北遺跡	滋賀県守山市	●	●	●	
十里町遺跡	滋賀県守山市	●	●	●	
塚町遺跡	滋賀県守山市	●			
立石遺跡	滋賀県守山市	●	●	●	
妙楽寺遺跡	滋賀県守山市	●	●	●	
妙南遺跡	滋賀県守山市	●	●	●	
笠原南遺跡	滋賀県守山市	●	●	●	
金ヶ森西遺跡	滋賀県守山市	●	●	●	
赤野井遺跡	滋賀県守山市	●			
山貨西遺跡	滋賀県守山市	●			
横江遺跡	滋賀県守山市	●	●	●	
石田三宅遺跡	滋賀県守山市	●	●	●	
小島遺跡	滋賀県守山市	●	●	●	
播磨磨田東遺跡	滋賀県守山市	●			
古高遺跡	滋賀県守山市	●			
伊勢遺跡	滋賀県守山市	●			
唐川遺跡	滋賀県伊香郡高月町	●			
円通寺遺跡	滋賀県伊香郡高月町	●			
坂口遺跡	滋賀県伊香郡余呑町	●	●	●	
桜内遺跡	滋賀県伊香郡余呑町	●			
堂田遺跡	滋賀県守山市瀧生町	●			
蘿之町遺跡	滋賀県守山市瀧生町	●			
牛西遺跡	滋賀県守山市瀧生町	●			
川見北遺跡	滋賀県守山市瀧生町	●			
小川遺跡	滋賀県守山市瀧生町	●			
法勝寺遺跡	滋賀県坂井郡近江町	●	●	●	
世觀遺跡	滋賀県坂井郡近江町	●			
高溝遺跡	滋賀県坂井郡近江町	●	●	●	
網戸遺跡	滋賀県坂井郡近江町	●			
黒田遺跡	滋賀県坂井郡近江町	●	●	●	
西火打遺跡	滋賀県坂井郡近江町	●			
西円寺遺跡	滋賀県坂井郡近江町	●			
孤塚遺跡	滋賀県坂井郡近江町	●			
奥戸戸遺跡	滋賀県坂井郡近江町	●			
人江内岡西野遺跡	滋賀県坂井郡米原町	●	●	●	
中多良遺跡	滋賀県坂井郡米原町	●			
弘川遺跡	滋賀県高島郡高島町	●			
森浦遺跡	滋賀県高島郡新旭町	●	●	●	
針江遺跡	滋賀県高島郡新旭町	●	●	●	
針江中遺跡	滋賀県高島郡新旭町	●			
針江北遺跡	滋賀県高島郡新旭町	●			
針江北遺跡	滋賀県高島郡新旭町	●			
針江遺跡群	滋賀県高島郡新旭町	●			
正伝寺南遺跡	滋賀県高島郡新旭町	●	●	●	
吉武城遺跡	滋賀県高島郡新旭町	●	●	●	
五条遺跡	滋賀県野洲郡中主町	●	●	●	
六条遺跡	滋賀県野洲郡中主町	●	●	●	
本部遺跡	滋賀県野洲郡中主町	●			
野洲川左岸遺跡	滋賀県野洲郡野洲町	●			
常樂寺遺跡	滋賀県野洲郡野洲町	●			
中北遺跡	滋賀県野洲郡野洲町	●			

## 第5章 まとめ

東海北陸自動車道の建設事業は、尾張北部地域を生活基盤とする人々にとって大きな変化をもたらすであろうことは、想像に難くない。さらに開通した折りには一体どのよう生活が展開されるのであろうか。こうしたその社会の根底部分までをも変化させてしまうような事象を画期と呼び、長い歴史のなかでは幾度となく繰り返されきたのであろう。こうした延長上に今日の世界が形成されている。それぞれの画期をそれぞれ時代の人々がどのような姿勢で受け止めたのかが、歴史のなかで評価される点でもある。画期に押しつぶされ、歴史の闇のなかに葬り去られたこともあったであろう。また、画期を乗り越えて更なる段階へと発展したことがあったのであろう。北道手遺跡で集落が本格的に形成され始めた3世紀という時代は、汎日本の規模で当時の社会において多くの地域・人々を巻き込んだ画期であった。西方に端を発した潮流は列島の中央部により更に増長された巨大な政治的エネルギーを帯びて放射状に拡散していった。はたしてそうであろうか。いとも簡単には人々は、巨大エネルギーにひれ伏したのだろうか。北道手遺跡はもちろんこの問い合わせに明快に答えてくれるわけではない。以下、調査の成果をまとめてみる。

北道手遺跡の集落としての開始時期は、弥生時代中期中葉に遡る。尾張的視野での中期全般を概観した場合、中期前葉段階の集落の発展は前期集落の延長上に位置する。しかし、すべての前期遺跡がその道を辿った訳ではない。つまり、水田農耕の受容と拡散とはかならずしも軌を一致するものではない。土器様式共に広範囲に拡散するのは、中期中葉である。尾張の周辺地域はもちろん特に美濃地方へ広がりが認められる。この段階に新たに集落を形成した遺跡がその後も継続性を維持した遺跡は例外なく、尾張南部の遺跡に限られてくる。北道手遺跡や下渡遺跡・西上免遺跡等は継続しない遺跡であり、阿弥陀寺遺跡は継続し巨大な集落形成していく。前者の遺跡は中期中葉後空白期間を経て再び集落形成を開始するのが古墳時代初頭の段階まで待たねばならない。こうした出現様相を内的要因で理解するのか、あるいは同段階での西方からの巨大なエネルギーによる外的要因で理解するのかは、当地方に特徴的なS字彫口縁台付甕（以下S字甕）の出現とその段階的拡散現象のあり方が問題となってくる。最近では、S字甕のほかに注目されてきているのが、加飾性に富み水銀朱による赤色顔料を用いて赤彩する土器のパレス形壺形土器や同様に加飾化が一般化したように他の器種（高环・器台・壺・鉢）に多様されており、それらに尾張型の名称を与え尾張の独自性を探ろうとする研究指向が見られる。

着飾った土器すなわち加飾性に富む土器の分布はS字甕の分布と重なる地域が多い。特に杯部内面に沈線紋を加飾する高环型土器は尾張低地部・北部を含めて美濃西部や近江東部に集中するようである。ただし、尾張や美濃では沈線多条が少条を凌駕しており、一方近江東岸では少条が多条を凌駕する違いが看取される。また、加飾高环のなかで口縁内面を肥厚させたうえで沈線を多条化する一群は近江東岸で発達し、肥厚させないので多条化

は美濃西部から尾張北部において発展している。こうした、近江-美濃西部-尾張のルートは、近江のさらに北の北陸ともつながっており、北陸系土器のうち口縁部に凹線の見られる甕型土器や立ち上げた口縁部形態のみを受け入れた器形（文様はないままの器形）や特殊な器形をした器台等の土器が各地域のなかに入り込み土器形式を構成している。北陸系土器を出土する遺跡は、美濃地方では今宿遺跡・曾根八代町遺跡・城内遺跡・水没墓掛遺跡が知られており、尾張では北道手遺跡・朝日遺跡が挙げられる。

北道手遺跡を特徴づけているのは、水辺の祭祀形態である。水際に対して一定の空白ゾーンの背後に2mを越す大型の土坑が2~3基のもとに規模が2m以下の浅め土坑が付随して単位群（中核ゾーン）を形成する。空白ゾーンと土坑による単位群を形成する間に炭化物を伴う土坑群が存在している。単位群を形成する土坑群の一角に周溝を伴う仮設の建物が付随する。単位土坑群内の土器類が多量ではあるが細片化された土器が主体であったのに対して炭化物を含む土坑群周辺の土坑には完形品を含んでおり、祭祀の中心地が大型土坑群にあるのでなく水際こそ（空白ゾーンと中核ゾーンの両者）が重要な地域であったのであろう。

北道手遺跡は古墳時代の極短期間の集落遺跡でしかもその中心地（集落の本体）は調査区の北東部にあたり、西に広がる川あるいは氾濫に悩まされる湿地地帯に対峙した人々の祈りが繰り広げられた場所であったのであろう。北道手遺跡の理解には北東部の状況が必要であろう。しかし、今日の生活があり、そこは古墳時代以降安定したことのないがたっている。長期的安定生活には、自然に無力な人々にとって自然の怒りを鎮める祈りが欠かせなかった。いまやかっての祈りの場が生活の根幹をなす水田に置き換えられており、北道手遺跡はこうした歴史の流れを我々に教えてくれる。

**縁刻画  
土器** 94E区の検出遺物として取り上げたこの土器片には焼成前になるヘラ描きによる絵画が描かれており、II期の壺形土器の破片と思われる。一見して船と船上の人物を表現しているようで人物の頭部には大きな飾りものを載せているかのようである。

描き手順は、船を描いた後船上の人物らしきものを描いている。船部は一見すると併走する2艘のようであるが、船首もしくは船尾を高く反り上げた描き方は耐波性を重視した準構造船を思わせる。船を描く視点は船に対して同位置で、船側面を外郭線のみならず複数の線刻で表現している。合わせ板を表現しているのであろうか。舷側には権の支点らしきものは描かれていない。人物は胸部と両肩（腕は略されている）更に頭部とおぼしき位置から上に向かって6条の線が延びている。うち右から2本目の線は体の中央部を貫き舷側をも貫いている。6条の線は鳥人を意識した羽根飾りではないだろうか。体の正中線が舷側を貫いていることは、不十分ながら人物が船内に立っていることを意識するものであろう。

この線刻画土器は全体構図の3分の1程度であろう。全体を知り得ないが、右端の2つの三角形状の描き方を船首もしくは船尾を高く反り上げた耐波性を強調したものであるとすると、渡航船を表現することになる。そして、船上の人物は南方系の島人と考えても差し支えないのではないかだろうか。しかし、この土器片を出土のは内陸部の北道手遺跡である。海とはほど遠い。

#### 参考文献

1983 石井謙治『図説 和船史話』

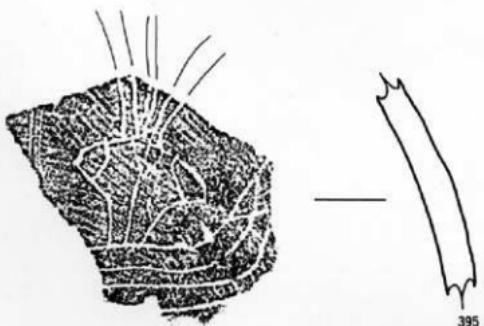


図74 縁刻絵画土器

参考文献一覧

列年	文 稿	地名	所 在 地
1 1963	瓜瀬町(市教委)	瓜瀬通路	愛知郡那古山
2 1964	豊川市水路開削調査報告書(市教委)	八幡通路	愛知郡那古山
3 1965	北特進道跡・大御堂通跡発掘調査報告(市文化財保護委員会)	大御堂通路	愛知郡丹羽町
4 1967	昭和41年度美濃平原地域文化財調査報告(市教委)	瓦屋通跡(大草地区)	愛知郡渥美郡渥美町
5 1968	昭和42年度美濃平原(市)・市文化財調査報告書(市教委)	見晴らし通路	愛知郡名古屋市
6 1969	瑞穂町(市教委)	瑞穂通路	愛知郡瑞穂町
7 1969	高幡町(市教委)	高幡通路	愛知郡瑞穂町
8 1970	春日井市盆地発掘調査報告書第4集(市教委)	南京东通路	愛知郡日吉町
9 1970	津島市史 貢料篇(一)	今野通路	愛知郡津島市
10 1971	明治通跡群の土器と保存金	朝日通路	愛知郡西春日井郡清洲町
11 1971	高岡町(市教委)	高岡通路	愛知郡豊田市
12 1972	門間町通跡発掘調査報告(市教委)	明日通路	愛知郡西春日井郡清洲町
13 1972	門間町通跡発掘調査報告(市教委)	門間通路	愛知郡西春日井郡清洲町
14 1972	阿波町通跡(市教委)	阿波町通路	愛知郡阿波町
15 1972	養老・森山B・阿波通跡発掘調査報告(市教委)	鶴山通路	愛知郡津島市
16 1972	養老・森山A・阿波通跡発掘調査報告(市教委)	鶴山通路	愛知郡津島市
17 1972	養老・森山B・阿波通跡発掘調査報告(市教委)	鶴山通路	愛知郡津島市
18 1972	明治通跡発掘調査報告(市教委)	鳴田通路	愛知郡長浜市
19 1973	昭和42年度豊橋市立文化財調査報告書(市教委)	木曾川木戸(木戸通路)	愛知郡西尾市
20 1973	名古屋市立文化財調査報告書(市教委)	木曾川木戸(木戸通路)	愛知郡西尾市
21 1973	尾尾史、自然遺産、扇形六代(一)	乞食町通路	愛知郡尾尾山
22 1973	昭和42年度豊橋市立文化財調査報告書(市教委)	中宿東通路	三重郡伊勢山
23 1973	木戸通跡発掘調査報告(市教委)	木戸通路	三重郡四日市山
24 1973	昭和42年度豊橋市立文化財調査報告書(市教委)	清水木戸通路	三重郡那古山郡多度町
25 1973	昭和42年度豊橋市立文化財調査報告書(市教委)	宮の内通路	三重郡一志郡三町
26 1973	昭和42年度豊橋市立文化財調査報告書(市教委)	小竹通路	三重郡志摩郡磯野町
27 1973	昭和42年度豊橋市立文化財調査報告書(市教委)	御殿通路	三重郡志摩郡御殿町
28 1974	西河内本郷通跡発掘調査報告書(市教委)	古穴木戸通路	愛知郡名古屋市
29 1974	名古屋市立文化財調査報告書(市教委)	下前田通路	愛知郡高浜町
30 1974	伊良湖岬(尾張道跡調査会合)	五江通路	愛知郡豊田市
31 1974	伊良湖岬(尾張道跡調査会合)	伊保通路	愛知郡豊田市
32 1975	朝日通跡 第一次調査報告(市教委)	明日通路	愛知郡西春日井郡清洲町
33 1975	長良川通跡(市教委)	清明通路	愛知郡那古山郡長良町
34 1975	高岡通跡(市教委)	丸ノ内通路	愛知郡豊田市
35 1976	高岡通跡 第二次発掘調査報告(市教委)	高岡通路	愛知郡豊田市
36 1976	宮之内通跡発掘調査報告書(可児町役場)	宮之内通路	岐阜郡可児市
37 1976	追間町通跡発掘調査報告(市教委)	追間町通路	岐阜郡度会郡海津町
38 1976	桜木通跡発掘調査報告(市教委)	桜木通路	岐阜郡大治町
39 1977	中尾町通跡発掘調査報告(市教委)	中尾通路	三重郡津市
40 1977	人口川西通跡発掘調査報告書(市教委)	人口川西野通路	三重郡御器所町
41 1978	中尾町通跡発掘調査報告(市教委)	中尾通路	三重郡龜山市
42 1978	人口川西通跡発掘調査報告書(市教委)	人口川西通路	三重郡御器所町
43 1978	中尾町通跡(市教委)	中尾通路	三重郡御器所町
44 1979	小原町古窯跡群(小原通跡発掘調査会)	中原通路	愛知郡加茂郡美浓町
45 1979	岐阜県史 史官編 考古・文部財	相模川通路	岐阜郡垂井町
46 1979	岐阜県史 史官編 考古・文部財	江東通路	岐阜郡垂井町
47 1979	岐阜県史 史官編 考古・文部財	御留通路	岐阜郡岐阜市
48 1979	岐阜県史 史官編 考古・文部財	一牛松通路	岐阜郡岐阜市
49 1979	岐阜県史 史官編 考古・文部財	曳鬼町通路	岐阜郡岐阜市
50 1979	岐阜県史 史官編 考古・文部財	下丁子通路	岐阜郡岐阜市
51 1979	中尾町通跡 第二次発掘調査報告書(市教委)	中村通路	岐阜郡中村山
52 1979	昭和42年度豊橋市立文化財調査報告書(市教委)	野川通路	三重郡伊勢山
53 1979	追間町通跡(市教委)	南町西通路	三重郡度会町
54 1979	森田町通跡発掘調査報告書(市教委)	森田通路	三重郡鳥羽郡御器所町
55 1980	豊橋市立文化財調査報告書(市教委)	三ツ川古墳群	愛知郡小牧市
56 1980	市立文化財調査報告書(市教委)	三ツ川古墳群	愛知郡小牧市
57 1980	西の久手街通跡(尾張町)	八幡通路	愛知郡稻葉郡美浓町
58 1980	納戸通跡(市教委)	納戸通路	三重郡津市
59 1980	高田町通跡(市教委)	高田通路	三重郡具志川市
60 1980	追間町通跡発掘調査報告書(市教委)	小川通路	三重郡神崎郡邑豆郡登川町
61 1980	追間町通跡発掘調査報告書(市教委)	計江通路	三重郡度会町
62 1981	昭和42年度豊橋市立文化財調査報告書(市教委)	平松通路	愛知郡一宮市
63 1981	昭和42年度豊橋市立文化財調査報告書(市教委)	元城通路	愛知郡西春日井郡豊山町
64 1981	伊良湖岬(尾張道跡調査会合)	今泉通路	愛知郡豊山町
65 1981	木曾川河岸	福原通路	愛知郡豊山町
66 1981	岐阜市史	柳之内通跡	岐阜郡山田町美浓山町
67 1981	岐阜市史、追査編	九合谷通路	三重郡山田町
68 1981	岐阜市史、追査編	神浦通路	三重郡御器所町
69 1981	岐阜市史、追査編	火ノ矢通路	三重郡御器所町
70 1981	昭和42年度豊橋市立文化財調査報告書(市教委)	二郎通路	三重郡安浓郡御器所町
71 1981	多伊2号(学船大考古研究会)	小竹通路	三重郡御器所町
72 1981	追間町通跡発掘調査報告書(市教委)	唐川通路	三重郡御器所町
73 1981	追間町通跡発掘調査報告書(市教委)	弘川通路	三重郡御器所町
74 1982	前川通跡(市教委)	明日通路	愛知郡西春日井郡津洲町
75 1982	平和通(市教委)	法文寺(築居敷土)	愛知郡中島町平和町
76 1982	尾張町通跡(市教委)	紀見通路	愛知郡知多郡多巣町
77 1982	阿久比ダム周辺発掘調査報告書	尾山通路(大野町通跡)	岐阜県
78 1982	井ノ口通跡(市教委)	江口通路(御器所町通跡)	三重郡御器所町
79 1983	大山奈史: 史官編三、考古・古代・中世	西谷町通地区	愛知郡大山町
80 1983	佐助寺: 中御門通跡発掘調査報告書(市教委企画課)	佐助寺通付近	愛知郡西春日井郡御器所町
81 1983	佐助寺: 史官編三、考古・古代・中世	佐助寺御申塙通跡	愛知郡西春日井郡御器所町
82 1983	追間町通跡(市教委)	大野町通路	愛知郡御器所町
83 1983	仁野町通跡(町教委)	仁野町通路	愛知郡御器所町
84 1983	足利通跡(市教委)	佐久間通路	愛知郡御器所町
85 1983	足利通跡発掘調査報告(市教委)	佐久間通路	愛知郡御器所町
86 1983	名古屋通跡(尾張大学考古研究会)	人形町通路	三重郡御器所町
87 1983	瑞穂町通跡発掘調査報告会(市教委)	南川通路	愛知郡御器所町
88 1984	勝川通跡(サービスセンター)	勝川通路	愛知郡春日井市
89 1984	新林坂古市: 史官編六考古	堀之内通路	愛知郡御器所町
90 1984	新林坂古市: 史官編六考古	木本・櫻木通路	愛知郡御器所町
91 1984	新林坂古市: 史官編六考古	駒野通路	愛知郡御器所町
92 1984	新林坂古市: 史官編六考古	尾野通路	愛知郡御器所町
93 1984	年齢別(原ヤマセヒンセイタ)	阿知吹寺通路	愛知郡御器所町
94 1984	松崎川原第1次発掘調査報告書(市教委)	坂庭通路	愛知郡御器所町
95 1984	安政社通跡(市教委)	元安政社通路	愛知郡御器所町
96 1984	宇治山文化財調査報告書(市教委)	細見通路	愛知郡御器所町
97 1984	御見通跡第1次発掘調査報告書(市教委)	御見通東通路	愛知郡御器所町

年	文 獻	道 路 名	所 在 地
98	北陸自動車道高岡連絡ランプ開通調査報告書(高岡市)	坂口連絡	富賀伊香郡企余町
99	国道161号バイパス開通調査概要報告(昭和4年)(県教委他)	正丸山道連絡	高岡市郡町
100	石川市史・上巻	西北道連絡B地点	愛知郡石川町
101	1965年石川県立農業技術センター地域文化財発掘調査報告書(県教委)	曲道連絡	三東郡板取村
102	1965年石川県立農業技術センター大学子宮研究会	田代道連絡	三東郡大門町
103	1965年石川県立農業技術センター(県教委他)	坂越道連絡	高岡市近八幡市
105	(1)整備箇所延長調査報告書X-1(県教委他)	木久寺道連絡	高岡市長浜市
105	(2)整備箇所延長調査報告書X-2(県教委他)	大原已道連絡	高岡市長浜市
106	1985年石川県立農業技術センター(県教委他)	坂元道連絡	愛知郡稻葉村
107	1986年石川県立農業技術センター(県教委他)	下平城跡	愛知郡稻葉村
108	1986年石川県立農業技術センター(県教委他)	御前山道連絡	愛知郡稻葉村
109	1986年石川県立農業技術センター(県教委他)	田代道連絡	愛知郡稻葉村郡野郷町
110	1986年石川県立農業技術センター(県教委他)	坂越道連絡	愛知郡稻葉村一宮町
111	1986年石川県立農業技術センター(県教委他)	西内道連絡	一東郡津市
112	1986年西内道延長調査報告書(県教委)	浅井井(高木)道連絡	高岡市近江川橋市
113	1986年官邸延長調査報告書(県教委他)	九郎道連絡	高岡市近江八幡市
114	近江八幡市立文化財発掘調査報告書X-1(県教委)	御前山道連絡	高岡市美濃町
115	1986年石川県立農業技術センター(県教委他)	坂越道連絡	高岡市美濃町
116	1986年石川県立農業技術センター(県教委他)	坂元道連絡	高岡市守山市
117	1986年石川県立農業技術センター(県教委他)	小山道連絡	高岡市守山市
118	1986年守山市文化財発掘調査報告書(市教委)	坂元町道連絡	高岡市守山郡五個荘町
119	1986年五箇荘町文化財調査報告書10(町教委)	坂川北道連絡	高岡市守山郡五個荘町
120	1986年国鉄1号線バイパス開通調査概要報告(60年度)(県教委他)	引川北道連絡	高岡市守山郡五個荘町
121	1987年第3回延長調査報告書(市教委)	弓削道連絡	愛知郡名古屋市
122	1987年弓削道延長調査報告書(市教委)	土居道連絡	愛知郡名古屋市昭和区
123	1987年弓削町、安曇町	佐野道連絡	愛知郡海部郡佐野町
124	1987年佐野町、安曇町	鶴来井古墳	愛知郡海部郡佐野町
125	1987年佐野町、安曇町	坂越道連絡	愛知郡豊川市
126	1987年佐野町、安曇町	大久古塚	愛知郡宝飯郡一宮町
127	1987年官邸延長調査報告書(市教委)	御前山道連絡	三重郡板取村
128	1987年官邸延長調査報告書(市教委)	高岡道連絡	三重郡一志町
129	1987年官邸延長調査報告書(市教委)	下平城跡	三重郡志摩野町
130	1987年官邸延長調査報告書(市教委)	坂越道連絡	高岡市長浜市
131	(1)整備箇所延長調査報告書X-1(県教委他)	弓削道連絡	高岡市長浜市
132	(2)整備箇所延長調査報告書X-2(県教委他)	松谷道連絡	高岡市長浜市
133	1987年官邸延長調査報告書(市教委)	笠置山道連絡	高岡市守山市
134	1987年官邸延長調査報告書X-1(県教委他)	坂越道連絡	高岡市守山郡近江町
135	1987年官邸延長調査報告書X-2(県教委他)	西之灯道連絡	高岡市守山郡近江町
136	1987年官邸延長調査報告書X-3(県教委他)	風馬道連絡	高岡市守山郡近江町
137	1987年官邸延長調査報告書X-4(県教委他)	見石古墳	愛知郡名古屋市
138	1988年官邸延長調査報告書(市教委)	坂越道連絡	愛知郡名古屋市
139	1988年大糸連絡(延長調査報告)	大糸連絡	愛知郡海部郡東栄町
140	トメキ連絡(延長調査報告)	トメキ連絡	愛知郡海部郡東栄町
141	1988年官邸延長調査報告書(市教委)	宮次道連絡	愛知郡宝飯郡一宮町
142	1988年ワツソン連絡(調査会)	ワツソン松連絡	愛知郡美濃郡瀬戸町
143	1988年近江日野道(大志→弓削)延長調査報告書(県教委)	女郎ヶ、ビノン古墳群	三重郡一志町野郷野町
144	1988年近江日野道(大志→弓削)延長調査報告書(県教委)	二庄町弓削連絡	三重郡一志町野郷野町
145	1988年近江日野道(大志→弓削)	御前山道連絡	三重郡志摩野町
146	1988年守山市改修工事による官邸延長調査報告(市教委)	御前山道連絡	高岡市守山市
147	1988年守山市改修工事による官邸延長調査報告(市教委)	紙屋御前山道連絡	高岡市守山市
148	1988年守山市改修工事による官邸延長調査報告(市教委)	国道連絡	高岡市守山市
149	1988年官邸延長調査報告書X-1(県教委他)	真庭道連絡	高岡市守山市
150	1988年官邸延長調査報告書X-2(県教委他)	十河町道連絡	高岡市守山市
151	1988年官邸延長調査報告書X-3(県教委他)	坂越道連絡	高岡市守山市
152	1988年石川延長調査報告書(市教委)	古市道連絡	高岡市守山市
153	1988年守山市改修工事による官邸延長調査報告(市教委)	法隆寺今連絡	志摩郡磯部町近江町
154	1988年守山市改修工事による官邸延長調査報告(市教委)	法隆寺今連絡	志摩郡磯部町近江町
155	1988年守山市改修工事による官邸延長調査報告(市教委)	五反道連絡	志摩郡磯部町中主町
156	1988年守山市改修工事による官邸延長調査報告(市教委)	升井道連絡	志摩郡磯部町能郷町
157	1988年守山市改修工事による官邸延長調査報告(市教委)	野瀬道連絡	志摩郡磯部町能郷町
158	1988年守山市改修工事による官邸延長調査報告(市教委)	野瀬道連絡	志摩郡磯部町能郷町
159	1989年官邸延長調査報告(市教委)	牛生道連絡	愛知郡名古屋市
160	1989年上深間延長調査報告書(延長調査報告)	上深間延長調査	愛知郡南河内町
161	1989年平根町延長	平根町延長	愛知郡南河内町
162	1989年御前半田延長:上巻	法字正作半田土	愛知郡半田市平田町
163	1989年神社貝塚(町野村)	五反田道連絡	愛知郡半田市
164	1989年神社貝塚(町野村)	神社貝塚	愛知郡半田市南加須町
165	1989年神社貝塚(町野村)	神社東山道連絡	愛知郡半田市南加須町
166	1989年御前山延長:守山市考古古	御前山道連絡	愛知郡名古屋市
167	1989年御前山延長:守山市考古古	牛生道連絡	愛知郡南河内町
168	1989年御前山延長:守山市考古古	牛生道連絡	愛知郡南河内町
169	1989年御前山延長:守山市考古古	矢吹川河床道連絡	愛知郡南河内町
170	1989年中根山遺跡(河内村)	中根山遺跡	愛知郡南河内町
171	1989年御前川延長(市教委)	御前川津連絡	愛知郡新城市
172	1989年御前川延長(市教委)	御前川津連絡	愛知郡新城市
173	1989年御前川延長(市教委)	御前川津連絡	愛知郡新城市
174	1989年宮元道連絡	百井道連絡	愛知郡半田市一宮町
175	1989年八幡上池延長調査報告(第3回)(町教委)	八幡上池道連絡	愛知郡半田市南美町
176	1989年山鼻町、大田道連絡(県教委)	大田道連絡	三重郡津市
177	1989年御前第4号(宇摩院大字考古完全)	高ノ新雨連絡	三重郡伊勢市
178	1989年御前第4号(宇摩院大字考古完全)	宮ノ後道連絡	三重郡伊勢市
179	1989年御前第4号(宇摩院大字考古完全)	深沢古墳	三重郡伊勢市
180	1989年御前第4号(宇摩院大字考古完全)	御前内古墳	三重郡伊勢市
181	1989年御前道延長(延長調査報告書X-1)(県教委)	御前道連絡	高岡市守山市
182	1989年御前道延長(延長調査報告書X-2)(県教委)	松崎道連絡	高岡市守山市
183	1989年御前道延長(延長調査報告書X-3)(県教委)	田原道連絡	高岡市守山市
184	1989年寺道延長(県教委)	妙美寺道連絡	志摩郡志摩町
185	1989年北陸自動車道延長(延長調査報告書X-1)(県教委)	御内道連絡	富賀伊香郡企余町
186	1989年北陸自動車道延長(延長調査報告書X-2)(県教委)	空坂道連絡	富賀伊香郡企余町
187	1989年御田道号(長良川→八幡川)延長(延長調査報告書(市教委))	御田道連絡	高岡市守山市
188	1990年名城城址(九連城)(市教委)	名城城址	愛知郡名古屋市
189	1990年月廣手道:貴生手道(延長文)	月廣手道連絡	愛知郡名古屋市
190	1990年月廣手道:貴生手道(延長文)	貴生手道連絡	愛知郡名古屋市
191	1990年飛駒町通り3~5(延長文の調査の報告)(市教委)	貴生手道連絡	愛知郡名古屋市
192	1990年大糸道延長(延長文)	大糸道連絡	愛知郡尾西郡
193	1990年網走道(延長文)	網走道連絡	愛知郡尾西郡
194	1990年西川道(延長文)	西川道連絡	愛知郡尾西郡

年	文 章	道 路 名	所 在 地
196 1990	城之内道路(市教委)	城之内道路	桜草原町牟寺
196 1990	一般国道23号中勢通地理文化財見聞調査概要(市教委)	里前道路	三重県津市
197 1990	白川越跡発掘調査報告(牛山通跡調査委員会)	白羽通路	三重県鳥羽市
198 1990	近江八幡市立郷土資料館開館記念式典(市教育委員会)	御殿通路	滋賀県大津市
199 1990	近江八幡市立郷土資料館開館記念式典(市教育委員会)	志貴通路	滋賀県近江八幡市
200 1990	近江八幡市立郷土資料館開館記念式典(市教育委員会)	高瀬通路	志賀島町高瀬町
201 1990	近江八幡市立郷土資料館開館記念式典(市教育委員会)	船戸通路	志賀島町船戸町
202 1990	正木山通路(県教委)	正木山通路	志賀島町正木山町
203 1990	六条通跡発掘調査報告(市教委)	六条通路	志賀島町中三町
204 1990	(注)瑞穂町開拓記念碑発掘調査報告書文書-1(県教委)	法勝寺通路	滋賀県和田岬町近江町
205 1991	平成2年農業生産經營整備事業実施報告書(市教委)	三王寺通路	愛知県名古屋市
206 1991	昭和田原幸町地区内道路及報告書1(市教委)	昭和田原幸町道路	愛知県名古屋市
207 1991	大津道路(県理文)	大津道路	愛知県豊明市
208 1991	市野瀬神社跡(市教委)	市野瀬神社古墳	愛知県豊明市
209 1991	山崎通路(町教委)	山崎通路	愛知県美濃加茂市
210 1991	山崎通路(町教委)	山崎通路	岐阜県多治見市
211 1991	城之内道路(岐阜文化財保護センター内)	城之内道路	岐阜県多治見市
212 1991	市内道路(市人部の歴史と文化をめぐる散策路)(市教委)	八龍通路	岐阜県各務原市
213 1991	平成2年農業生産經營整備事業実施報告書(市教委)	野瀬通路	岐阜県各務原市
214 1991	上野通跡(市道開拓記念碑発掘調査報告書文書-1(県教委))	東桃源通路	三重県伊賀市野村町
215 1991	近畿自動車道(久居-一勢和田)市民文化財見聞調査報告書3分冊(県教委)	金剛通、後川通路	三重県伊賀市
216 1991	千葉県福井県滋賀県近畿自動車道(県教委)	千僧通道路	志賀島町近江八幡市
217 1991	大津道路(県理文)	馬頭通路	志賀島町櫛橋
218 1991	市野瀬神社跡(市教委)	五条、南山通路	滋賀県草津市
219 1991	市野瀬神社跡(市教委)	大矢通路	滋賀県草津市
220 1991	市野瀬神社跡(市教委)	北御門通路	滋賀県草津市
221 1991	市野瀬神社跡(市教委)	石川二七通路	滋賀県守山市
222 1991	市野瀬神社跡(市教委)	伊勢通路	滋賀県守山市
223 1991	宇山山文化財調査報告書(市教委)	川見通路	滋賀県神崎郡神河町
224 1991	尾山町埋蔵文化財調査報告書第20号(町教委)	黒田通路	滋賀県神崎郡神河町
225 1991	尾山町埋蔵文化財調査報告書第20号(町教委)	野瀬通路	滋賀県神崎郡神河町
226 1991	近江八幡市立郷土資料館開館報告書(市教委)	生糸通路	愛知県名古屋市
227 1991	近江八幡市立郷土資料館開館報告書(市教委)	中山通路	愛知県名古屋市
228 1991	入江川湖西通跡(町教委)	江口通路	滋賀県近江八幡市
229 1991	針江通路、針江通跡(教育委員会)	入江川湖西岸通路	滋賀県近江八幡市
230 1991	野洲川左岸通跡(教育委員会)(町教委)	針江通路	滋賀県近江八幡市
231 1992	食文化道路6~8次巡回調査報告書(山教委)	高瀬通路	滋賀県高島市新野町
232 1992	山中通路(県理文)	山中通路	滋賀県高島市新野町
233 1992	市内道路(市教委)	人吉今古理	愛知県一宮市
234 1992	市内道路(市教委)	鶴見通路	愛知県春日井市
235 1992	藤川通跡(市教委)	若林通路	愛知県名古屋市
236 1992	若食通跡(市教委)	若食通路	愛知県名古屋市
237 1992	一般国道23号中勢通地理文化財見聞調査報告書(市教委)	六太通路	三重県伊勢市
238 1992	伊勢市とその周辺の考古学文化(近畿大学考古研究会)	閉間通路	三重県伊勢市
239 1992	伊勢市とその周辺の考古学文化(近畿大学考古研究会)	高ノ原前通路	三重県伊勢市
240 1992	ヒタチ坂(今・打田通)、阿野坂(今・原根通)	大足通路	三重県伊勢市
241 1992	近畿自動車道(伊勢)、伊勢自動車道(伊勢)	西段通路	三重県伊勢市阿室町
242 1992	伊勢市とその周辺の考古学文化(近畿大学考古研究会)	十丁堀通、八通路	三重県伊勢市阿室町
243 1992	伊勢市とその周辺の考古学文化(近畿大学考古研究会)	松原通路	三重県伊勢市小堀町
244 1992	伊勢市とその周辺の考古学文化(近畿大学考古研究会)	羽田通路	三重県伊勢市小堀町
245 1992	吉川流域(今・通字)、(宝字)字考(字考)	小杜通路	三重県度会郡玉城町
246 1992	伊勢市とその周辺の考古学文化(近畿大学考古研究会)	小杜通路	三重県度会郡玉城町
247 1992	伊勢市とその周辺の考古学文化(近畿大学考古研究会)	黒櫻通路	滋賀県近江八幡市
248 1992	伊勢市とその周辺の考古学文化(近畿大学考古研究会)	鳴田通路	滋賀県近江八幡市
249 1992	伊勢市とその周辺の考古学文化(近畿大学考古研究会)	鳴田通路	滋賀県近江八幡市
250 1992	加田川通跡(市教委)	出田通路	滋賀県近江八幡市
251 1992	針江通路、針江川通跡(1)(市教委)	[針江]北通路、[針江]北通跡(1)	滋賀県高島市新野町
252 1993	尾崎通跡(柏原市)	西之庄通道路	愛知県名古屋市
253 1993	西之庄通道路(市教委)	法海通路	愛知県名古屋市
254 1993	法海通路(市教委)	愛須通路	愛知県名古屋市
255 1993	河内通路(市教委)	愛須通路	愛知県名古屋市
256 1993	尾崎通跡(市教委)	尾崎通路	岐阜県本巣市
257 1993	松山通、森山通、支那通(市教委)	大田通路	三重県津市
258 1993	奥田通路、田原通(市教委)	奥田通路	三重県津市
259 1993	小芝通跡(市教委)	小芝通路	三重県津市
260 1993	南庭通跡(市教委)	南庭通路	滋賀県近江八幡市
261 1993	市野瀬通跡(市教委)	大東通路	滋賀県近江八幡市
262 1993	市野瀬通跡(市教委)	大木通路	滋賀県近江八幡市
263 1993	市野瀬通跡(市教委)	今持通路	滋賀県近江八幡市
264 1993	近江八幡文化調査報告書第16集(市教委)	今持通路	滋賀県近江八幡市
265 1993	針江北通(1)・針江北通跡(市教委)	[針江]北通路、[針江]北通跡	滋賀県高島市新野町
266 1993	針江北通(1)・針江北通跡(市教委)	吉武通路	滋賀県高島市新野町
267 1993	中勢文化調査報告書(市教委)	本郷通路	滋賀県近江八幡市
268 1993	能登野通跡(市教委)	千西湖路	滋賀県近江八幡市
269 1993	能登野通跡(市教委)	千西湖路	滋賀県近江八幡市
270 1993	月廣通(今・通字)、(宝字)字考(字考)	松原通路	滋賀県近江八幡市
271 1994	松原通(通字)	松原通路	滋賀県近江八幡市
272 1994	境之内花ノ木通(原理文)	境之内花ノ木通	愛知県西尾市
273 1994	両川通路V(原理文)	明日通路	愛知県西尾市井伊郡清洲町
274 1994	岡馬通跡(市教委)	岡馬通路	愛知県西尾市
275 1994	市内道路(市教委)	尾川内通路	愛知県西尾市
276 1994	大矢通路(市教委)	今宿通路	岐阜県大垣市
277 1994	川合通跡(市教委)	古之通路	岐阜県大垣市
278 1994	伊勢市通跡(市教委)	馬之通路	岐阜県大垣市
279 1994	船岡山古墳群(今・地名)点認調査報告書(市教委)	船之古跡群	岐阜県本巣郡御器所町
280 1994	一ノ国通(1)中勢通地理文化財見聞調査概要(原理文)	船之古跡群	岐阜県本巣郡御器所町
281 1994	山城通路、北湖古通路(原理文)	山城通路	三重県龜山市
282 1994	穴ノ通跡(見聞調査報告書1)(県教委)	穴ノ通路	三重県龜山市
283 1994	穴ノ通跡(見聞調査報告書1)(県教委)	大矢通路	三重県龜山市
284 1994	穴ノ通跡(見聞調査報告書1)(県教委)	御器所通路	岐阜県大垣市
285 1994	穴ノ通跡(見聞調査報告書1)(県教委)	御器所通路	岐阜県大垣市
286 1994	近江八幡市立郷土資料館開設式典(市教委)	御器所通路	岐阜県大垣市
287 1994	近江八幡市立郷土資料館開設式典(市教委)	御器所通路	岐阜県大垣市
288 1994	御器所通路(市教委)	御器所通路	岐阜県大垣市
289 1994	大津市立郷土資料館開設式典(市教委)	曾根八千町通路	岐阜県大垣市
290 1995	近江八幡市立郷土資料館開設式典(市教委)	六太九通路	三重県津市
291 1995	近江八幡市立郷土資料館開設式典(市教委)	尾之内通路	滋賀県長浜市

---

# **別 表**

---

**遺物一覽**  
**遺構一覽**

## 出土遺物一覧表

※「器高」の( )内は残存部分の値

※「口径」、「底径」の( )内は残存部分から推定した値

### I期 弥生時代中期の土器

番号	調査区/遺構	器種	器高	口径	底径	備考	番号	調査区/遺構	器種	器高	口径	底径	備考
E-400	A SK22	深鉢	(10.2)	-	-	貝田町 条痕	E-402	A SK22	深鉢	-	-	-	貝田町 条痕
E-401	A SK22	深鉢	-	-	-	貝田町 条痕	E-403	A SK22	深鉢	-	-	-	貝田町 条痕

### II期 古墳時代初頭の土器

番号	調査区/遺構	器種	器高	口径	底径	備考	番号	調査区/遺構	器種	器高	口径	底径	備考
E-1	A SD05	深C2	(2.0)	(13.0)	-		E-15	A SK19	高円A2	(6.2)	(20.6)	-	
E-2	A SD05	深C2	(6.4)	(14.2)	-		E-16	A SK19	深B1	(6.8)	(21.2)	-	
E-3	A SD05	深C2	(3.6)	(17.4)	-		E-17	A SK19	高円A1	(9.1)	(16.6)	-	
E-4	A SD05	深C2	(4.3)	14.8	-		E-18	A SK19	高円A3	(3.5)	(24.0)	-	
E-5	A SD05	深C2	(4.4)	(12.6)	-		E-19	A SK19	豊古B1	9.3	(8.0)	9.4	外米系
E-6	A SD05	深C2	(4.6)	15.0	-		E-20	A SK19	深	6.6	(9.4)	-	
E-7	A SD05	深C2	(7.4)	17.4	9.8		E-21	A SK19	手づくね	3.3	8.0	4.0	
E-8	A SD05	深C2	(6.1)	12.5	-		E-22	A SK19	B	5.9	(9.5)	-	
E-9	A SD05	深C2	(7.0)	12.0	-		E-23	A SK24	深C2	(5.5)	(11.6)	-	
E-10	A SD05	深C2	-	15.6	9.0		E-24	A SK24	深C1	(2.6)	(19.0)	-	
E-11	A SD05	深B2	(3.6)	(19.5)	-		E-25	A SK24	深C2	(4.2)	(16.6)	-	
E-12	A SD05	豊古B2	(3.6)	9.4	-		E-26	A SK24	豊A2	(28.5)	(20.7)	-	
E-13	A SD05	高坪?	(3.4)	(15.0)	-	外米系	E-27	A SK24	深	(6.9)	-	1.9	
E-14	A SD05	高坪B	(16.1)	(13.2)	-		E-28	A SK24	深C	(9.0)	-	7.8	
E-15	A SD05	深B2	4.1	(8.3)	-		E-29	A SK24	高坪B	(7.8)	(12.2)	-	
E-16	A SD05	深B3	26.0	15.5	5.0		E-30	A SK24	高坪A3	(5.0)	-	-	
E-17	A SD19	高円A1	(7.5)	(23.0)	-		E-31	A SK27	深C1	5.1	(14.2)	-	
E-18	A SD19	高坪A3	(3.4)	-	(15.1)		E-32	A SK27	深C1	(3.8)	(15.4)	-	
E-19	A SD25	深	(6.7)	(12.0)	-	外米系	E-33	A SK27	深C1	(4.1)	(17.2)	-	
E-20	A SD25	深C2	(5.8)	(15.0)	-		E-34	A SK27	豊A4	(4.5)	(12.8)	-	
E-21	A SD27	高坪A1	(9.6)	29.8	-		E-35	A SK27	豊A	(2.8)	(18.0)	-	
E-22	A SD27	高坪B	(3.4)	-	15.1		E-36	A SK27	豊B	(7.7)	(16.2)	-	
E-23	A SD27	高坪A1	(9.6)	-			E-37	A SK27	豊A1	(6.2)	(19.0)	-	
E-24	A SD27	豊A	(3.3)	-	8.0		E-38	A SK27	高坪A3	(7.6)	-	-	
E-25	A SD27	豊A	-	-	-		E-39	A SK27	高坪A2	(6.5)	(20.6)	-	
E-26	A SD36	深C	(7.9)	-	-		E-40	A SK27	高坪A1	(4.2)	-	-	
E-27	A SK14	深C	(5.7)	-	8.2	台部のみ	E-41	A SK27	高坪A1	(8.6)	14.6	-	
E-28	A SK16	深C3	(3.1)	11.6	-		E-42	A SK27	高坪A2	(10.6)	23.2	-	
E-29	A SK16	深C2	(3.0)	(17.0)	-		E-43	A SK27	高坪A1	(5.1)	-	-	
E-30	A SK16	深C2	(6.8)	(21.5)	-		E-44	A SK27	高坪	(6.4)	(20.2)	-	外米系
E-31	A SK16	深C2	(19.8)	(17.0)	-		E-45	A SK27	高坪A3	-	-	-	
E-32	A SK16	高坪A1	11.7	(29.2)	-		E-46	A SK27	高坪A3	-	-	-	
E-33	A SK16	高坪A1	10.1	-	15.2	E-32と同一?	E-47	A SK27	深B	-	-	-	貝田町 条痕
E-34	A SK16	豊A2	(4.1)	16.2	-		E-48	A SK27	深	(4.2)	-	7.5	台部のみ
E-35	A SK16	豊A	(3.5)	(17.0)	-		E-49	A SK27	豊台A	(5.1)	-	-	
E-36	A SK16	深	(4.3)	-	6.4		E-50	A SK27	深	3.0	-	6.6	
E-37	A SK16	豊B2	(8.6)	(16.2)	-		E-51	A SK27	金B	(12.0)	-	6.2	
E-38	A SK16最下	豊A3	(12.3)	(17.0)	-		E-52	A SK28	深C	(20.4)	(15.5)	-	
E-39	A SK16最下	豊A3	(5.0)	(15.0)	-		E-53	A SK33	深B	(4.8)	(18.0)	-	
E-40	A SK16最下	豊B1	(3.8)	(17.0)	-		E-54	A SK34	深C3	(2.2)	(20.6)	-	
E-41	A SK16	豊B2	(4.0)	(18.0)	-		E-55	A SK34	深C3	(5.4)	(14.6)	-	
E-42	A SK16	豊A4	(5.6)	(19.0)	-		E-56	A SK34	深D	(2.1)	(19.0)	-	
E-43	A SK16	深	(8.6)	-	(8.4)	台部のみ	E-57	A SK34	高坪A3	(7.0)	(27.0)	-	
E-44	A SK16	深	(4.5)	-	8.6	台部のみ	E-58	A SK46	深?	(7.1)	-	(16.2)	
E-45	A SK16	豊A1	(9.8)	16.4	-		E-59	A SK46	深C1	(4.1)	(16.9)	-	
E-46	A SK16	高坪	(7.6)	-	-		E-60	A SK46	豊A	(24.6)	-	9.5	
E-47	A SK16	手縫	-	-	-		E-61	A SK48	深	(3.6)	-	6.2	
E-48	A SK19	深C3	(3.4)	(21.2)	-		E-62	A SK48	高坪A1	(9.8)	-	14.8	
E-49	A SK19	深C2	(9.5)	(11.0)	-		E-63	A SK49	深C	(2.6)	(14.6)	-	
E-50	A SK19下層	豊B2	(8.4)	12.8	-		E-64	A SK49	高坪	(5.9)	-	7.6	
E-51	A SK19	豊A2	(6.0)	(19.2)	-		E-65	A SK49	高坪A1	(4.8)	-	14.8	
E-52	A SK19	豊A	-	-	-		E-66	A SK50	豊C2	(8.8)	(14.0)	-	
E-53	A SK19	豊C2	(7.7)	(8.0)	-		E-67	A SK50	豊C1	(7.8)	(20.0)	-	
E-54	A SK19	豊B4	52.6	(19.4)	16.0		E-68	A SK50	豊B2	(6.4)	(24.0)	-	

番号	調査区/道構	cm			備考
		基種	基高	口徑	
E-369	A SK35	基C1	(20.2)	(15.5)	-
E-110	A SK35	高坪A3	-	-	-
E-111	A SK35	高坪A1	(8.0)	-	(14.0)
E-112	A SK35	林B3	6.0	11.4	4.0
E-112	A SK35	基A	-	-	-
E-114	A SK35	基C1	(4.0)	(16.2)	-
E-115	A SK35	基C2	(3.1)	(18.4)	-
E-116	A SK35	基C2	(4.4)	(17.0)	-
E-117	A SK35	基C2	(4.0)	(18.0)	-
E-118	A SK35	基C2	(4.0)	(21.0)	-
E-119	A SK35	基C2	(3.0)	(12.0)	-
E-120	A SK35	基C1	(10.0)	(16.0)	-
E-121	A SK35	基C	(6.0)	-	10.4 台部のみ
E-122	A SK35	基B2	(2.3)	(18.0)	-
E-123	A SK35	東B1	(5.0)	(14.2)	-
E-124	A SK35	基C1	(9.0)	(11.0)	-
E-125	A SK35	基A7	17.0	(17.0)	-
E-126	A SK35	基B4	(6.5)	(14.0)	-
E-127	A SK35	基A2	(5.0)	(17.4)	-
E-128	A SK35	高坪A3	(5.2)	(18.4)	-
E-129	A SK35	高坪C	(5.5)	(10.0)	-
E-130	A SK35	高坪A1	(7.0)	-	-
E-131	A SK35	基台A1	(5.7)	-	-
E-132	A SK35	高坪A3	(6.0)	24.5	-
E-133	A SK35	高坪A1	(10.0)	-	-
E-134	A SK35	高坪A3	-	-	-
E-135	A SK35	基C3	7.5	7.4	2.1
E-136	A SK35	基A	-	-	-
E-137	A SK35	深沢	-	-	貝田町 東側
E-138	A SK35	深沢	-	-	貝田町 東側
E-139	A SK35	基	-	-	私場
E-140	A SK35, 58	細頭葉	(13.0)	-	貝田町 東側
E-141	A SK35	基C1	(2.0)	(11.0)	-
E-142	A SK35	基C2	(4.0)	(12.0)	-
E-143	A SK35	基C2	(3.5)	(13.0)	-
E-144	A SK35	基C2	(3.2)	(15.0)	-
E-145	A SK35	基C3	(4.0)	(16.2)	-
E-146	A SK35	基C1	(4.0)	(18.0)	-
E-147	A SK35	基C2	(5.0)	(16.0)	-
E-148	A SK35	基C2	(4.2)	(22.0)	-
E-149	A SK35	基C2	(7.0)	(19.0)	-
E-150	A SK35	基C1	(3.0)	(13.0)	-
E-151	A SK35	基C3	(3.0)	(12.0)	-
E-152	A SK35	基C2	(4.5)	(13.0)	-
E-153	A SK35	基C2	(3.7)	(15.0)	-
E-154	A SK35	基C1	(5.4)	(14.0)	-
E-155	A SK35	基C2	(5.0)	(15.0)	-
E-156	A SK35	基C2	(5.0)	(16.2)	-
E-157	A SK35	基	(5.7)	-	(4.8)
E-158	A SK35	高坪A2	(6.0)	(20.0)	-
E-159	A SK35	高坪A1	(11.0)	-	(6.0)
E-160	A SK35	高坪A1	8.0	-	12.7
E-161	A SK35	高坪A1	(8.0)	-	-
E-162	A SK35	高坪A1	(9.0)	-	(16.0)
E-163	A SK35	高坪C	(4.0)	(11.0)	(6.0)
E-164	A SK35	基台B2	9.7	7.9	(8.4)
E-165	A SK35	基B2	(5.0)	(18.0)	-
E-166	A SK35	基	(8.2)	-	5.6
E-167	A SK35	基A	-	-	-
E-168	A SK35	基A2	(4.3)	(17.2)	-
E-169	A SK35	基A2	(5.0)	(16.7)	-
E-170	A SK35	基A1	(3.0)	(14.0)	-
E-171	A SK35	基A	-	-	-
E-172	A SK35	基	-	-	-
番号	調査区/道構	cm			備考
		基種	基高	口徑	
E-173	A SK35	基B3	(5.5)	(13.4)	-
E-174	A SK35	基C	(6.0)	(13.0)	-
E-175	A SK35	細頭葉	-	-	貝田町 東側
E-176	A SK35	高坪	-	-	-
E-177	A SD34	基A3	(9.0)	(19.0)	-
E-178	A SD34	基A3	(5.0)	22.1	-
E-179	A SD34	基	(14.0)	-	5.3
E-180	A SD37	基C3	(9.0)	(16.0)	-
E-181	A SD37	基	(3.0)	-	-
E-182	A SD38下層	基C2	(8.0)	10.3	-
E-183	A SD38	高坪A3	(7.7)	24.6	-
E-184	A SD44	高坪	(7.7)	-	-
E-185	A SD64	基台A1	(7.0)	-	-
E-186	A SK55	基台B1	(3.1)	(8.0)	-
E-187	A SK55	基A1	21.5	14.6	8.0
E-188	A SK55	基A	(11.0)	-	(7.4)
E-189	A SK55	基C	(5.0)	-	9.0 台部のみ
E-190	A SK55	基C	(8.0)	-	(10.1) 台部のみ
E-191	A SK59	基C1	(5.0)	(18.2)	-
E-192	A SK59	基C1	(3.0)	(20.2)	-
E-193	A SK59	基A3	(13.0)	(18.0)	-
E-194	A SK59	基A3	(9.0)	(22.0)	-
E-195	A SK59	基	(3.0)	-	(3.0) 低部穿孔4+死ぬ
E-196	A SK59	基B1	11.2	(8.0)	3.0
E-197	A SK59	基B2	(6.4)	(15.0)	-
E-198	A SK59	基	(5.0)	-	8.2 台部のみ
E-199	A SK59	基	-	-	-
E-200	A SK59	高坪A1	(7.0)	-	-
E-201	A SK59	高坪	(9.0)	-	-
E-202	A SK56	基台A1	(7.0)	-	-
E-203	A SK59	基台A1	(10.0)	(16.0)	-
E-204	A SK59	基台A1	(10.0)	(17.5)	-
E-205	A SK59	高坪A1	(10.0)	(20.0)	-
E-206	A SK58	高坪A3	(5.0)	22.2	-
E-207	A SK39	基A3	(7.2)	(20.4)	-
E-208	B SD101底層	高坪A1	(11.0)	(24.2)	-
E-209	B SD80, 91	高坪A1	(7.0)	(24.0)	-
E-210	B SD80, 91	高坪A1	(11.0)	-	16.0
E-211	B SD91	高坪A1	(6.4)	-	(15.0)
E-212	B SD91	基台A1	(6.4)	-	-
E-213	B SD91	基C1	(3.0)	(18.2)	-
E-214	B SD91	手づつ	(2.0)	-	(2.4)
E-215	B SD80, 91	基	(5.0)	2.0	2.5
E-216	B SD91	基B2	8.0	(11.0)	4.0
E-217	B SD91	基A	-	-	-
E-218	B SD91	基A	-	-	-
E-219	B SD91	基A	-	-	-
E-220	B SD102	基D	(4.0)	24.6	-
E-221	B SD103	基B2	(11.0)	(16.0)	-
E-222	B SD103	基A1	(5.0)	(16.4)	-
E-223	B SD103	基C2	(7.7)	(8.6)	-
E-224	B SD103	基	(4.0)	-	(3.0) 台部のみ
E-225	B SK103	基A	-	-	-
E-226	B SK103	高坪A3	(7.0)	(24.2)	-
E-227	B SK103	高坪A1	(4.0)	-	-
E-228	B SK103	基台B4	(6.0)	(9.0)	-
E-229	B SK103	基B2	7.0	(6.4)	(4.5)
E-230	B SK104	基B1	(9.0)	15.7	-
E-231	B SK104	基	(8.0)	-	7.6
E-232	B SK104	基A4	(10.0)	(19.2)	-
E-233	B SK121	高坪	7.7	-	13.0
E-234	B SK149	基A3	(5.0)	(21.0)	-
E-235	B SK149	基	(5.0)	-	9.6 台部のみ

番号	調査区/遺構	基種	OB			参考
			基高	口徑	底径	
E-236	B SK126	基C1	(12.0)	(19.9)	—	
E-237	B SK126	高坪C	(8.5)	(15.2)	—	
E-238	B SK126	基B3	(12.0)	(11.6)	—	
E-239	B SK174	基A2	24.6	17.7	7.6	
E-240	B SK174	基	(4.7)	—	8.5	台部のみ
E-241	B SK184	基B1	(3.6)	(10.4)	—	
E-242	B SK201	基B1	(12.1)	13.6	—	
E-243	B SK202	基A1	(8.0)	(10.2)	—	
E-244	B SK202	高坪?	(7.0)	—	—	外米系?
E-245	B SK202	高坪A3	(5.6)	(28.2)	—	
E-246	B SK202	高坪A1	(9.3)	(27.2)	—	
E-247	B SK202	高坪	(3.9)	—	—	
E-248	B SK202	基A	—	—	—	
E-249	B SK202	基A1	5.4	21.2	—	
E-250	C SD10上層	高坪A1	—	17.0	12.6	
E-251	C SD10上層	高坪A1	(7.2)	—	(12.6)	
E-252	C SD10上層	高坪A1	15.1	18.4	11.4	
E-253	C SD10上層	高坪B	11.0	12.2	15.2	
E-254	C SD10上層	高坪B	(4.5)	—	(15.2)	
E-255	C SD10上層	高坪	(6.4)	—	—	
E-256	C SD10上層	基台A2	11.4	(15.6)	(12.2)	
E-257	C SD10上層	基C2	(14.9)	11.0	—	
E-258	C SD10上層	基C1	(18.4)	(16.5)	—	
E-259	C SD10上層	基C2	(12.3)	(16.8)	—	
E-260	C SD10上層	基B2	7.7	(9.2)	4.5	
E-261	C SD10	基B2	7.6	(7.8)	(3.0)	
E-262	C SD10上層	基B1	4.5	5.6	3.2	
E-263	C SD10下部	基B1	5.8	11.6	4.8	
E-264	C SD10上層	基A3	(19.0)	(20.0)	—	
E-265	C SD10上層	基E	(9.0)	20.8	—	
E-266	C SD10上層	基B	(5.0)	(21.0)	—	
E-267	C SD10	基	(2.7)	—	(4.0)	底部穿孔Jヶ 焼成窯
E-268	C SD10	基C	(9.0)	—	(3.4)	
E-269	C SD10	基C	(14.0)	—	5.0	
E-270	C SD10上層	基C2	15.0	(9.4)	1.6	
E-271	C SD10	高坪A1	(9.7)	(18.3)	—	
E-272	C SD10	基B2	(25.0)	(14.0)	(8.0)	
E-273	C SD10上層	基B2	(4.2)	(15.0)	—	
E-274	C SD10上層	高坪C	(11.7)	13.1	—	
E-275	C SD10上層	基	(5.1)	—	(7.4)	台部のみ
E-276	C SD10	基C1	(7.3)	(15.4)	—	
E-277	C SD10上層	基	—	—	(7.8)	
E-278	D SD10	基B2	7.6	11.0	4.7	
E-279	D SD10	基B2	12.5	(8.7)	3.8	
E-280	D SD10	基B3	(11.2)	(11.4)	—	
E-281	D SD10	基C1	(3.0)	(16.0)	—	
E-282	D SD10	高坪A3	(5.0)	(12.4)	—	
E-283	D SD10	高坪B	(9.7)	12.1	—	
E-284	D SD10	基台?	(3.0)	—	—	外米系?
E-285	D SD10	高坪A3	(7.2)	—	—	
E-286	D SD10上層	基A4	9.3	(14.0)	—	
E-287	D SD10	基C1	(17.3)	(16.2)	—	
E-288	C SD67	基B1	(3.0)	(15.0)	—	
E-289	C SK174	高坪A1	7.5	—	12.0	
E-290	C SK174	基B3	(8.2)	(15.7)	—	
E-291	D SD03	基C1	(4.0)	(16.0)	—	
E-292	D SD09	基台	(6.0)	—	—	
E-293	D SD15	基C2	(17.0)	(14.0)	—	
E-294	D SD15	基C2	(8.4)	(9.2)	—	
E-295	D SD15	基C3	(24.0)	(15.0)	—	
E-296	D SD16	基C	—	—	8.7	
E-297	D SD18	基A	(8.2)	—	—	
E-298	D SD20	高坪A1	(9.7)	—	(12.0)	
番号						
調査区/遺構						
番号	調査区/遺構	基種	基高	口徑	底径	参考
E-299	D SD01	基C2	(4.0)	(14.0)	—	
E-300	D SD01	基A2	(4.4)	(18.0)	—	
E-301	C SD07	基C2	(7.3)	(14.6)	—	
E-302	C SD07上層	基C4	(5.0)	(29.4)	—	
E-303	C SD07	基B2	—	(18.0)	4.5	
E-304	C SD07上層	基B2	(20.7)	(16.5)	—	
E-305	C SD07	基C	(16.1)	—	(9.2)	台部のみ
E-306	C SD07下層	基	(5.4)	—	6.8	台部のみ
E-307	C SD07下層	基B3	8.6	9.4	3.6	
E-308	C SD07上層	基	7.4	7.5	5.2	
E-309	C SD07上層	基B1	8.2	8.6	3.0	
E-310	C SD07	基C2	16.2	9.6	4.0	
E-311	C SD07下層	基A1	(7.1)	16.0	—	
E-312	C SD07上層	基D	(7.9)	(23.2)	—	
E-313	C SD07	基B1	(16.4)	(12.0)	—	
E-314	C SD07	基B2	(11.2)	(16.0)	—	
E-315	C SD07	基A	(6.5)	—	—	
E-316	C SD07	基?	3.8	—	—	外米系?
E-317	C SD07下層	高坪	(4.9)	—	—	
E-318	C SD07	高坪A1	16.9	(27.2)	—	
E-319	C SD07上層	基古B2	(2.5)	—	(8.5)	
E-320	C SD07	手筋	—	—	—	
E-321	C SD07	基	—	—	—	
E-322	C SD07上層	基	—	—	—	銅部片
E-323	C SD07上層	基	—	—	—	銅部片
E-324	C SD07	基	—	—	—	銅部片
E-325	D SK01	基C2	(9.0)	14.8	—	
E-326	D SK01	基C1	(29.0)	(17.0)	(8.0)	
E-327	D SK01	基B2	(4.2)	17.2	—	
E-328	D SK01	基B	14.7	9.8	4.9	
E-329	D SK02	基C	(6.2)	—	7.0	台部のみ
E-330	D SD05	高坪A3	(6.2)	(20.0)	—	
E-331	D SD03	基B3	(7.8)	(23.4)	—	
E-332	D SK16	基D	(4.0)	(7.5)	—	
E-333	D SK16	基C2	(4.4)	(14.4)	—	
E-334	D SK16	基C3	(6.0)	(19.2)	—	
E-335	D SK16	基B2	(3.9)	(15.6)	—	
E-336	D SK16	基A2	(4.1)	(18.0)	—	
E-337	D SK16	基A2	(3.2)	(19.6)	—	
E-338	D SK16	基A	—	—	—	
E-339	D SK16	高坪	—	—	—	
E-340	D SK16	高坪A1	(6.2)	(27.4)	—	
E-341	D SK16	基台	(5.1)	—	—	
E-342	D SK16	基古C	(4.6)	—	—	
E-343	D SK16	基台	(3.7)	(14.4)	—	外米系
E-344	D SK16	基古B	(5.3)	—	(14.0)	E-343と同一
E-345	D SK16	基?	(3.0)	—	—	
E-346	D SK21	基	(7.7)	—	7.3	台部のみ
E-347	D SK25	基A1	14.2	12.6	7.0	
E-348	D SK22	基B5	8.7	14.4	5.0	
E-349	D SK22	基C2	(11.0)	15.2	—	
E-350	D SK25	基A1	(9.0)	12.6	—	
E-351	D SK26	基	(7.1)	—	(17.0)	台部のみ
E-352	D SK25	基	(11.0)	—	(10.0)	台部のみ
E-353	D SK26	基B2	(3.0)	(11.6)	—	
E-354	D SK26	基B2	12.4	(19.0)	4.8	
E-355	D SK26	基	(10.8)	—	4.4	
E-356	D SK25	基A	(15.0)	—	15.0	
E-357	D SK26	基C	6.0	—	—	
E-358	D SK26	基C	(10.0)	—	2.5	
E-359	D SK26	高坪B	(6.1)	15.4	—	
E-360	D SK26	高坪A1	12.0	—	G18.00	
E-361	D SK28	基B3	(6.0)	(18.0)	—	

番号	調査区/遺構	cm			備考
		基種	基高	口径	
E-362	D SK28	窓A1	26.4	18.0	-
E-363	D SK28	窓A1	(3.6)	(19.6)	-
E-364	D SK28	窓A	(10.9)	-	-
E-365	D SK29	窓A1	(7.9)	(16.5)	-
E-366	D SK29	窓C2	(13.3)	-	-
E-367	D SK29	窓C1	(6.3)	15.0	-
E-368	D SK29	窓A	(15.7)	-	-
E-369	D SK29	窓B2	18.0	11.4	-
E-370	D SK29	窓A1	13.1	17.6	12.1
E-371	D SK38	窓	(12.0)	-	8.8 窓(押掌孔)裏 焼成灰
E-372	D SK39	窓C2	(3.9)	(16.2)	-
E-373	D SK40	窓C2	(21.7)	15.2	-
E-374	D SK41	窓	4.5	9.0	11.0
E-375	D SK41	窓C1	(2.2)	(15.0)	-
E-376	D SK41	窓C2	12.5	(19.0)	6.0
E-377	D SK41	窓A2	(4.4)	(20.0)	-
E-378	D SK41	高坪A3	(5.4)	(23.0)	-
E-379	D SK41	高坪A3	(6.4)	(23.0)	-
E-380	A 棲出II	テヅくね	(3.1)	5.0	-

### III期 古代の遺物

番号	調査区/遺構	cm			備考
		基種/分類	基高	口径	
E-404	D SDE5	窓底 窓身	3.5	(11.4)	7.2 美濃焼窓
E-405	D SDE5	窓底 窓身	3.6	10.3	7.2 美濃焼窓
E-406	C 東レレンタ	窓底 窓身	3.4	11.6	8.4 美濃焼窓
E-407	D 棲出I	窓底 窓身	2.6	13.5	9.2 美濃焼窓
E-408	D SDU1	窓底 窓身	4.4	14.4	9.9 美濃焼窓
E-409	C SD85	窓底 窓身	4.2	11.8	- スズ付窓
E-410	C 棲出II	窓底 窓身	3.6	11.6	- 美濃焼窓,スズ付窓
E-411	C 棲出II	窓底 窓身	3.7	10.2	- 美濃焼窓
E-412	C 棲出II	窓底 窓身	4.0	12.8	- 美濃焼窓,スズ付窓
E-413	C 棲出II	窓底 窓身	(3.9)	(12.0)	- 美濃焼窓,2.5付窓
E-414	C SD85	窓底 窓身	3.1	10.8	6.0 美濃焼窓,2.5付窓
E-415	C 棲出II	窓底 窓身	3.7	9.6	-
E-416	C 棲出II	窓底 窓身	(3.0)	(9.5)	- 美濃焼窓,2.5付窓
E-417	C 棲出II	窓底 窓身	2.6	10.4	(4.8) 美濃焼窓,2.5付窓
E-418	D SDE5	窓底 窓身	(4.0)	(19.4)	- 美濃焼窓
E-419	E SK01	窓底 窓身	(2.2)	-	(11.0) 美濃焼窓
E-420	D SDE5	窓底 窓身	(1.9)	(25.2)	- ?

番号	調査区/遺構	cm			備考
		基種	基高	口径	
E-361	A 棲出II	窓B3	(7.7)	(12.4)	-
E-362	A 棲出II	窓B1	(6.4)	(14.0)	-
E-364	A 棲出II	窓A2	(7.5)	(17.6)	-
E-385	A 棲出II	窓B3	(8.4)	(17.6)	-
E-386	A 棲出II	窓A3	(5.3)	(20.8)	-
E-387	A 棲出I	窓A3	-	-	-
E-388	A 棲出I	窓A3	-	-	-
E-389	A 基トレンチ	窓	-	-	-
E-390	A 棲出II	窓	-	-	-
E-391	C 棲出II	窓	-	-	瓦
E-392	C 棲出I	窓	-	-	-
E-393	C 棲出II	窓E?	(4.3)	-	-
E-394	D 棲出II	窓C	(6.3)	-	(4.0)
E-395	E 棲出II	窓	-	-	削利窓あり
E-396	E 棲出I	窓	-	-	タタキ目あり
E-397	D 棲出I	窓	-	-	削利窓あり
E-398	D 棲出I	器台B3	(6.9)	-	-
E-399	D 棲出I	窓C4	(3.9)	(20.2)	-

### IV期 中世の遺物

番号	調査区/遺構	cm			備考
		基種/分類	基高	口径	
E-421	D SD25	窓底 窓身	(2.2)	(16.4)	- 美濃焼窓
E-422	C SD91	窓底 窓身	3.5	(15.0)	- 美濃焼窓
E-423	C 棲出II	窓底 窓身	(2.9)	(17.0)	- 美濃焼窓
E-424	C 棲出II	窓底 窓身	(2.7)	(14.2)	- 美濃焼窓
E-425	C SD89	窓底 窓身	(3.1)	(19.2)	-
E-426	C 棲出I	窓底 窓身	(3.1)	(15.5)	- 美濃焼窓
E-427	C SD63	窓底 窓身	(2.6)	(21.6)	- 美濃焼窓
E-428	C SD85	窓底 窓身	(4.9)	(13.6)	-
E-429	E 棲出I	窓底 窓身	(2.1)	-	(1.7)
E-430	D SD25	窓底 窓身	(6.0)	(21.0)	- 美濃焼窓
E-431	D SK28	窓底 窓身	(6.7)	-	- 窓枠
E-432	D 棲出I	窓E?	(6.9)	-	-
E-433	E 棲出II	窓底 窓身	(6.1)	-	- 美濃焼窓?
E-434	A 棲出II	窓底 窓身	(4.3)	-	- 美濃焼窓?
E-435	C SK64	白色釉器	7.9	5.8	8.6 美濃焼窓?
E-436	D SD55	土師質 窓	(2.9)	(22.0)	-

番号	調査区/遺構	cm			備考
		基種/分類	基高	口径	
E-450	E 棲出II	瓦施陶器	2.2	8.4	3.7 北部系
E-451	E 棲出II	瓦施陶器	1.4	8.0	4.0 北部系
E-452	E 棲出II	瓦施陶器	1.5	8.4	3.9 北部系
E-453	E 棲出II	瓦施陶器	1.7	(8.0)	4.2
E-460	E 棲出II	瓦施陶器	1.8	8.1	4.1 北部系
E-461	E 棲出II	瓦施陶器	1.8	8.4	5.2 北部系,スズ付器
E-462	D SD01	瓦施陶器	1.4	7.6	4.5 北部系
E-463	E 棲出II	瓦施陶器	1.8	8.3	4.6 南部系
E-464	E 棲出II	瓦施陶器	1.6	8.5	4.6 南部系
E-465	E 棲出II	土師質 窓	3.5	14.2	-
E-466	E 棲出II	土師質 窓	3.7	12.3	- ロクロ成型
E-467	E 棲出II	土師質 窓	2.7	14.0	-
E-468	E 棲出II	土師質 窓	2.9	(13.0)	-
E-469	E 棲出II	土師質 窓	3.7	(12.0)	-
E-470	E 棲出II	土師質 窓	1.8	(9.0)	- 口縁にスズ付器
E-471	E 棲出II	土師質 窓	1.7	(28.7)	4.0
E-472	E 棲出II	土師質 窓	1.7	(9.3)	-
E-473	E 棲出II	土師質 窓	1.6	8.9	4.9
E-474	E 棲出II	土師質 窓	1.7	(8.0)	-

番号	調査区/通構	基種/分類	基高	口径	底径	備考
E-475	D SD25	土師質 磨	1.9	7.9	-	
E-476	E 檜出日	土師質 磨	1.7	9.0	-	
E-477	E 檜出日	土師質 磨	(1.6)	(8.9)	-	
E-478	E 檜出日	土師質 磨	2.0	8.0	-	
E-479	E 檜出日	土師質 磨	1.9	9.7	-	
E-480	D 檜出日	中国青磁 磨	(3.3)	(14.6)	-	龍泉窯系
E-481	E 檜出日	中国青磁 磨	(3.3)	(17.0)	-	龍泉窯系
E-482	E 檜出日	中国青磁 磨	(5.2)	(15.8)	-	龍泉窯系
E-483	E 檜出日	中国青磁 磨	(1.0)	-	(5.0)	同安窯系

### 墨書きのある遺物

番号	調査区/通構	基種/分類	基高	口径	底径	備考
E-492	C SK05	陶器 舐	11.0	(8.0)	-	美濃窯?
E-493	E 檜出日	陶器陶器 磨	1.9	8.4	4.5	北部系
E-494	E 檜出日	陶器陶器 磨	2.0	8.3	4.2	北部系
E-495	A 檜出日	陶器陶器 磨	2.5	8.2	3.9	北部系
E-496	E 檜出日	陶器陶器 磨	(1.3)	-	3.4	南部系
E-497	E 檜出日	陶器陶器 磨	1.4	(14.2)	4.6	北部系
E-498	E 檜出日	陶器陶器 磨	5.6	14.0	5.5	北部系
E-499	E 檜出日	陶器陶器 磨	(2.5)	-	6.0	北部系
E-500	E 檜出日	陶器陶器 磨	(3.9)	-	5.8	北部系
E-501	E 檜出日	陶器陶器 磨	(3.5)	-	(5.5)	北部系
E-502	E 檜出日	陶器陶器 磨	(3.3)	-	6.0	北部系

### 加工円盤・土鍋ほか

番号	調査区/通構	基種/分類	基高	口径	底径	備考
E-514	A SK18	加工円盤	1.9	0.7	-	?
E-515	C SD07上層	加工円盤	基0.5	厚 1.4	-	?
E-516	C SD07下層	加工円盤	基0.8	厚 0.6	-	高环環部
E-517	A SK36	加工円盤	1.7	0.6	-	?
E-518	C SD07	加工円盤	基0.6	厚 1.0	-	?
E-519	D SK29	加工円盤	基0.3	厚 0.7	-	?
E-520	A 檜出日	加工円盤	基0.5	厚 0.6	-	高环環部
E-521	B SK165	加工円盤	基0.3	厚 0.7	-	?
E-522	C SD07上層	加工円盤	基0.0	厚 0.6	-	高环環部
E-523	E 檜出日	加工円盤	基0.7	厚 1.2	-	高环環部
E-524	B SK165	加工円盤	基0.2	厚 1.0	-	高环環部
E-525	E 檜出日	加工円盤	基0.2	厚 1.1	-	山茶碗
E-526	E 檜出日	加工円盤	基0.1	厚 1.2	-	山茶碗
E-527	D SD01	陶丸	2.0	-	-	
E-528	D SK16	加工土器片	基0.3	幅 1.7	厚 1.0	?
E-529	D SK33	加工土器片	基 3.6	幅 2.4	厚 0.5	高环環部?
E-530	D SK16	加工土器片	基 3.8	幅 2.4	厚 0.5	?
E-531	C SD10上層	加工土器片	基 4.4	幅 1.3	厚 0.8	?
E-532	C SD07下層	加工土器片	基 5.3	幅 2.3	厚 0.6	高环環部?
E-533	B SK193	加工土器片	基 5.5	幅 3.0	厚 0.5	高环環部?
E-534	A 檜出日	土	基 2.9	幅 3.3	厚 26.0	
E-535	A 檜出日	土	基 4.7	幅 2.2	厚 16.5	
E-536	A 檜出日	土	基 4.5	幅 1.8	厚 6.0	
E-537	A 檜出日	土	基 4.8	幅 1.1	厚 16.0	
E-538	A SK99	土	基 12.9	幅 6.0	厚 0.8	
E-539	C 檜出日	土	基 4.5	幅 0.9	厚 2.9	陶瓶?
E-540	E 檜出日	土	基 0.3	幅 0.3	厚 0.1~2.0	
E-541	E 檜出日	土	基 5.3	幅 0.6	厚 0.7	
E-542	D SK36	瓦	基 2.5	幅 2.6	厚 0.7~0.9	赤瓦
E-543	C 檜出日	瓦	基 2.5	幅 2.6	厚 0.1	
E-544	A 檜出日	瓦	基 0.38	幅 2.3	-	

番号	調査区/通構	基種/分類	基高	口径	底径	備考
E-484	A 檜出 I	土財質 細	(2.3)	(27.4)	-	伊勢型
E-485	E SK04	土財質 細	(2.0)	(25.2)	-	伊勢型
E-486	A 東トレンチ	土財質 細	(6.1)	(25.0)	-	
E-487	E 檜出 I	土財質 細	(3.9)	(24.0)	-	
E-488	E SK04	土財質 細	(3.4)	-	(12.0)	
E-489	E 檜出 II	常滑 薄	(5.0)	(35.0)	-	
E-490	E 檜出日	常滑 薄	(20.7)	-	13.4	
E-491	D SD03	瓦	瓦 1.0	幅 4.7	-	-

番号	調査区/通構	基種/分類	基高	口径	底径	備考
E-503	E 檜出日	高輪輪 粗	5.6	15.4	7.2	北部系
E-504	E 檜出日	高輪輪 粗	(1.7)	-	7.0	北部系
E-505	E 檜出日	高輪輪 粗	(3.5)	-	(5.6)	北部系
E-506	E 檜出日	高輪輪 粗	(1.5)	-	5.0	北部系、スズ村着
E-507	E 檜出日	高輪輪 粗	(2.7)	-	4.6	北部系
E-508	A SK02	高輪輪 粗	(2.2)	-	7.5	南部系、スズ村着
E-509	E 檜出日	高輪輪 粗	5.4	(15.2)	6.0	南部系、スズ村着
E-510	E 檜出日	高輪輪 粗	5.3	14.4	7.1	南部系
E-511	E 檜出日	高輪輪 粗	6.3	(14.5)	6.0	南部系
E-512	E 檜出日	高輪輪 粗	(3.0)	-	6.5	南部系
E-513	E 檜出日	高輪輪 粗	(1.0)	-	(7.1)	南部系

### 石製品

番号	調査区/通構	基種	法量A	法量B	法量C	重さ	材質
S-1	B SK040Ⅱ	砾	基 2.5	幅 1.4	厚 0.7	3.1	ホシクルス
S-2	C 檜出日	砾	基 0.3	幅 1.6	厚 0.5	0.9	チャート
S-3	D 檜出日	砾	基 2.6	幅 1.6	厚 0.5	0.9	チャート
S-4	D 檜出日	砾	基 4.0	幅 2.8	厚 0.8	6.4	チャート
S-5	B SK174	砾	基 0.3	幅 1.2	厚 0.5	0.7	黒曜石
S-6	E 檜出日	砾	基 2.1	幅 1.3	厚 0.5	2.8	下石
S-7	B 陶器 1	砾砾	基 14.0	幅 2.3	厚 1.0	8.0	安山岩
S-8	B SD01	打堅界	基 0.9	幅 6.8	厚 2.2	12.0	安山岩
S-9	A SK27	打堅界	基 16.5	幅 7.9	厚 3.3	48.0	砾品片岩
S-10	D SD25	砾石	基 15.9	幅 7.5	厚 4.5	87.3	透閃石板岩
S-11	D SK16	砾石	基 18.0	幅 7.3	厚 4.5	92.3	砂岩
S-12	A SK34	砾石	基 15.7	幅 6.8	厚 4.0	68.0	透閃石板岩
S-13	A SK34	砾石	基 16.0	幅 6.1	厚 3.2	69.5	黒曜石
S-14	E 檜出 II	砾石	基 18.9	幅 15.7	厚 5.1	142.0	安山岩礫岩
S-15	E 檜出 II	砾石	基 0.3	幅 2.7	厚 0.7	0.3	8.1~7.4×0.8
S-16	C SD06	砾石	基 6.1	幅 2.2	厚 1.9	19.0	透閃石板岩
S-17	A SK09	砾石	基 12.3	幅 2.5	厚 2.3	137.1	真岩
S-18	D SD05	砾石	基 5.7	幅 1.8	厚 2.1	22.3	泥岩
S-19	E 檜出 II	砾石	基 6.8	幅 3.7	厚 3.4	123.1	カルカロマス
S-20	E 檜出 II	砾石	基 7.3	幅 2.4	厚 3.5	54.0	凝灰岩
S-21	B SK114	砾石	基 5.9	幅 5.7	厚 3.3	121.8	安山岩
S-22	C SD07	砾石	基 0.39	幅 11.0	厚 0.48	0.6	凝灰岩
S-23	C 檜出 I	砾石	基 6.2	幅 6.0	厚 2.7	68.5	凝灰岩
S-24	A SD010	砾石	基 9.0	幅 5.3	厚 3.5	88.6	凝灰岩
S-25	D SK16	砾石	基 9.0	幅 4.2	厚 3.4	101.3	砂岩

### 木製品

番号	調査区/通構	基種	法量A	法量B	法量C
W-1	C SD010	?	長12.2	幅 1.8	厚 1.3
W-2	A SK58	?	長 48.6	幅 19.0	厚 3.3

## 造構一覧表

A区

番号	長cm	幅cm	深cm	断面形	平面形	備考	番号	長cm	幅cm	深cm	断面形	平面形	備考
P01	57	51	25	U字	内形		SD27	(413)	112	28	■		
P02	33	33	10	U字	内形		SD28	-	39	16	U字	C字に湾曲	
P03	62	57	24	U字	内形		SD29	322	34	10	U字		
P04	45	45	13	U字	内形		SD30	(274)	29	19	U字		
P05	33	21	11	U字	方形		SD31	96	35	9	U字		
P06	60	57	11	U字	内形		SD32-1	120	39	13	U字		
P07	56	40	13	U字	桔円形		SD32-2	134	49	11	U字		
P08	(38)	41	4	U字	桔円形		SD33	205	35	8	U字		
P09	(45)	50	6	■	桔円形		SD34	(582)	274	15	U字		
P10	(55)	39	9	U字	桔円形		SD35	181	58	20	U字		
P11	85	50	25	U字	不定形		SD37	1323	155	18	U字	湾曲	
P12	48	46	9	■	内形		SD38	(800)	94	43	■		
P13	41	38	28	U字	内形		SD39	-	60	8	U字		
P14	34	29	25	U字	内形		SD40	499	89	12	U字		
P15	52	45	18	U字	内形		SD41	(215)	117	16	U字		
P16	29	26	7	U字	内形		SD42	(220)	30	2	U字		
P17	44	32	13	U字	桔円形		SD43	(324)	35	10	U字		
P18	37	(33)	14	U字	内形		SD44	(421)	60	23	U字		
P19	65	50	7	U字	桔円形		SD45	(364)	33	10	U字		
P20	42	39	28	U字	内形		SD46	(570)	36	12	U字		
P21	39	32	28	U字	桔円形		SD47	356	45	19	U字		
P22	25	25	18	U字	内形		SD48	(118)	24	1	U字		
P23	40	30	14	■	桔円形		SD49	(380)	31	12	U字		
P24	40	33	13	U字	桔円形		SD50	(82)	21	8	U字		
P25	42	(37)	23	U字	内形		SD51	(200)	32	?	U字		
P26	35	32	16	U字	内形		SD52	(343)	37	10	U字		
P27	(96)	(22)	(13)	U字	?		SD53	(186)	35	-	U字		
P28	28	26	10	U字	内形		SD54	(702)	54	53	■		
P29	40	36	-	U字	内形		SD55	(87)	56	35	■		
P30	52	45	4	■	桔円形		SD57	(136)	36	10	U字	SD70に統く	
P31	73	38	8	U字	不定形		SD58	(490)	30	10	U字	SD75に統く	
P32	56	44	9	U字	不定形		SD59	(186)	33	7	U字	SD74に統く	
P33	40	35	22	U字	内形		SD60	(67)	30	-	U字		
P34	(37)	(31)	(12)	U字	?		SD61	(263)	39	14	U字		
P35	40	25	10	U字	不定形		SD62	(704)	34	12	U字		
P36	43	(24)	16	U字	内形		SD63	(110)	64	13	U字		
P37	36	30	8	U字	内形		SD65	(711)	59	8	U字		
P38	45	39	23	U字	桔円形		SD66	127	64	17	U字		
P39	70	(26)	1	■	内形		SD67	158	92	71	U字		
P40	44	38	24	U	内形		SD68	(436)	36	16	U字		
P41	35	34	8	U	内形		SD69	(228)	36	16	U字		
SD01	(233)	35	9	U字			SD70	149	42	15	U字	SD67に統く	
SD02	(302)	30	11	U字			SD71	(200)	(54)	-	U字		
SD03	386	64	17	U字			SD72	(136)	30	10	U字		
SD04	469	53	11	U字			SD73	(511)	48	26	U字		
SD05	(506)	(158)	(62)	U字			SD74	(100)	56	18	U字	SD69に統く	
SD06	(312)	50	20	U字			SD75	(689)	43	13	U字	SD68に統く	
SD07	461	53	8	■			SD76	(256)	55	14	U字		
SD08	(191)	72	15	U字			SK01	98	62	15	U字	不定形	
SD09	(328)	30	7	U字			SK02	(116)	62	39	U字	桔円形	
SD10	(961)	194	16	■			SK03	97	85	19	U字	不定形	
SD11	(369)	36	6	U字			SK04	91	41	9	■	不定形	
SD12	527	46	11	U字			SK05	64	43	5	■	桔円形	
SD13	(1102)	50	12	U字			SK06	75	61	23	U字	桔円形	
SD14	(120)	27	?	■			SK07	66	50	15	U字	方形	
SD15	(614)	39	5	U字			SK08	190	90	23	U字	桔円形	
SD16	(316)	30	6	U字			SK09	70	60	14	■	方形	
SD17	(800)	37	7	U字			SK10	64	63	28	U字	内形	
SD18	774	40	9	U字			SK11	63	58	23	■	方形	
SD19	626	70	33	U字		SD08に統く	SK12	82	60	19	U字	内形	
SD20	(490)	69	11	U字		SD09に統く	SK13	55	(289)	7	■	?	
SD21	-	50	9	U字			SK14	326	194	37	■	不定形	
SD22	244	50	9	■	コ字に屈曲		SK15	181	180	57	U字	内形	
SD23	(333)	80	16	U字			SK16	121	109	43	U字	不定形	
SD24	(94)	49	9	U字			SK17	142	109	47	■	不定形	
SD25	-	95	23	U字	屈曲		SK18	160	(100)	70	U字	?	
SD26	(259)	48	9	U字			SK19	244	207	68	U字	桔円形	

番号	長cm	幅cm	厚cm	断面形	平面形	参考
SK20	(87)	38	12	U字	不定形	
SK21	63	61	13	U字	不定形	
SK22	224	181	70	U字	不定形	
SK23	229	214	50	箱	方形	
SK24	157	127	44	U字	不定形	
SK25	(149)	108	5	箱	不定形	
SK26	133	101	8	箱	不定形	
SK27	271	247	79	U字	不定形	
SK28	71	53	30	U字	梢円形	
SK29	160	38	7	U字	不定形	
SK30	180	138	14	箱	方形	
SK31	040	87	12	箱	?	
SK32	(165)	165	12	箱	方形	
SK33	138	117	64	U字	不定形	
SK34	253	263	88	U字	不定形	
SK35	85	65	14	U字	不定形	
SK36	69	45	17	U字	梢円形	
SK37	81	(63)	9	U字	不定形	
SK38	78	53	13	U字	梢円形	
SK39	88	(67)	24	U字	不定形	
SK40	55	46	16	U字	梢円形	
SK41	108	66	23	U字	不定形	
SK42	47	(36)	12	U字	?	
SK43	65	27	14	箱	?	
SK44	120	106	24	U字	不定形	
SK45	181	119	35	U字	梢円形	
SK46	(136)	(63)	24	U字	不定形	
SK47	119	58	(19)	U字	梢円形	
SK48	354	99	25	U字	不定形	
SK49	197	54	27	U字	不定形	
SK50	191	38	14	U字	不定形	
SK51	(153)	78	9	箱	不定形	
SK52	170	145	44	U字	梢円形	
SK53	(89)	(77)	(4)	箱	?	
SK54	236	98	7	箱	不定形	
SK55	283	(164)	76	箱	不定形	
SK56	247	233	87	箱	方形	
SK57	45	42	25	箱	円形	
SK58	398	233	87	U字	不定形	
SK59	886	300	20	箱	不定形	
番号	長cm	幅cm	厚cm	断面形	平面形	参考
SK60	(710)	(323)	(30)	U字	不定形	
SK61	75	62	32	U字	不定形	
SK62	136	83	11	箱	不定形	
SK63	-	93	11	U字	不定形	
SK64	105	70	45	U字	不定形	
SK65	(686)	237	39	U字	不定形	
SK66	97	79	29	U字	不定形	
SK67	102	64	28	U字	不定形	
SK68	(217)	(166)	(20)	U字	不定形	
SK69	83	59	31	U字	不定形	
SK70	(65)	(85)	35	U字	不定形	
SK71	(40)	45	13	U字	?	
SK72	59	57	24	U字	四形	
SK73	46	(38)	-	U字	四形	
SK74	62	53	9	U字	梢円形	
SK75	129	109	26	U字	不定形	
SK77	88	66	31	U字	方形	
SK78	66	(35)	9	U字	不定形	
SK79	94	48	26	U字	不定形	
SK80	(40)	(19)	(20)	U字	?	
SK81	-	232	50	U字	不定形	
SK82	116	(53)	30	U字	不定形	
SK83	110	105	28	U字	方形	
SK84	79	78	31	U字	内形	
SK85	209	132	55	U字	不定形	
SK86	190	144	53	U字	不定形	
SK87	(97)	(47)	18	U字	?	
SK88	130	118	55	U字	不定形	
SK89	102	(65)	17	U字	不定形	
SK90	106	76	40	U字	不定形	
SK91	147	127	43	U字	不定形	
SK92	(140)	74	11	U字	梢円形	
SK93	48	46	15	U字	内形	
SK94	51	36	10	U字	梢円形	
SK95	54	34	27	U字	梢円形	
SK96	29	23	20	U字	梢円形	
SK97	50	50	27	U字	内形	
SK98	(55)	(29)	(21)	U字	?	
SK99	(130)	(45)	(28)	U字	?	
SK100	(80)	(33)	(23)	U字	?	

## 日区

番号	長cm	幅cm	厚cm	断面形	平面形	参考
SD 78	(1274)	(323)	(31)	U字		
SD 79	(1032)	(245)	(150)	U字		=9c/5K60
SD 80	(1526)	54	12	U字		
SD 81	(533)	86	16	箱		
SD 82	(550)	86	14	U字		
SD 83	(535)	81	17	U字		
SD 84	(321)	91	14	U字		
SD 85	(522)	80	18	U字		
SD 86	(539)	85	11	U字		
SD 87	(529)	81	15	U字		
SD 88	(478)	80	14	U字		
SD 89	(647)	87	18	U字		
SD 90	(1490)	41	16	U字		
SD 91	1214	260	33	箱		
SD 92	(379)	42	12	U字		
SD 93	(483)	35	24	U字		
SD 94	(75)	30	6	U字		
SD 95	(120)	36	12	U字		
SD 97	(94)	37	10	U字		
SD 98	(444)	56	12	U字		
SD 99	929	60	11	箱		
SD100	250	36	13	箱		
SD101	(250)	26	8	U字		
SD102	(1172)	45	10	箱		
SK101	213	170	33	U字	梢円形	
SK102	114	72	10	U字	不定形	
SK103	288	132	22	U字	梢円形	
番号	長cm	幅cm	厚cm	断面形	平面形	参考
SK104	(312)	140	33	U字	不定形	
SK105	93	70	12	U字	梢円形	
SK106	69	49	9	U字	梢円形	
SK107	88	87	21	U字	方形	
SK108	113	88	23	U字	不定形	
SK109	121	60	16	箱	梢円形	
SK110	85	43	7	箱	不定形	
SK111	102	70	33	U字	方形	
SK112	165	137	26	U字	梢円形	
SK113	(272)	215	17	箱	不定形	
SK114	155	138	22	U字	梢円形	
SK115	(270)	80	12	U字	不定形	
SK116	63	56	18	U字	内形	
SK117	103	90	46	U字	梢円形	
SK119	153	83	18	U字	不定形	
SK120	55	51	12	U字	内形	
SK121	177	85	29	U字	梢円形	
SK122	77	63	12	U字	梢円形	
SK123	127	30	8	箱	不定形	
SK124	64	42	13	U字	梢円形	
SK125	225	(106)	24	U字	不定形	
SK126	425	336	20	箱	不定形	
SK127	56	41	15	U字	方形	
SK128	(238)	117	20	箱	不定形	
SK129	199	149	12	箱	不定形	
SK130	89	56	15	U字	梢円形	
SK131	150	72	21	箱	不定形	

番号	長cm	幅cm	厚cm	断面形	平面形	備考
SK132	214	60	15	U字	楕円形	
SK133	103	92	30	U字	楕円形	
SK134	82	60	15	U字	楕円形	
SK135	167	91	11	U字	方形	
SK136	87	55	7	箱	楕円形	
SK137	(90)	(51)	(9)	箱	?	
SK138	(232)	166	8	箱	不定形	
SK139	108	91	25	U字	不定形	
SK140	202	64	26	V字	楕円形	
SK141	(103)	168	(5)	?	?	
SK142	37	30	19	U字	楕円形	
SK143	42	36	3	U字	円形	
SK144	261	122	21	U字	方形	
SK145	300	(95)	24	箱	楕円形	
SK146	206	162	15	箱	不定形	
SK147	29	27	16	U字	円形	
SK149	141	(84)	24	U字	不定形	
SK150	65	10	12	U字	不定形	
SK151	52	44	21	U字	円形	
SK152	57	45	27	U字	楕円形	
SK153	137	71	14	箱	不定形	
SK154	116	35	?	?	不定形	
SK155	74	59	37	U字	楕円形	
SK156	60	57	12	箱	円形	
SK157	58	54	15	U字	内形	
SK158	(31)	(20)	(12)	?	楕円形	
SK159	(30)	34	16	U字	?	
SK160	63	46	4	箱	方形	
SK161	66	46	27	U字	楕円形	
SK162	41	49	18	U字	円形	
SK164	58	52	18	U字	円形	
SK165	83	57	29	U字	楕円形	
SK167	45	34	20	U字	楕円形	
SK168	(230)	80	13	箱	不定形	
SK169	456	120	27	箱	不定形	
SK170	89	66	36	U字	楕円形	
SK171	48	47	18	U字	円形	
SK172	150	112	40	U字	不定形	
SK173	424	182	36	箱	不定形	
SK174	541	111	28	箱	不定形	
SK175	36	32	10	U字	円形	

番号	長cm	幅cm	厚cm	断面形	平面形	備考
SK176	118	52	18	V字	楕円形	
SK177	98	75	24	箱	不定形	
SK178	179	103	13	箱	不定形	
SK179	97	33	14	U字	楕円形	
SK180	566	138	16	箱	不定形	
SK181	144	84	28	U字	楕円形	
SK182	(560)	42	15	U字	楕円形	
SK183	63	44	22	U字	楕円形	
SK184	143	103	(8)	箱	不定形	
SK185	163	114	24	U字	不定形	
SK186	175	134	30	U字	楕円形	
SK187	15	36	23	U字	楕円形	
SK188	65	49	22	U字	楕円形	
SK189	50	25	20	U字	楕円形	
SK190	63	45	30	U字	楕円形	
SK191	52	42	21	U字	楕円形	
SK192	108	80	9	?	不定形	
SK193	155	128	56	U字	楕円形	
SK194	62	55	12	U字	楕円形	
SK195	(221)	(111)	(11)	箱	不定形	
SK196	(74)	(39)	(16)	U字	?	
SK197	113	92	10	箱	不定形	
SK198	(230)	(99)	(44)	U字	?	
SK199	248	206	21	箱	不定形	
SK201	(193)	(120)	(21)	箱	不定形	
SK202	(537)	262	(48)	U字	不定形	
SK203	(364)	70	27	箱	方形	
SK204	(218)	(80)	11	箱	不定形	
SK205	(375)	123	13	箱	不定形	
SK206	32	111	88	U字	楕円形	
SK207	(62)	(25)	(15)	V字	?	
SK208	(177)	129	34	U字	不定形	
SK209	120	82	20	U字	楕円形	
SK210	80	32	27	U字	不定形	
SK211	(200)	128	15	U字	不定形	
SK212	99	82	48	U字	楕円形	
SK213	97	76	34	U字	楕円形	
SK214	85	56	-	U字	楕円形	
SK215	58	48	20	U字	楕円形	
SK216	(250)	194	47	U字	不定形	
SK217	68	42	8	U字	楕円形	

### C区

番号	長cm	幅cm	厚cm	断面形	平面形	備考
SD10	(2038)	143	70	箱		
SD68	(146)	(282)	(27)	箱		
SD69	(427)	37	17	U字		
SD60	(895)	(138)	(85)	U字	?	
SD61	(960)	73	14	U字		
SD62	(1069)	148	20	箱		
SD63	(389)	191	17	箱		
SD64	-	93	21	箱	屈曲	
SD65	(400)	83	8	U字		
SD66	373	31	9	U字		
SD67	(154)	46	12	U字		
SD68	343	27	8	U字		
SD69	(382)	37	9	U字		
SD70	315	36	12	U字		
SD71	(492)	34	17	U字		
SD72	(472)	35	11	U字		
SD73	(666)	37	17	U字		
SD74	(536)	32	12	U字		
SD75	(702)	47	13	U字		
SD76	(562)	35	18	U字		
SD77	(602)	41	15	U字		
SD78	214	33	6	U字		
SD79	333	30	11	U字		
SD80	(145)	42	7	U字		
SD81	(124)	32	7	U字		
SD82	(787)	80	30	U字	円形	

番号	長cm	幅cm	厚cm	断面形	平面形	備考
SD63	(628)	59	13	U字		
SD64	533	54	20	U字		
SD65	(667)	71	31	U字		
SD66	(485)	81	11	U字		
SD67	(2166)	196	65	U字		
SD68	(243)	56	2	箱		
SD69	703	93	10	箱		
SD70	301	35	11	U字		
SD71	(297)	57	17	箱		
SD72	(279)	48	9	箱		
SD74	(120)	56	?	?		
SK48	113	98	18	U字	楕円形	
SK49	65	64	6	箱	方形	
SK50	64	62	43	箱	方形	
SK51	101	46	12	箱	楕円形	
SK52	167	73	22	U字	不定形	
SK53	(78)	(57)	(7)	箱	?	
SK54	138	125	36	U字	円形	
SK55	61	49	15	U字	楕円形	
SK57	165	114	12	箱	楕円形	
SK58	53	45	-	U字	楕円形	
SK59	48	40	8	U字	楕円形	
SK60	-	(126)	(59)	U字	不定形	
SK61	(118)	(75)	(15)	箱	不定形	
SK62	165	127	44	U字	楕円形	
SK63	142	125	45	U字	円形	

## D区

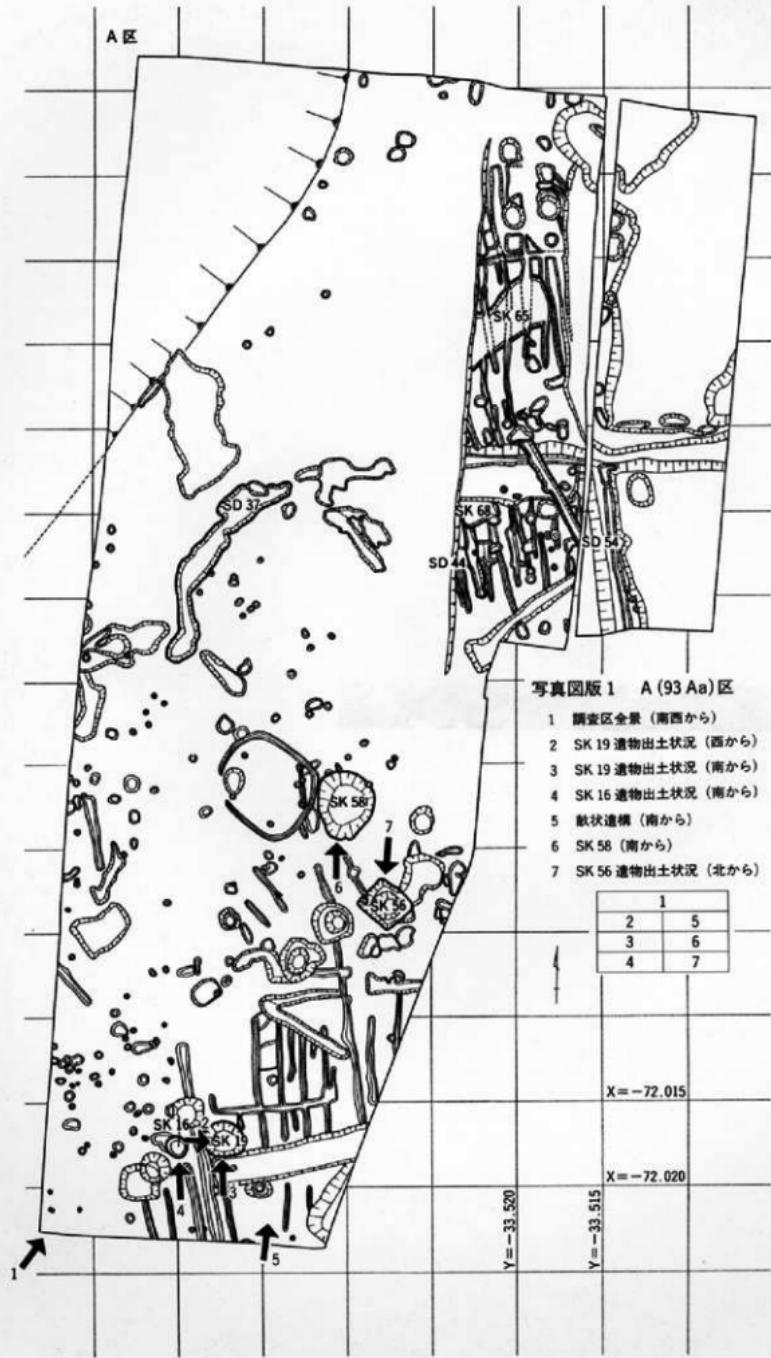
番号	底cm	幅cm	深cm	断面形	平面形	備考	番号	底cm	幅cm	深cm	断面形	平面形	備考
SK64 (136)	(118)	35	黒	方形			SD41	662	50	17	黒		
SK65	84	52	29	黒	楕円形		SD42	206	55	14	U字		
SK66	101	65	58	U字	円形		SD43 (1674)	50	10	黒			
SK67	72	49	30	U字	楕円形		SD45	266	43	13	黒		
SK68	108	98	45	U字	円形		SD46	75	40	9	黒		
SK69	96	75	11	U字	楕円形		SD47	306	48	10	黒		
P01	40	35	13	U字	円形		SD48	465	45	10	黒	楕円形	
P02	35	32	16	U字	円形		SD49 (319)	32	4	黒			
P03	36	30	18	U字	円形		SD50 (170)	42	12	U字			
P04	35	30	11	U字	円形		SD61 (238)	33	6	黒			
P05	52	40	9	U字	不定形		SD62 (2537)	130	25	黒			
P06	48	37	18	U字	円形		SD63 (1707)	135	13	黒			
P07	37	34	16	U字	円形		SD64	450	25	11	黒		
P08	42	33	7	U字	楕円形		SD65 (520)	20	6	黒			
P09	38	32	14	箭	円形		SD66 (2006)	84	17	黒			
P10 (311)	30	8	U字	円形			SD67 (623)	90	16	黒			
P11 (70)	30	22	U字	楕円形			SK01	151	114	19	U字	方形	
P12	66	55	10	U字	楕円形		SK02	114	(60)	26	U字	?	
P13	28	19	11	U字	楕円形		SK04	64	34	13	U字	楕円形	
P14	41	38	13	U字	楕円形		SK05	143	96	19	U字	不定形	
P15	70	39	12	U字	楕円形		SK06	89	64	28	U字	楕円形	
SB01	334	280	-				SK07	106	83	21	U字	楕円形	
SD01 (743)	103	35	黒				SK08	70	51	22	U字	楕円形	
SD02 (3057)	160	54	黒				SK09	54	28	3	U字	楕円形	
SD03 (1837)	70	23	黒				SK10	46	40	16	箭	方形	
SD04 (635)	55	13	黒				SK11	65	45	24	箭	楕円形	
SD05 (1340)	58	12	黒				SK12	42	42	6	U字	円形	
SD06 (1020)	48	11	黒				SK13	122	74	12	円	方形	
SD07 (1225)	44	10	黒				SK14	66	52	8	U字	楕円形	
SD08 (675)	65	8	黒				SK15	62	50	9	U字	楕円形	
SD09 (1550)	460	35	U字			= 90C/SD10	SK16 (1715)	765	33	黒	方形		
SD10 (5640)	203	62	U字				SK17	106	105	28	黒	方形	
SD11 (2770)	139	24	U字				SK18	65	52	10	黒	方形	
SD12 (978)	53	14	U字				SK19	162	107	50	U字	楕円形	
SD13 -	-	(21)	U字	屈曲			SK20 (96)	85	16	黒	方形		
SD14 -	-	197	44	U字	屈曲		SK21	118	95	37	U字	円形	
SD15 (1053)	120	45	U字	屈曲			SK22 (362)	125	45	35	長楕円形		
SD16	350	60	16	U字			SK23	236	106	25	黒	不定形	
SD17	190	63	12	U字			SK24 (150)	(27)	(19)	U字	?		
SD18 -	-	175	20	U字			SK25	197	83	43	南型	不定形	
SD19	616	50	22	U字			SK26 -	120	42	42	U字	?	
SD20 (542)	75	25	U字				SK27 (41)	50	13	黒	?		
SD21 (1413)	145	43	U字				SK28 -	(143)	33	黒	?		
SD22 -	-	137	7	U字	屈曲		SK29	138	122	46	U字	円形	
SD23 (316)	32	12	U字	屈曲			SK30	106	76	8	U字	楕円形	
SD24 (476)	60	7	U字				SK31	165	105	41	黒	楕円形	
SD25 -	-	67	黒				SK32	55	48	15	U字	楕円形	
SD26 (1800)	36	7	黒				SK33	212	184	41	黒	楕円形	
SD27	30	15	黒				SK34	66	44	28	U字	楕円形	
SD28 (355)	46	-	黒				SK35	35	28	22	U字	円形	
SD29 (236)	70	19	黒				SK36	302	130	45	U字	西洋梨形	
SD30 (365)	46	13	黒				SK37	55	36	19	黒	楕円形	
SD31 (260)	219	6	黒				SK38	69	67	11	黒	円形	
SD32 (80)	36	7	黒				SK39	137	122	33	U字	楕円形	
SD33	218	66	15	黒			SK40	252	223	59	黒	楕円形	
SD34 (146)	(36)	(19)	黒				SK41	290	(265)	44	黒	円形	
SD35 (417)	51	10	黒				SK43	51	43	23	U字	円形	
SD36 (511)	30	14	U字				SK44	264	146	16	黒	不定形	
SD37 (466)	36	11	U字				SK45	43	39	7	U字	円形	
SD38	168	39	9	U字			SK46	90	63	10	黒	楕円形	
SD39	212	58	10	黒			SK47	43	37	16	U字	円形	
SD40	799	40	12	黒									

---

# 図版

---





写真図版 1 A (93 Aa) 区

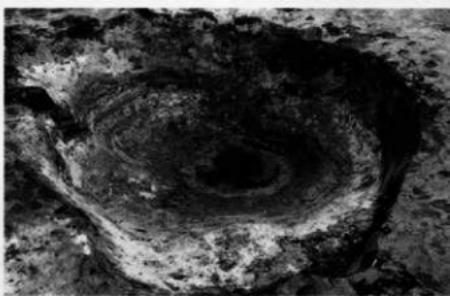
- 1 調査区全景 (南西から)
- 2 SK 19 遺物出土状況 (西から)
- 3 SK 19 遺物出土状況 (南から)
- 4 SK 16 遺物出土状況 (南から)
- 5 置状遺構 (南から)
- 6 SK 58 (南から)
- 7 SK 56 遺物出土状況 (北から)

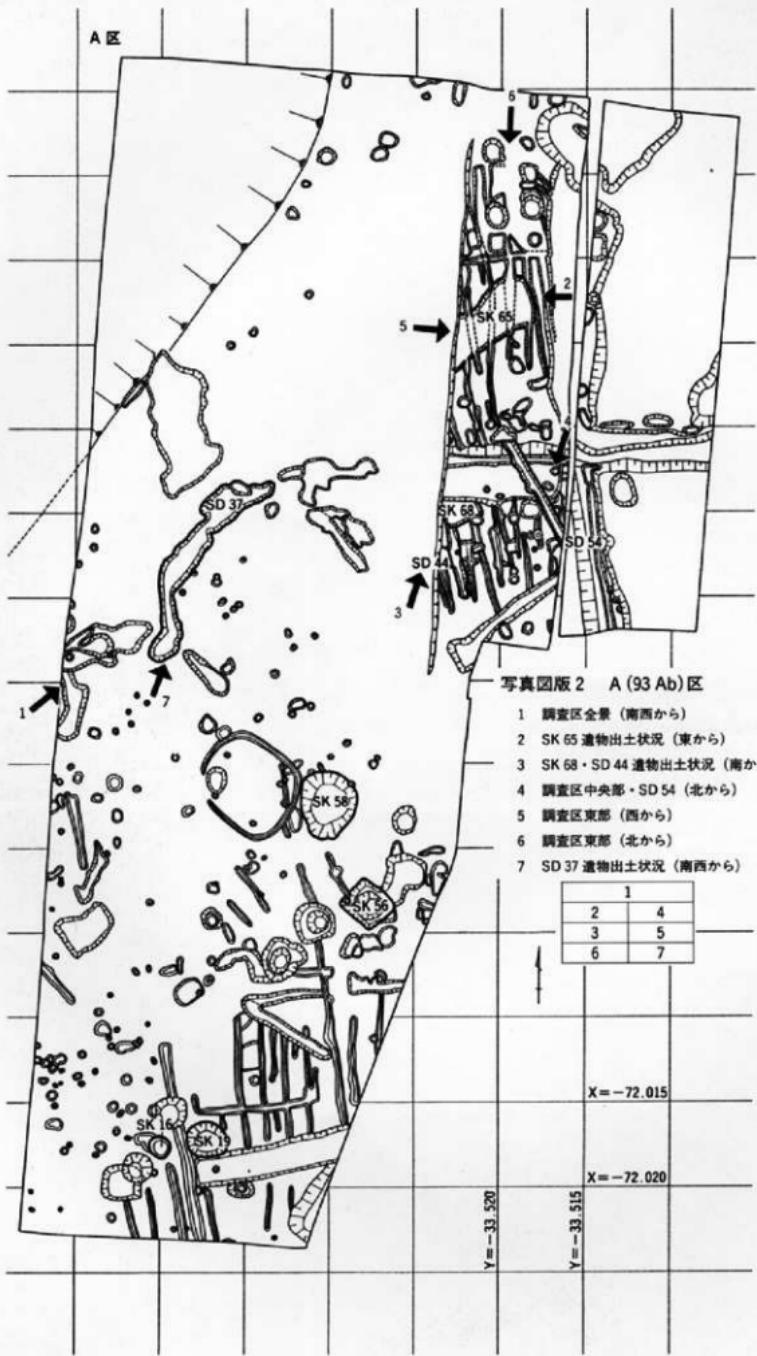
1	2	5
3	6	
4	7	

X = -72.015

Y = -33.520

X = -72.020  
Y = -33.515





写真図版2 A (93 Ab)区

- 1 調査区全景 (南西から)
- 2 SK 65 遺物出土状況 (東から)
- 3 SK 68・SD 44 遺物出土状況 (南から)
- 4 調査区中央部・SD 54 (北から)
- 5 調査区東部 (西から)
- 6 調査区東部 (北から)
- 7 SD 37 遺物出土状況 (南西から)

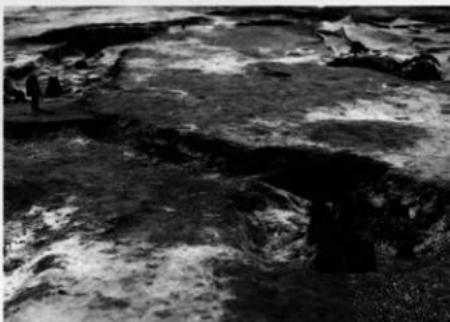
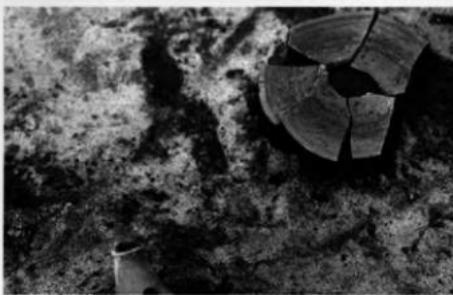
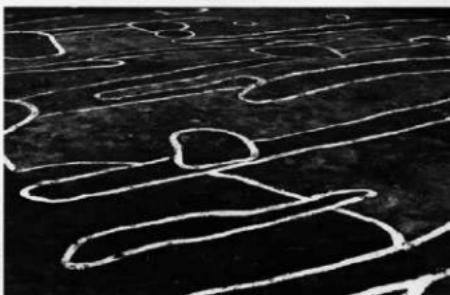
1
2
3
4
5
6
7

X = -72.015

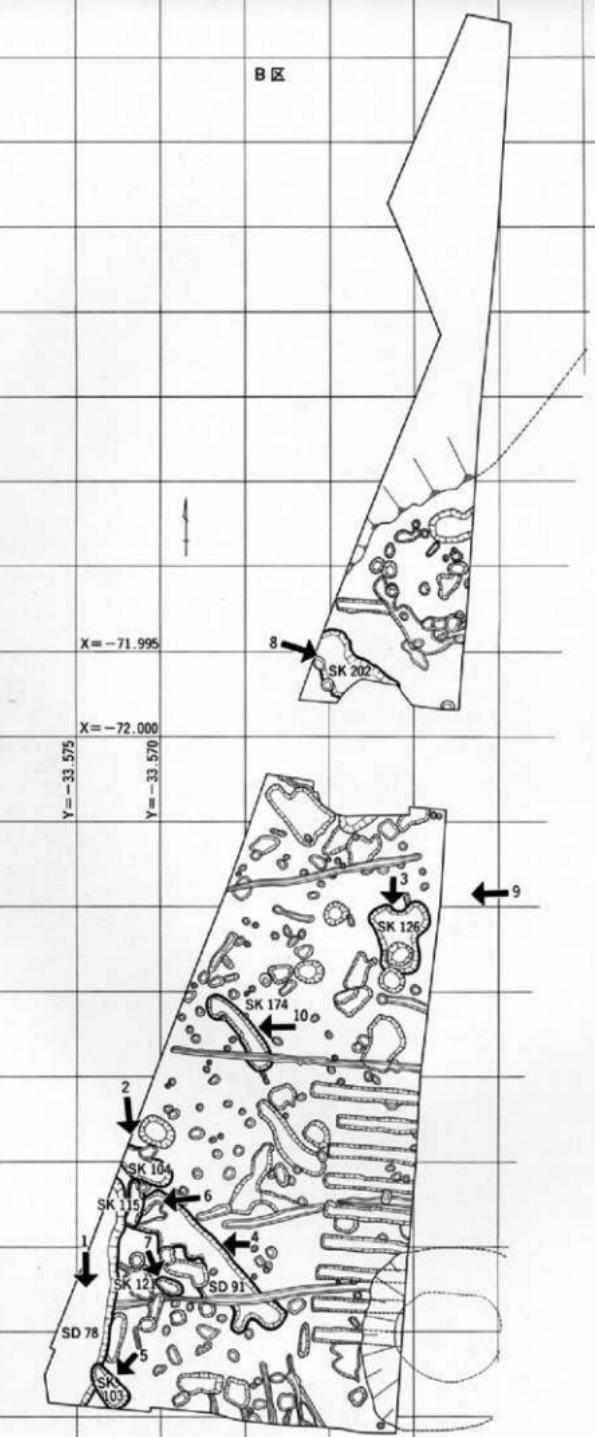
X = -72.020

Y = -33.520

Y = -33.515



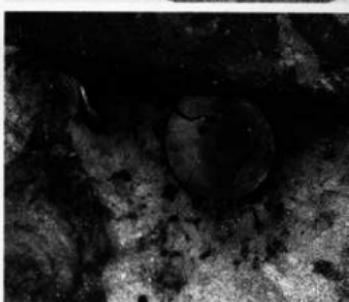
B区

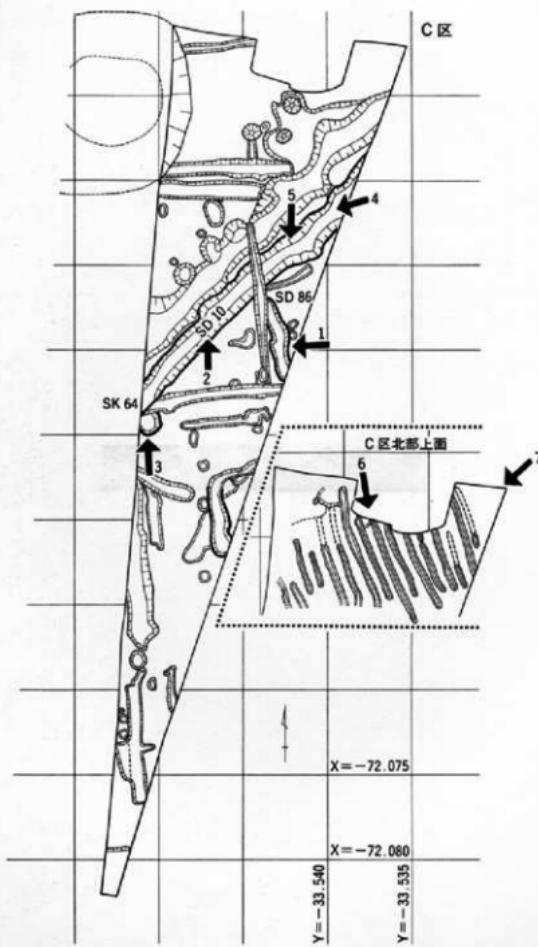


写真図版3 B(93B)区

- 1 SD 78 地面 (北から)
- 2 SK 104 遺物出土状況 (北東から)
- 3 SK 126 遺物出土状況 (北から)
- 4 SD 91 遺物出土状況 (西から)
- 5 SK 103 遺物出土状況 (北から)
- 6 SK 115 地面 (東から)
- 7 SK 121 遺物出土状況 (東から)
- 8 SK 202 遺物出土状況 (西から)
- 9 調査区中央部 (東から)
- 10 SK 174 遺物出土状況 (東から)

1	6
2	7
3	8
4	9
5	10

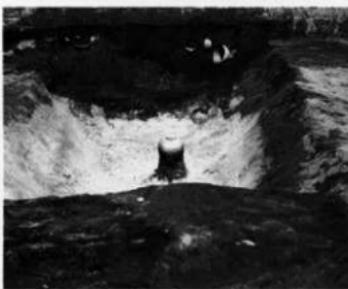


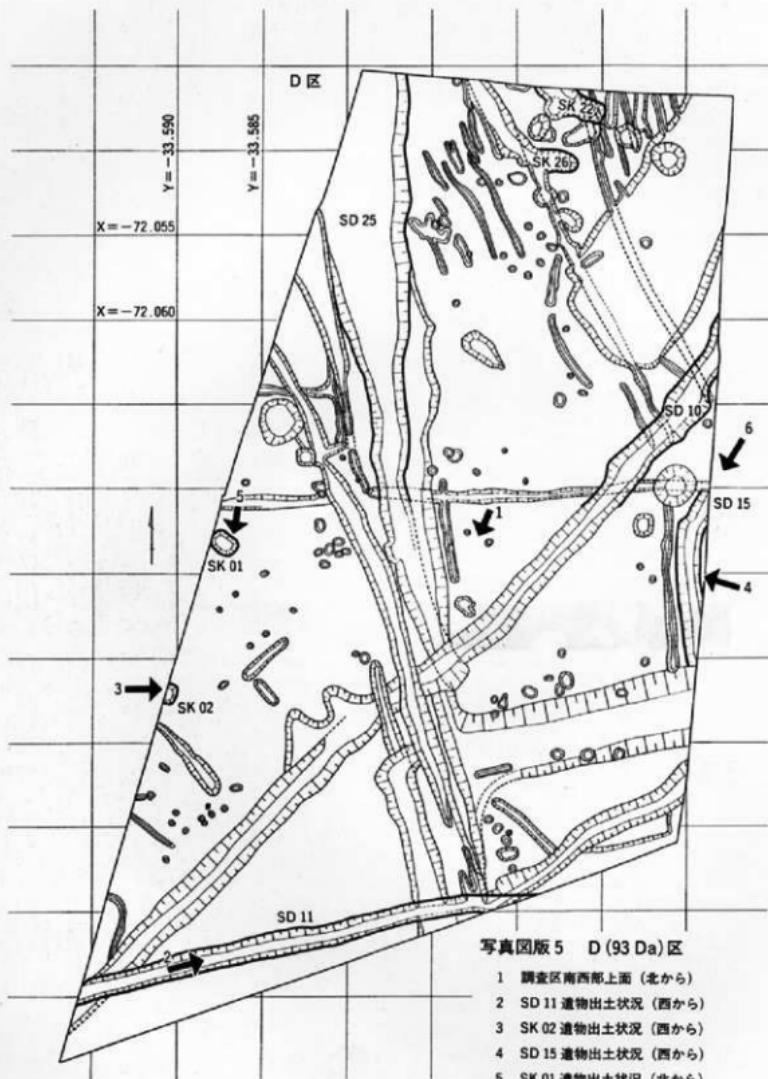


写真図版 4 C (93C) 区

- 1 SD 86 遺物出土状況（東から）
- 2 SD 10 遺物出土状況（南西から）
- 3 SD 64 遺物出土状況（南から）
- 4 SD 10 遺物出土状況（北東から）
- 5 SD 10 遺物出土状況（北から）
- 6 欽状遺構（北から）
- 7 調査区全景（北東から）

1	3
2	4
5	
6	
7	

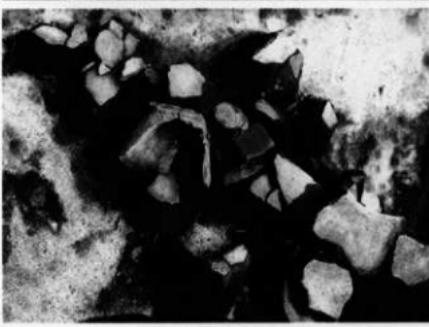
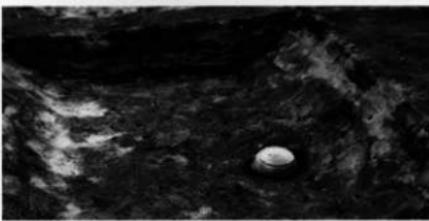
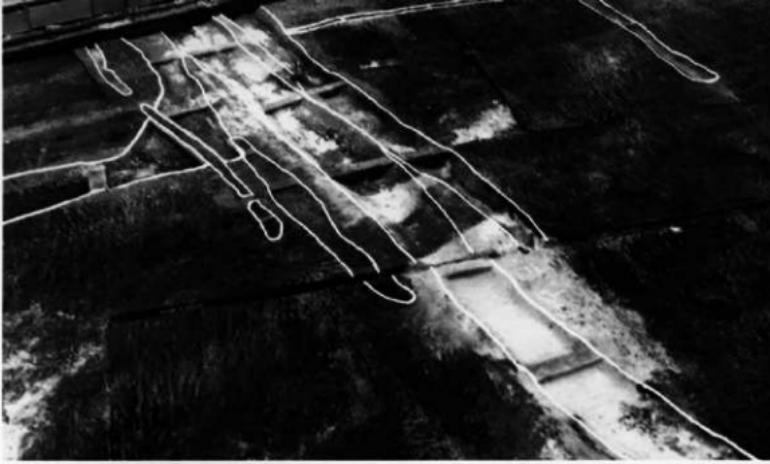


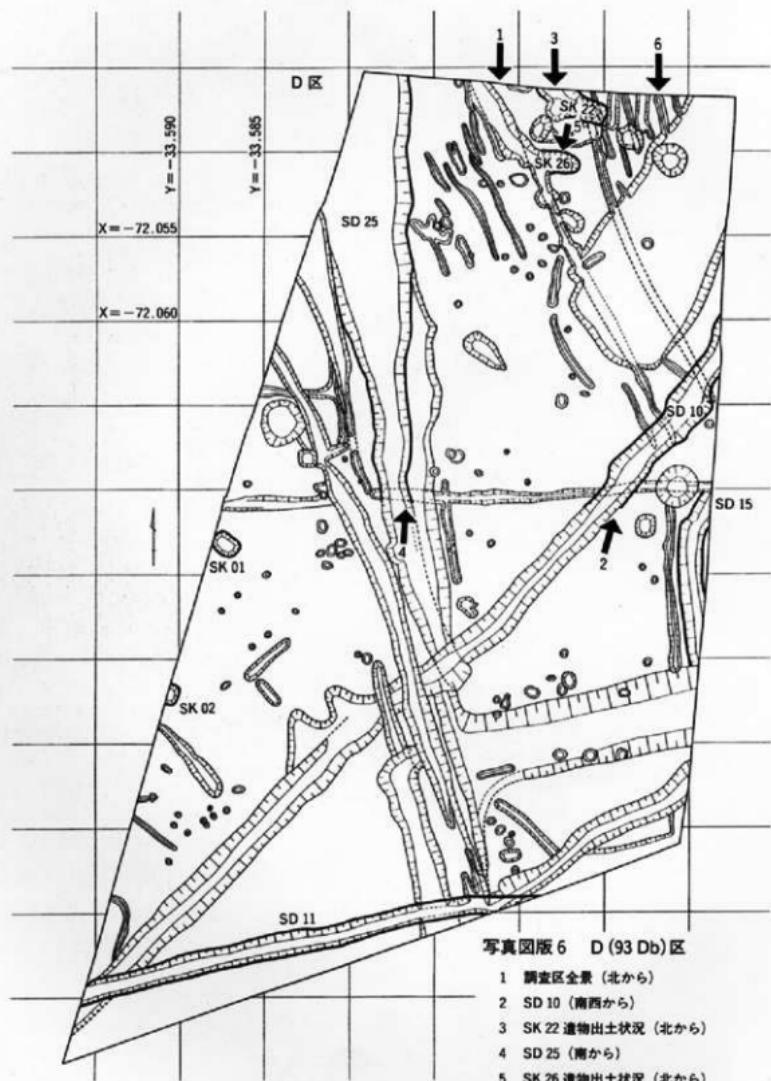


写真図版 5 D (93 Da) 区

- 1 調査区南西部上面（北から）
- 2 SD 11 遺物出土状況（西から）
- 3 SK 02 遺物出土状況（西から）
- 4 SD 15 遺物出土状況（西から）
- 5 SK 01 遺物出土状況（北から）
- 6 調査区全景（北から）

1	
2	4
3	5
6	

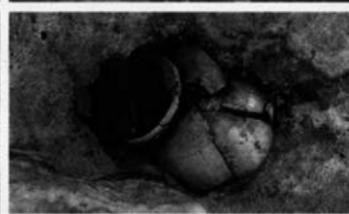
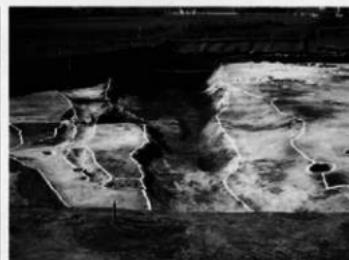
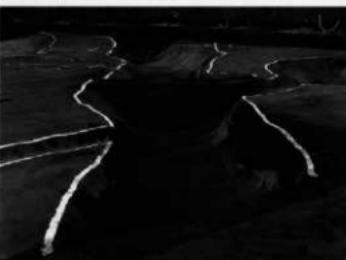


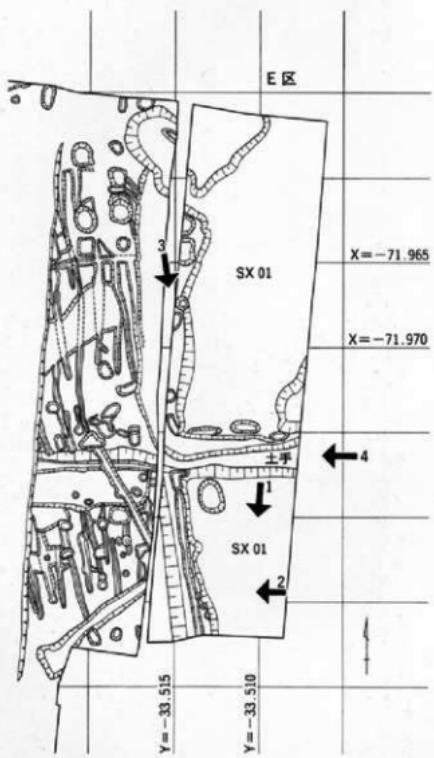


写真図版 6 D (93 Db) 区

- 1 調査区全景（北から）
- 2 SD 10（南西から）
- 3 SK 22 遺物出土状況（北から）
- 4 SD 25（南から）
- 5 SK 26 遺物出土状況（北から）
- 6 調査区北東部（北から）

1	
2	4
3	5
6	

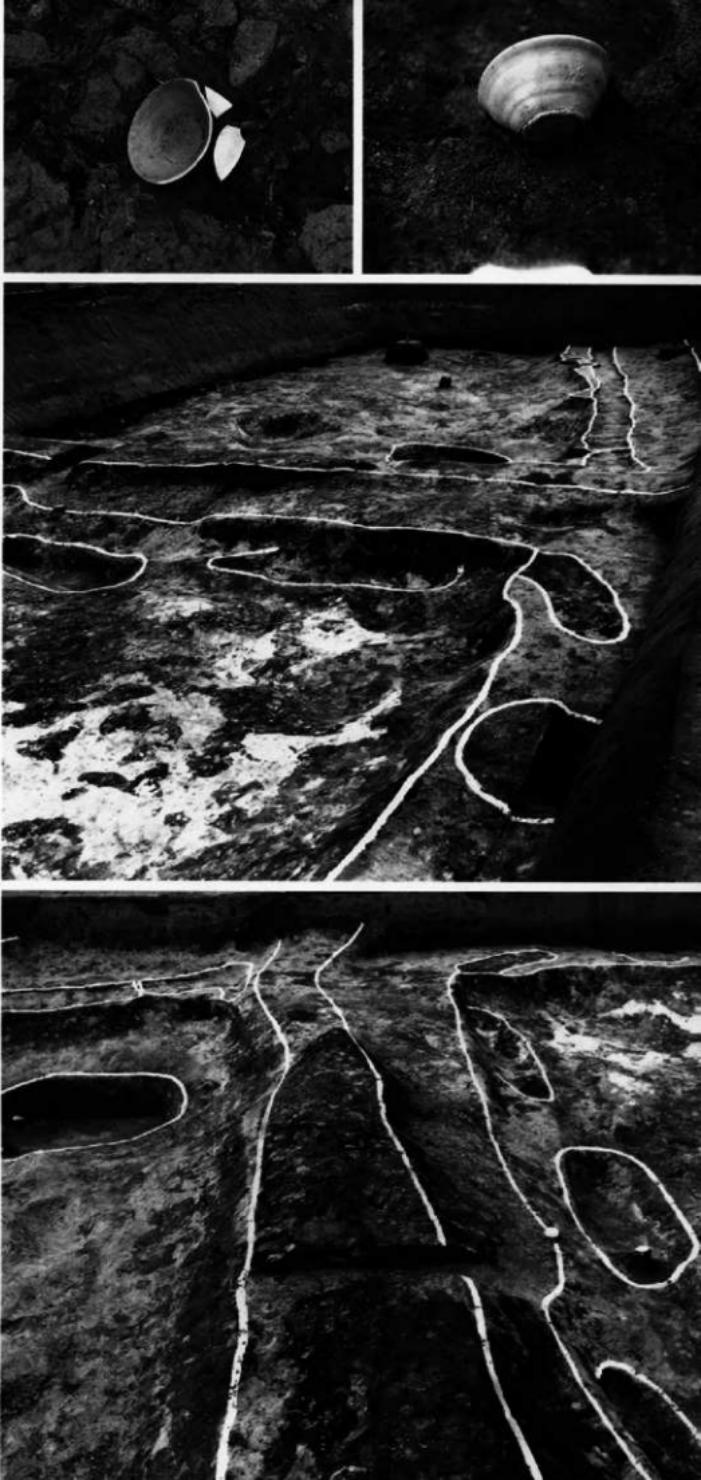




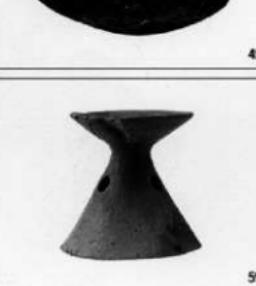
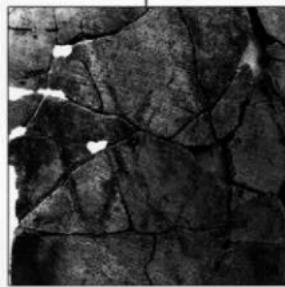
写真図版7 E(94E)区

- 1 SX 01 遺物出土状況（北から）
- 2 SX 01 遺物出土状況（東から）
- 3 調査区南部（北から）
- 4 土手完掘状況（東から）

1	2
3	
4	



図版8 出土土器(1)



圖版9 出土土器(2)



图版 10 出土土器(3)



図版 11 出土土器(4)



270



279



307



271



280



308



309



272



283



310



274



286



318



278



295



328

图版 12 出土土器(5)



345



359



371



343



362



374



347



364



376



380



354



369



357



370

図版 13 出土土器(6)



175



285



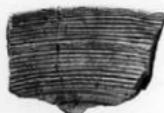
208



70



330



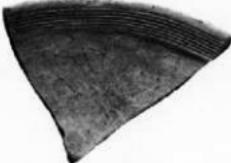
245



58



388



226



396



395

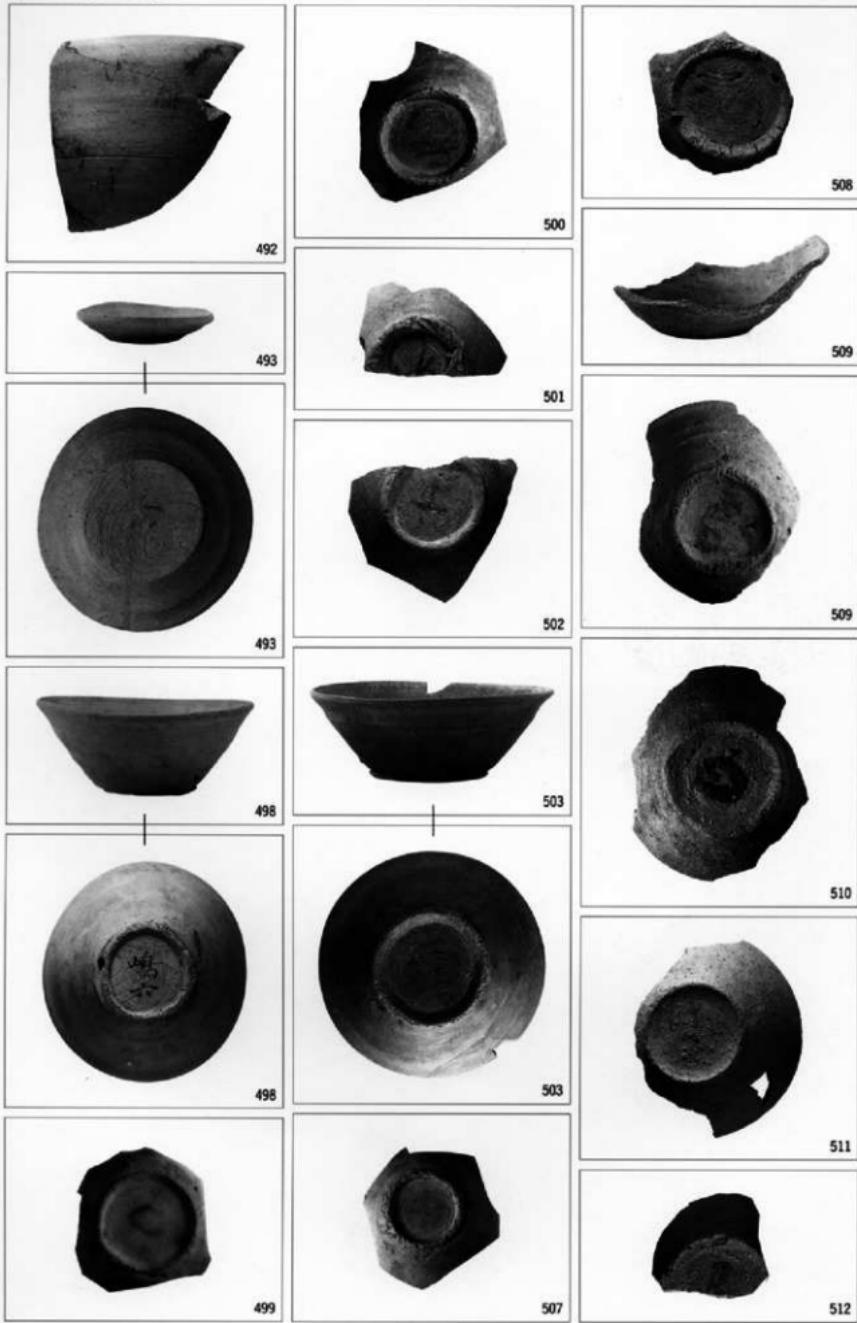


392

図版 14 出土土器(7)



図版 15 出土土器(8)



図版 16 出土土器(9)



514



534



S-1



519



535



S-2



522



525



526



527



531



532



536



542



S-4



S-5



S-6

図版 17 出土土器(10)



S-7



S-11



S-17



S-8



S-12



S-24



S-9



S-13



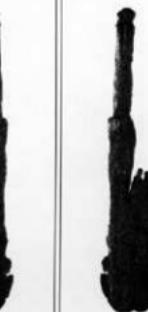
S-10



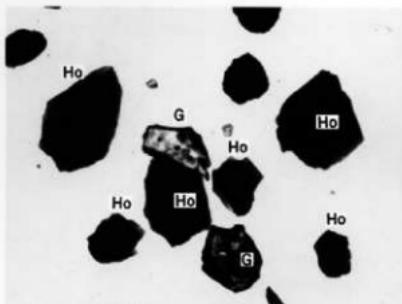
S-15



W-1



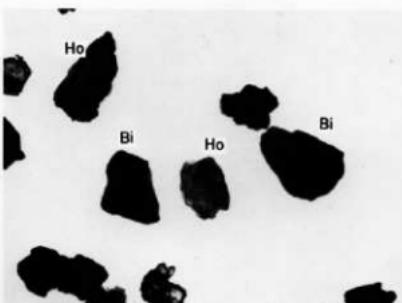
図版 18 胎土中の重鉱物



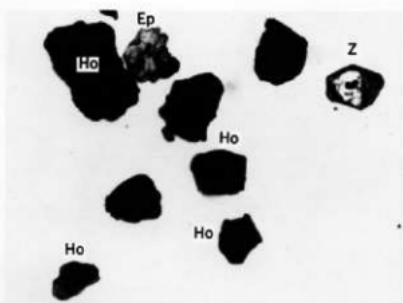
1. I型 (試料番号 2)



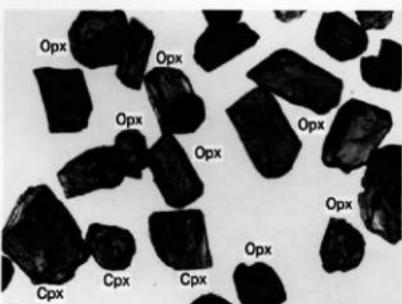
2. III型 (試料番号 18)



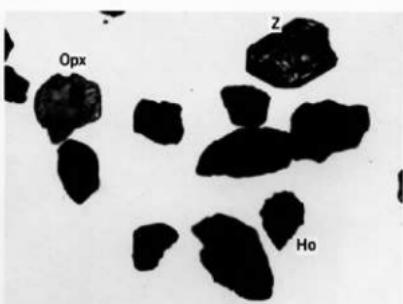
3. IV型 (試料番号 20)



4. V型 (試料番号 35)



5. A型 (試料番号 10)



6. C型 (試料番号 45)

Opx:斜方輝石, Cpx:单斜輝石, Ho:角閃石, Bi:黒雲母, Z:ジルコン, G:ザクロ石, Ep:緑レン石,

0.5 mm

## 北道手遺跡 1993・94年度

### 発掘調査に協力された方々

若杉隆治 川上辰男 前田利昇 安藤慶子  
岩室一榮 柏谷和美 小橋すみ江 上村 荘  
伊藤美枝子 沢田綾子 鈴木みえ子 酒井はるえ  
小笠原文代 小関真智子 高崎啓治 浜口万里  
東 瞳子 池田 智 伊藤 隆 伊藤義隆  
猪口一彦 岡村三子 加藤美和子 萩谷利幸  
五藤 荘 後藤 茂 佐々木清孝 須賀弘之  
千田隆之 野垣豊子 丸井芳子 山田清子  
広瀬敏雄 水野喜代子 蔵下敏治

(順不同、敬称略)

## 報告書抄録（記載様式案）

ふりがな	きたどうていせき
書名	北道手遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第67集
編著者名	高橋信明・服部俊之・鬼頭剛
編集機関	財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL0567-67-4161
発行年月日	愛知県埋蔵文化財センター 西暦 1996年8月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりなが 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査機関	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北道手	愛知県一宮市大字光明寺	23203	— (02095) 田所	35度 21分 00秒	136度 47分 51秒	93年度 19930413～ 19931025 94年度 19941130～ 19941220	5387m <sup>2</sup> 500m <sup>2</sup>	東海北陸自動車道建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
北道手	集落	古墳前期	掘立柱建物1棟 溝・土坑など 烟	土陣器・土鍬 石製品・木製品	水辺の祭祀に関する遺跡か
		古代	溝・土坑	須恵器	
		中世	溝など	灰陶系陶器（墨書き） 施釉陶器 常滑 中国磁器 土師器等 他	（古墳時代前期以後（中世以前）の断層 中世の地震による砂脈、流動化層濃尾地震（1891年）による砂脈）

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第67集

北道手遺跡

1996年8月30日

編集 財團法人  
発行 愛知県埋蔵文化財センター  
印刷 株式会社 クイックス